

ルドルフ・シュタイナー
『言語霊』

Sprachgenius

『精神科学的な言語考察 教育者への示唆』
GA299

1919年12月26日から1920年1月3日まで

シュトゥットガルトにおいて

自由ヴァルドルフ学校の教師たちのために行われた全6回の講演。

〔目次〕

第一講：シュトゥットガルト、1919年12月26日

言語発展の簡潔な歴史的概観。ドイツ語の言語霊（言語精神）が持つ変容能力。キリスト教の流入、ローマの南部からの学校教育、フランスおよびスペインの潮流によるドイツ語の語彙の発展。最後に19世紀、イギリスから多くの要素が流入する。後年の流入に伴い、ドイツ語の言語霊が持つ変容能力は後退する。言語における感情的要素は、意味（論理）的要素の前に次第に退いていく。

第二講：1919年12月28日

言語的生命を有機的に考察するための手がかり。内的な魂的なものは、外的な言語的なものの中にその表現を見出す。言語形成力の漸次的な衰退。方言。言語はますます無意識的な意志要素になってきた。時代を経る中での言葉の意味変化。言語的なものが具象から抽象へと次第に脱却していくこと。言語的契機を魂的なものへと還元すること。

第三講：1919年12月29日

言語の変容力と精神生活（霊的生活）との関係。ヨーロッパ諸言語の内的なつながり。ケルト的要素の刻印。言語の変容の道と言語地質学的な層。諸変容はもはや外界への適応ではなく、民族魂的要素の内的に自立した成果である。ギリシャ・ラテン語について。高地ドイツ語（標準ドイツ語）の要素の内部において、完全に純粋な概念へと到達し、その中で活動する力が展開された。

第四講：1919年11月31日

民族魂の発展の模範例としての言語史的現象。言語史的なものと言語心理学的なもの。言語発展の初期において、人間はその感情を完全に響き（音）に寄り添わせ、子音の響きによって外的な出来事を模倣し、母音によってその中で生じる間投詞や感情の響きを模倣する。話すこと自体は下意識の領域に沈み、意識は思考を捉えようとする。より高い段階において、かつて音や音節で行われたのと同様のプロセスが、現在は言葉（単語）によって経験される。

第五講：1920年1月2日

言語における現実感覚と感情の変化。言語学における唯物論的考察の帰結。古い時代における言語変化とその変容の観察。唯物論的な言語学を行おうとしないのであれば、感情世界の変容を研究しなければならない。音構成と語彙構成は、本来は主観的体験において緊密に結びついていたが、のちに分離する。音構成は無意識へ向かい、表象構成は意識へと向かう。抽象的思考能力の漸次的な形成。

第六講：1920年1月3日

言語現象とその発展を見通すための指針。外的な事実を模倣する要素。言語的な身振り（ジェスチャー）は、駆使できる空気の有機体を用いて形成される。直観されたもののさらなる内面化。かつては言葉の中に押し込められていた「私」と「あなた」が、言葉から分離する。ラテン語において、言語霊は自己凝視（エゴイズム）へと至り、「私」と「あなた」を前置する。言語は、人間における思考的要素と意志的要素の合流点となる。方言においては、音を展開する中でいまだ思考されている。これに対し高地ドイツ語においては意志をもって話され、思考は音の展開と並行する現象として随伴する。方法論的・教育論的な示唆。

「Sprachgenius」とは、

普通の場合、ドイツ語では多くの外国語を非常に短い期間でマスターできるような「マルチリンガル」や「言語の天才」を指しているが、シュタイナーは、その言葉をドイツ・ロマン主義における「Sprachgenius」の流れから、言語を単なる記号や道具としてではなく、一種の霊的な働きとして捉えている。

人間が言葉を発するとき、そこには目に見えない「言語霊 (Sprachgenius)」が働いていて、母音や子音の響き一つ一つに宇宙的な力 (生命力や感情) が物質的にあらわれているとしているのである。

その視点からシュタイナーは、「音が持つ宇宙的な力を肉体や声で表現する」ためのさまざまな示唆を行っているが、それは、ヘルダーやフンボルトを中心としたドイツ・ロマン主義における言語哲学の「Sprachgenius」、つまり、言語とは単なる記号ではなく、その民族固有の「世界観」や『生命力』そのものであるという思想とある意味で、言葉の一音一音に神が宿っているという日本における「言霊 (ことだま)」の思想をあわせもっているともいえる。

ドイツ・ロマン主義哲学における「Sprachgenius」という言語に固有の精神が宿るという視点は、フランスを中心とする普遍主義 (「どの言語も本質的には同じ論理構造を持つ」という考え方) への反発があったことから生まれたようだが、それがのちに20世紀のアメリカの言語人類学における話す言語によって人間の思考が規定されるという「サピア・ウォーフの仮説 (言語相対論)」へと直接つながっている。そして現在では、「言語が思考を完全に決定する」というのではなく、「言語が思考や認知の傾向に影響を与える」という考え方がもっぱら支持されているようである。

シュタイナーの「Sprachgenius」 (言語霊) についての視点は、主にGA 299『精神科学的言語考察』『Geisteswissenschaftliche Sprachbetrachtungen』 (1919年12月26日～1920年1月3日、全6講) において、単なる「言語の傾向」や「文法の規則」ではなく、魂・霊的な実在として働いている、生き生きとした創造的原理として論じられている。

要点は以下の通り。

一つの言語は、ただの道具や記号の集まりではなく、その民族の魂の生活全体を形作り、変容させる「霊 (Genius)」として働いている。シュタイナーはこれを「言語霊 (Sprachgeist)」と呼び、個人の意識を超え、民族魂 (Volksseele) が言語を通じて表現される、集団的な霊の実体として扱っている。

それは、特にゲルマン語 (ドイツ語) の歴史においては、外来語 (キリスト教・ラテン語・フランス語など) を内面的に深く取り込み、ねじ曲げて独自のドイツ語化する古い時代に特に強かった「言葉を創造・変容させる力」であり、古い時代ほどこの「言語の天才」は柔軟で強力だったが、近代になるにつれて硬化・衰退し、外来語をほとんど変えずに取り込むようになる、と指摘している。

シュタイナーは「言語霊」の働きを、音のレベルで詳しく説明し、子音 (Konsonanten) は、外界を真似る意志的な力であり、母音 (Vokale) を魂の内面が音に浸透する力であるとしているが、古い言語では、意味 (Sinn) が音 (Laut) の中に深く浸透しており、方言にその名残が見られるものの、近代の抽象的な共通語では、この生きたつながりが失われているとしている。

「言語霊」とは、言語を単なる伝達手段ではなく、民族の魂の発展史そのものを担う、客観的で創造的な霊的な実在であって、シュタイナーはこれを、物質主義的な言語学に対置する精神科学的な視点として示唆しているのである。

●第一版への序文

本書は、医学を精神科学的に追究し浸透させたいという探求心から生まれました。本書が対象としているのは、個々の医学的あるいは生理学的な問題にとどまらず、人間の精神的な姿を再び取り戻すことを志す医師や科学者たちです。その精神的な人間の姿は、特に過去1世紀の間に、蓄積された膨大な知識の分量の前に、ますます覆い隠されてしまっていました。

この場であらかじめ述べておくべき多くのこと、特に人間の意識の発展や、とりわけ医学の発展について、私は本書の準備作業から生まれた著書『ゲーテと治療芸術 (Goethe und die heilkunst) 』および『死のイメージと意味 (vom bild und sinn des todes) 』の中で詳しく述べました。そのため、一般的な方法論や歴史的な観点については、それらの著書を参照していただくようお願いいたします。

先行する上記の著書と同様に、本書においても、私はルドルフ・シュタイナーの思想世界の中から、私自身にとって実りあるものであると証明されたものだけを記述するよう試みています。その結果、内容に一定の制限が生じることとなりましたが、これは原則的なものではなく、あくまで一時的なものとみなされるべきです。その一方で、この観点に立つと、限られた枠組みの中では表現しきれなかったいくつかの詳細な事柄については、ひとまず割愛せざるを得ませんでした。

ルドルフ・シュタイナーは、その講義や記述において、しばしば単なる示唆を与えるにとどまりました。聴講者がそれを完全な意味での知識・認識とするためには、現象を観察することによって、あるいは他者の観察を利用すること、すなわち既存の文献を研究することによって、自分自身でそれらを苦勞して獲得しなければなりません。特に後者（文献研究）について、ルドルフ・シュタイナーは、ここ数十年の科学の発展によってもたらされた不可欠な課題であるとししばしば表現していました。なぜなら、文献には極めて重要な観察の成果が無限に蓄積されているからです。ただし、それらを実りある認識へと変えるためには、多くの場合、新しい観点のもとにそれらを置き直す（再評価する）必要があるのです。

1940年 ミカエル祭

ヴィースネック療養所

ブーヘンバッハ・バイ・フライブルク・イム・ブライスガウ

F. フーゼマン医学博士

Sanatorium Wiesneck, Michaeli 1940

Buchenbach bei Freiburg im Breisgau.

Dr. med. F. Husemann.

感謝する。

●第2版への序文

第一版が刊行されて以来、医学を取り巻く状況は大きく変化しました。当時すでに存在していた傾向が、より明確に表面化してきたのです。

一方では、特に抗生物質の発見によってもたらされた「治療への楽観主義」が目立ちます。あらゆる病気に対して効果のある治療薬を見つけ出すことは、もはや時間の問題であり、研究室の数の問題であるかのように思われています。治療とは、ますます大規模な「病原体狩り」と化しており、それによって医師の人間的な領域から、研究室という技術的な運営の場へとますます移行しているのです。

□第一講：シュトゥットガルト、1919年12月26日

●基本的な視点

ドイツ語の表層を覆う「ニス（外来の膜）」を剥がし、本来の言語形成力＝「言語の天才」の核心に迫る必要がある。それは、思考が人間の全存在により深く結びついていた古い魂の時代の力を再認識することにつながる。

この講義は、ヴァルドルフ学校の教育者たちに向けた即興の言語考察の導入部で、シュタイナーは、言語の発展を通じて人間の魂の生活がどのように表れるかを、特にドイツ語を例に考察している。

●要点

1) 言語と魂の関係

古い時代ほど、人間の魂の力と肉体の柔軟性が言語に強く結びつき、生き生きとしていた。時代が下るにつれて言語の内的な創造力（造語力・変容力）は硬化・衰退していく。現在では新しい思想を簡潔に表現する説得力のある造語が極めて困難になっている（例：「kraften」という試み）。

2) ドイツ語の形成力の歴史

18世紀後半～ゲーテ時代までは、まだ強い「内的な造形力」が残っており、「Bildung（教養）」「Weltanschauung（世界観）」などの言葉が生まれた。翻訳が難しい理由もここにある。ドイツ語は主語の位置が比較的自由で、定型化された表現に縛られにくい点が特徴だが、現代ではそれも失われつつある。

3) 外来語の大量流入と「言語霊（Sprachgeniu）」

ドイツ語は多くの外来要素を深く取り込み、変容させて「生粋のドイツ語」のように感じさせるほどになった。

〔第一の層〕

キリスト教とともに流入したラテン・ギリシャ系

（Segen ← signum、predigen ← praedicare、Schule ← schola、schreiben ← scribere、Tafel ← tabula など）。

〔第二の層〕

12世紀以降のフランス語影響（fein、Kumpan、Partei、Tanz、Schach、matt、kaputt など）。

軽やかで気さくな要素をドイツ語に持ち込んだ。

〔第三の層〕

スペイン・イタリア経由の言葉（bizarr、lila など）。

さらに後には英語からの影響（外面的な生活関連語）がある。

古い時代ほど「言語の天才」は外来語を内面的に深く変容させる力が強かったが、時代が下るにつれてその力は弱まり、言葉がほとんど変形されずに残るようになった。

4) 本来のドイツ語を探る「ふるい分け」

学校用語や日常生活の多くの言葉が実は外来語である。

（例：Riegel ← regula、Keller ← cellarium、Schuster ← sutor）

純粋な固有のドイツ語の例：Lehrer、Buchstabe、lesen など。

これらは古いゲルマン的な魂の生活を反映している。

5) 方言と古い言語の特質

共通語が抽象化する一方、方言（例：Blitz → Himlizzer）にはまだ自然の形態や意味が音の中に生き生きと宿っている。古い言語では「意味が音の中に深く浸透」していた。

●本文

第一講：シュトゥットガルト、1919年12月26日

友人たちの何人かからの要望があり、今回の滞在中に、皆さんに言語についても少しお話しすることになりました。自然科学講座のとき以上に申し上げなければなりません、このように急に決まった計画ですから、当然、この数時間の中で皆さんに語りうる内容は、きわめて断片的なものにとどまざるを得ません。これらの言語考察は、完全に即興で行われるものですから、自然科学的考察以上に、ある程度の寛容な心をもってお聞きいただく必要があります。したがって、ここでお話しできるのは、私たちのヴァルドルフ学校における授業、ひいては授業一般にとって、特に有益となりうるいくつかの手がかりを提示することだけです。

おそらく、およそ意図されている事柄を最もよく達成できるのは、私たちがいくつかの点について、ある種の歴史的な言語考察に結びつけていくことでしょう。ですから、本日お話しすることは、これからこの数時間の中で皆さんと共に扱っていく内容のための導入となる、多種多様な備考を大まかにつなぎ合わせたものとして受け止めていただきたいと思います。

ある民族の言語の発展を通じて、魂の生活そのものの発展がどのように表現されるかということは、まさにこのドイツ語においてよく観察できることです。ただし、人間と言語との関係は、どの時代においても常に同じというわけではない、ということを明確に認識しておく必要があります。ある民族の発展史をさかのぼればさかのぼるほど、人間の魂の力、そして人間の肉体の柔軟な力のうち、言語と結びついているあらゆるものが、ある意味でより生き生きとしているのを見出せます。

私自身、このことをしばしば実感してきました。私の著書に目を通していただければ、哲学的なテーマであっても、できる限りドイツ語で語ろうとするきわめて自覚的な試みがお分かりいただけるでしょう。この試みこそが、一部の反対派からまさに非難されている点であり、彼らは私の本の中で意識的に目指されている言語への取り組みに対して、激しく文句を言うほかなくなっているのです。

今日、ドイツ語において、言語をさらに発展させるような内的な、いわば生きた力を見出すことはすでに並大抵のことではありません。特に難しいのは、「意味の結合（Sinnangliederungen）」を見出すこと、つまり、ある意味を完全に適切な方法で表現するために何らかの言葉を取り入れようとすることです。例えば私は「kraften（力を及ぼす／力づける）」という、ふだんドイツ語であまり使われない言葉を試してみました。普段は受動的にしか表現されないものを、能動的な活動へと移行させようとしたのです。他の言葉でも同様の試みを行いました。私たちがゲーテの時代からわずか一世紀しか経っていないにもかかわらず、時代の発展に伴う新しい思想として取り込もうとする事柄を、簡潔に表現するような、説得力のある新しい造語を作ることは今日すでに困難になっています。

私たちは、例えば「Bildung（教養／形成）」という言葉がゲーテの時代より古くはない、ということに思い至りません。ゲーテの時代以前のドイツには、まだ「教養ある人（gebildeter Mensch）」は存在しませんでした。つまり、当時その意味で考えられていた対象に対して、まだそのような言い方をしなかったのです。ドイツ語は18世紀後半になってもまだ強い内的な造形力を保持していたため、ゲーテの時代になって初めて

現れた「Bildung」や、さらには「Weltanschauung（世界観）」といった言葉がまだ形成され得たのです。このような内的な言語形成をいまだ許容する言語的つながりの中で生きられることは、大きな幸運です。

このことは、自分の著書がフランス語や英語、あるいはその他の言語へ翻訳されるのを絶えず耳にする立場にいと、特に強く実感されます。翻訳者たちは額に汗して、できる限りの翻訳をします。しかし、誰かが翻訳を仕上げるたびに、別の誰かがそれを「目も当てられないほどひどい」と評し、誰もその翻訳に満足しません。そして事の本質に踏み込んでみると、本に書かれている多くの事柄が、翻訳ではその通りに表現できないという結論に達するのです。

私はそのような時、人々にこう答えています。「ドイツ語では、すべてが正しいのです。主語を第1番目、第2番目、あるいは第3番目の位置に置くこともでき、どれも多かれ少なかれ正しいのです」と。——これに対して、ある表現が絶対的な意味において「こう言うてはならない」とするようなペダンチック（学者ぶった）で俗物的な決まりは、ドイツ語においては、西欧の言語ほどにはまだ存在していません。

しかし、もし定型化された（ステレオタイプな）表現方法に縛られてしまったら、人間がどのような状態に陥るか考えてみてください。そこではもはや、個人の自由な思考は不可能であり、他人に伝えたい事柄を、実際には「集団の霊（精神）」の中でしか思考できなくなってしまうのです。これは西欧文明の民衆に大いに当てはまることであり、彼らは定型化された表現形式のなかで思考しているのです。

ご覧の通り、まさにドイツ語において、私が「言語霊（Sprachgenius）」と呼びたいものが、いかにして徐々に硬化していったかを観察することができます。現代の私たちは、ドイツ語においても、もはや定型的な形式から抜け出せなくなる段階へとすでに近づいているのです。ゲーテの時代にはそうではありませんでしたし、それ以前の時代であればなおさらそうではありませんでした。そしてこのことは、中央ヨーロッパの言語発展全体と深く結びついているのです。

比較的まだ新しい時代において、中央ヨーロッパから遥か東方に至る地域には、原始的な民衆が住んでいました。彼らは優れた精神的素質を持つてはいたものの、外部の文化は比較的原始的であり、その文化は多かれ少なかれ経済生活や、そこから発展しうる事柄のなかに厳格に収まっていた。

そして、まずは東ゲルマンの諸部族を経由するという回り道をして、ギリシャ人の精神文化の多くが取り入れられました。これにより、のちにドイツ語となったゲルマン語、すなわち中央ヨーロッパの言語のなかへ、ギリシャ的なものの多くが浸入したのです。

その後、キリスト教が南部から北部へと拡大していった何世紀ものあいだ、概念や理念、表象とともに、信じられないほど大量の言語的資産が流入しました。中央ヨーロッパの様々なゲルマン部族には、キリスト教によって伝達されるはずの最も重要な概念を、自分たちの言語から直接表現する可能性が本当にありませんでした。

私たちに伝承されている事柄でさえ、必ずしも真実を語っているとは限りません。例えば、いわゆる「Segnen（祝福する）」という行為は、本質的にキリスト教とともに広がったものに属します。この「祝福する」という特有の概念は、北欧ゲルマンの異教信仰には存在しませんでした。なるほど当時も呪文（Zaubersprüche）はありましたが、それらは魔術的なものであり、内部に魔術的な力を秘めていたものであって、本来の「祝福」ではなかったのです。

この「祝福する（segnen）」という行為は、根本的にはキリスト教によって初めて導入されたものであり、この動詞は名詞の「Segen（祝福）」と結びついています。これは古い時代に、キリスト教の影響下で取

り入れられた語形成です。そして、この語形成の元になっているのは「Signum（シグナム＝印、兆候）」です。つまり、キリスト教とともに「Signum」という言葉が流入し、そこから「Segen」や「segnen」が生まれたのです。

ここで、当時の「言語霊」がどれほど強力な言語形成力を持っていたかに、どうか注目してください。今日の私たちは、外来語をこれほど内面的に変容させ、ねじ曲げて、「signum」から「Segen」を生み出すようなことはもう到底できません。内面から湧き上がるような、創造的で言語を変容させる力がもはや深層から湧き上がってこないため、私たちはその外来語を外来語のまま保持してしまうでしょう。

今日すでに完全に生粋のドイツ語だと感じられている多くの言葉について、それらがキリスト教とともにやって来た「侵入者」にすぎないということを、私たちは自覚しなければなりません。

例えば「predigen（説教する）」という言葉を取り上げてみましょう。「Predigen」は「praedicare」にほかなりません。当時はまだ、この「praedicare」を内面的に変容させる可能性が残されていたのです。

「Predigen」は本来のドイツ語では全くなく、同じく説教することを意味する「praedicare」という単語の変容にすぎません。私たちには、このキリスト教的な説教という行為を表す、本来のドイツ語を持ち合わせていないのです。

ですから、もし私たちがドイツ語の本来の言語形成力を知ろうとするならば、まず自分たちの言語を「ふるい」にかけなければなりません。中央ヨーロッパ文化の中へと流れ込んできた文化の潮流という回り道を通じて、言語の中に入り込んできたあらゆるものを、いわば分離させる必要があるのです。

いくつかの言葉にいたっては、本当に（外来語だと）気づきさえしなくなっています。皆さんは「Weihnachtsfest（クリスマス／聖夜祭）」という言葉を使い、それを一つの祭り（Fest）だと感じています。「Weihnacht」は固有の古いドイツ語ですが、「Fest」はロマンス系、すなわちラテン語の単語であり、古い時代にドイツ語になったものです。

「Fest」という言葉は、まさにキリスト教の浸入とともに、本当にきわめて異質なものが入り込んできた時代へと私たちを連れ戻します。しかし同時に、それは今日私たちが全く外来語であるという感覚を持たないほどに変容させられたのです。今日のドイツ語圏の人間で、「verdammen（地獄に落とす／非難する）」という言葉が「damnare」からドイツ語になったラテン語の単語であるなどと、一体誰が考えるでしょうか。

ですから、何が本当に本来のドイツ語であるかという点に到達したいのであれば、私たちは非常に厳しくふるい分けをしなければなりません。なぜなら、多くのものがキリスト教とともに入り込み、さらに多くのものが、キリスト教から学校制度が形成されたことによって入り込んできたからです。

この学校制度における教授内容は、南部、すなわちギリシャ・ラテン文化にあったものをそのまま受け入れたものでした。そして、伝えるべき事柄に対する言葉が（ドイツ語のなかに）見当たりませんでした。概念と同時に、言葉ももたらさなければならなかったのです。

これは最初にラテン語学校で行われましたが、そこから初等学校へと伝わっていきました。そのため、今日の私たちの教養（Bildung）の基礎をなしている「Schule（学校）」という言葉そのものが、実は外来語なのです。「Schule」がドイツ語でないのは、「Scholastik（スコラ学）」がドイツ語でないのと同じことです。古高ドイツ語の「scola」である「die Schule」は、つまり外来の言葉なのです。

そして「Klasse（学級／クラス）」にいたっては、なおさら外来の言葉です。実際、どこに目を向けても同じです。「Tafel（黒板）」は外来語（tabula）であり、「schreiben（書く）」も外来語（scribere）です。つまり、私たちが学校の教材を南部（ロマンス圏）から受け取ったことに伴い、学校に入り込んできたあらゆるものが、実は外部から私たちの言語へと浸入してきたものなのです。

これにより私たちは、ドイツ語の本来の性質を研究しようとする際に、ドイツ語からふり落とさなければならない要素の一つの層を手に入れたことになります。そこでは、明らかに外来語であるもののほぼすべてをふり落とさなければなりません。なぜなら、それらはドイツの民族魂から湧き出たものを表現しているのではなく、ドイツの民族魂の本質のなかへと流し込まれたものだからです。それらは、いわばドイツの本質の上に塗られた一種の「ニス（うわべの膜）」を形成しています。

私たちは、このニスの下にあるものを探さなければなりません。例えば学校制度に関してニスの下にあるものを探してみると、得られるものは比較的少ないものの、きわめて特徴的なものが見出せます。

例えば、純粋な固有のドイツ語（ウル・ドイツ語）として「Lehrer（教師）」という言葉があります。また「Buchstabe（文字）」という言葉も純粋な固有のドイツ語であり、ここから「Buch（本）」という言葉が来ています。これは、言葉を形成するために投げ下ろされた（文字が刻まれた）棒に由来するもので、投げ下ろされたブナの木の手（Buchenstäbe）によって文字を表現したという古い習俗から来ています。そこから、それらを集めて読むこと、すなわち「lesen（読む）」が生まれ、その「Leser（読む人）」が「Lehrer（教師）」へと発展したのです。これらは純粋な固有のドイツ語による形成です。

しかしお分かりのように、これらはまったく異なる性質を帯びており、私たちをあらゆる面で、かつて中央ヨーロッパで営まれていた魂の生活へと連れ戻してくれます。このようにして、古い異教の本質とキリスト教の本質が衝突し、これら二つの本質とともに、南方的と言える言語要素と、より北方的と言える言語要素という、二つの言語要素がまさに激しく衝突したのです。

ゴルゴタの秘儀（キリストの受難と復活）の後、西暦1000年代（第1千年紀）のドイツ語のなかには、キリスト教をあれほど強力に受け入れ、それと同時にキリスト教の最も本質的な神秘を表現する言葉を自らの中に取り込むことができたほど、どれほど強大で変容力に満ちた魂の力が息づいていたか、皆さんにも想像がつくことでしょう。

しかし、これによって私たちはまだ（ドイツ語を構成する）一つの層を示したにすぎません。この、ドイツ語に浸入してきたロマンス系言語要素の第一の層を探求するとき、私たちは非常に古い時代、すなわちまだ民族大移動の時代ともいづらく結びついている時代へとさかのぼることになります。

しかしその後も、ロマンス的な本質はドイツ語に大きな影響を与え続けました。こうして私たちは、極めて多様な出来事を通じて、より西方から、つまりフランス（ロマンス系）の言語的影響からやって来た第二の層が重なるのを目にすることになります。12世紀に始まり18世紀にまで及ぶ長い期間、フランス語の単語が絶えず取り入れられ続けました。それは、すでに概念や感情としては持ち合わせていながらも、特定の概念や感情を（フランス語によって）変形・修正するための言葉でした。

私はこれらの言葉をいくつかノートに書き留めておきましたが、この講演全体が即興で行われているため、いわば記憶を頼りに書き殴ったものにすぎず、網羅性を主張するものではありません。私は、まさに「生粋のドイツ語」に見えるような言葉をあえて選んでみました。

例えば「fein（洗練された）」という言葉を取り上げてみましょう。「Fein」は12世紀以前には見当たらない言葉です。これはフランス語の「fin（ファン）」から（当時のドイツ語の音に）移り変わって入ってきたものです。このことから、12世紀になってもなお、言葉をこれほど強力に変容させ、今日では完全にドイツ語だと感じられるほどに一体化させるだけの言語形成力が存在していたことが分かります。

非常に大衆的な言葉になった「Kumpan（仲間）」という単語でさえ、フランス語の「compagnon」の変容にすぎません。また、今日私たちが非常によく耳にする「Partei（政党）」という言葉も、当時移住してきた言葉の一つです。「Tanz（ダンス）」も、その頃にドイツ語に入り込んできました。

これらはすべて12世紀以降にようやくドイツ語に現れた言葉であり、この第二の侵入、私が特に「フランス的潮流」と呼びたい波によってもたらされたものです。「Schach（チェス）」、「matt（チェックメイト）」、「Karte（カード）」、「As（エース）」、「Treff（クラブの札）」、「kaputt（壊れた）」——これらはすべて、当時私たちの言語に浸入してきた言葉なのです。

非常に注目すべきなのは、12世紀から13、14、15、16世紀にかけて、フランスから、すなわち西方からドイツ語のなかへと浸入してきたこのような言葉が、無数に、少なくとも非常に多く存在しているという事実です。これらは、ドイツ語の対話がかつて持っていた、はるかに「重々しい」響きのなかに、軽やかな要素、フランク（気さく）な要素を浸透させることに大きく貢献した言葉でした。

それ以前にドイツの地域で話されていた言語は、はるかにずっしりとした（中身の詰まった）響きを持っていました。ですから、以前の古い言語のままでは、次のような事柄を簡単に表現することはできなかったであろうことがお分かりいただけるはずです。

かつての古いドイツ語でも、「お前は勇敢な英雄だ（Du bist ein kühner Held）」ということは簡単に表現できました。しかし、「お前は粋な奴だ（Du bist ein feiner Kerl）」ということは、今日のようなニュアンスを込めて表現することはできなかったのです。そのためには、まさに「fein」という言葉が必要だったのです。他の事柄についても、フランス語によるこの浸入がなかったならば、同じように表現することは不可能だったでしょう。

注目すべきことに、イタリアから（ドイツの）より北方の地域へと入ってきた要素は、きわめて僅かです。ルネサンスの時代に音楽に関係する事柄がいくつか入ってきましたが、それ以外には実質的に何もありません。

その一方で、後年になって南ドイツやオーストリアを経由するという回り道をして、第三の波とも言うべき言葉の浸入が起こりました。それほど強力な波ではありませんでしたが、例えば「bizarr（風変わりな）」といった言葉がそれにあたります。当時、ようやく「lila（薄紫色）」という言葉も入ってきましたが、それ以前には存在していませんでした。これらの言葉は、「Neger（黒人）」や「Tomate（トマト）」といった言葉と同時に（ドイツ語に）もたらされたのです。これらはすべてスペインから取り入れられたものです。

しかし、この段階における外来の言語要素の浸入を経験したとき、私たちは同時に次のことに気づかされます。すなわち、この頃には「言語霊」が、もはや以前ほど柔軟ではなくなっているという事実です。これらの言葉は、元の言語での姿に酷似したまま残っています。

そして、この状況は後になって最も好ましくない方向へと進むことになりました。ドイツ人がイギリスからの（言語の）浸入を許すようになったときのことです。それは実質的に18世紀の終わりになってようやく始まり、19世紀へと続いていきました。

その際、主に「外面的な生活」に関わる言葉が浸入してきました。しかし、それらの言葉は英語における元の姿とほぼ同じ状態のまま留まったのです。この時には、ドイツの言語霊は、言葉を内面的に受け入れ、自らの中で変容させる能力をすでに失ってしまっていたのです。

このようにして私は、古い時代にさかのぼればさかのぼるほど、とりわけゲルマン・ドイツ的要素において、言葉を受け入れ、変容させる能力が並外れて強く存在していたということに、皆さんの注意を向けようとしてきたのです。

このことをさらに強力に裏付けるために、もう一つ例を挙げましょう。方言の感覚に通じている人でさえ、その言葉の生粋さに微塵の疑いも持たないほど、いかにもドイツ語らしい言葉があります。皆さんはおそらく、木骨造りの壁（Fachwerkwand）を指す「Riegelwand（柱間壁）」という言葉をご存じでしょう。「Riegel（門／仕切り）」——これはまさに生粋のドイツ語として舌にのせられ、発音されます。

それにもかかわらず、この言葉がドイツ語圏に存在するようになったのは、イタリア・ラテンの教育を受けた建築家たちが、のちに「Riegelwand」を形成するきっかけとなるような素材を用いて建築を行うようになってからのことにすぎません。さわめて古い時代には別の方法で建築が行われており、それらの建築家たちは自分たちの作業方法に対して「regula（レグラ＝規則、定規）」という言葉を導入していました。そして当時は、この「regula」という言葉を「Riegel」という言葉へと変容させるほどに、言語形成の精神がまだ強力だったのです。しかし今日、このいかにも生粋のドイツ語に見える「Riegel」という言葉が、規則を意味する「Regel（regula）」にほかならないということを、一体誰が知っているのでしょうか。

今日の私たちは、このような変容を行う能力をもう持ち合わせていません。私たちは、建物の地下にある「Keller（地下室）」も生粋のドイツ語だと思っていますが、これも「cellarium」が変容したものにすぎないのです。

皆さんにもう一つ、いかにも生粋のドイツ語に見える言葉を挙げましょう。少し前にあった言語純化運動に従って、あらゆる外来語を排除し始めていたら、どれほど危ういことになっていたかを知っていただくためです。もし本当にそんなことをしていたら、「Riegel」は失われ、「Keller」も失われていたでしょう。しかし、ほかに何が失われなければならなかったか、皆さんはご存じでしょうか。

なんと「Schuster（靴職人）」という言葉も失われなければならなかったのです！「Schuster」という言葉がなぜドイツ語に入ってきたかという、南部からやって来た人々がドイツ人に対して、履物のかつてのようにただ縛り合わせるのではなく、縫い合わせる方法を教えたからでした。そして、この履物を縫い合わせるという行為に「sutor（スートル＝縫い手、靴仕立て屋）」という言葉が結びついていました。この言葉が変容して、現在のドイツ語の「Schuster」になったのです。したがって、現在の「Schuster」という言葉も、完全に外来の言葉なのです。

このことから、私たちが本来のドイツ語の言葉に到達しようとするならば、いかに厳しくふるい分けをしなければならないかがお分かりいただけるでしょう。今日、言語の表面に浮かんでいるものをそのまま受け入れるわけにはいきません。なぜなら、それらは全く異なる法則に従っているからです。言語霊の中から湧き出る、あの「言葉を創造する力」にまでさかのぼろうとするならば、私たちはまず最初にふるい分けを行わなければならないのです。

言語形成の要素というものは、極めて奇妙な方法で進行します。そのことが最もよく分かるのは、言語形成の霊がもはや以前ほどの十全な支持力を失ってしまった時代においてさえ、いわば「下層からのある種の強引な力」によって、いかに物事が言語のなかへともたらされ得るか、という点に注目したときです。

例えば、比較的高々それほど昔ではない時代に、ヨーロッパで次のようなことが起こりました。ラーブ（ハンガリーのジェール）の近くに、「コチ（Kocs）」という場所があります。そして——確か16世紀のことだったと思いますが——このコチという小さな町の出身である、ある発明才覚に富んだ人物が、容易に走らせることのできる扱いやすい馬車（軽便馬車）を製造することを思いつきました。これが少しずつ普及し、コチという場所を有名にしたのです。

それはちょうど「フランクフルト・ソーセージ」が知られており、特定のソーセージをまさにそう呼ぶのと同じように、その種の馬車は「Kocsi（コチの馬車）」と呼ばれました。そして、この言葉から生まれた「Kutsche（クツチェ＝馬車）」という単語は、フランスへ、さらにはあの誇り高きイギリス人に至るまで行き渡るほどの、凄まじい伝播力を持っていたのです！ それにもかかわらず、この言葉は決して古いものではなく、比較的非常に新しい時代に、コチの馬車御者から、ある種の横暴なまでの勢いをもって広がっていったものなのです。

ですから、次のことを明確に認識しておきましょう。目の前にある「完成された言語」からその内的な核心へと突き進むためには、私たちはその言語から非常に多くの「外装（表面的な飾り）」を取り除かなければならない、ということです。

しかし、その核心へと突き進んだとき、私たちは次のように言わざるを得なくなります。すなわち、この核心が内的な言語形成力によって生まれ得たのは、思考が、例えば現在のドイツ文化の内部におけるよりも、はるかに深い場所に根づいていた時代であった、ということです。当時は、思考が人間の存在全体に対して、はるかにより身近に存在していなければなりませんでした。

今日の私たちは、思考の中に感じているあの力を、もはや言葉の内部にまで感じることはありません。しかし、そこから何段階か深いレベルにある「方言」へと立ち戻るとき、私たちは時にその力を感じるがあります。

現在の私たちは、洗練された日常の共通語において、何か短いものを表現するために「Blitz（稲妻／一瞬）」と言います。これに対し、特定の南ドイツの方言では、いまだに「Himlizzer」と言います。この言葉を口にするとき、そこには稲妻の形態そのものが丸ごと含まれているのです！ そこには、自然界の中で形づくられたものへの直観がいまだに息づいています。

要するに、方言においては、外の自然界で何が起っているかを言葉の形態そのもののの中で追体験できるような、そんな古い言葉の形態へと立ち戻ることができるのです。そして、言語の根源においては、まさに完全にそのような状態だったのです。そこでは、概念的・理念的な契機が、音（響き）の要素に対して、はるかにより身近に位置していました。

そしてまさにドイツ語において、私たちは言語史を通じて次のプロセスを追体験することができます。古い時代には、音の内部へと「意味」を沈み込ませることがいかに一般的であり、その後、事態がいかにして抽象的になっていったか、というプロセスです。

「Tag（一日）」という言葉は純粋な固有のドイツ語ですが、「T」と「A」の響きを感知できる人——皆さんはこれを、特にオイリュトミーを通じて感じ取ることができるでしょう——であれば、この言葉に、私が「音の中への意味の浸入」と呼びたいものをいまだに感じ取ることができます。

その後、時代が進むと、その抽象的な意味が言葉の中にそのまま取り込まれたような単語や概念が現れるようになりました。固有名詞の「Leberecht」を見てみましょう。子供に「Leberecht」と名付けるのは、正しく生きるように（lebe recht）、道を踏み外さないように、という願いを人生の伴侶として持たせるためです。あるいは「Traugott（神を信ぜよ）」も同様です。このような言葉が形成されたときにも、ある種の言語形成的な要素はまだ残っていましたが、それはすでに抽象的なものであり、根源的なものではありませんでした。

本日は導入として、以上のことを皆さんにお話ししておきたかったのです。これによって、私たちは次回から、より具体的な事柄へと進むことができるようになります。

第二講

1919年12月28日、シュトゥットガルト

●基本的な視点

言語は単なる記号ではなく、民族魂・言語霊の生き生きとした表現である。
古い時代ほど音の響きの中に具体的な直観・霊的なものが宿っていた。
現代の抽象的な言語使用は、その失われた豊かさを示しており、
方言や古語に遡ることで再び「言語の秘密」に触れることができる。

●要点

1) ドイツ語への歴史的な「流入」と言語形成力の変化

- ・ドイツ語は繰り返し外部からの大規模な流入を受けながら発展した。

最古：キリスト教（およびキリスト教的表象・感情・語彙）の北方流入。

次：南方からの学校・学問用語（Schule, Tafelなど、ラテン・ロマンス起源）。

その後：西方（フランス）、スペイン、19世紀のイギリスからの流入。

- ・古い時代ほど「言語霊」は外来語を民族の感覚に合わせて深く変容・同化させる力が強かった（例：sutor → Schuster）。
- ・時代が下るにつれ、この変容力は弱まり、今日ではほとんど失われている（ただし方言にはまだ強く残る）。

2) ．方言に残る言語形成力の例

- ・オーストリア方言「pakschierli」（愛嬌のある仕草や小さな細工菓子）
＝「possierlich」の変容形。
- ・農民の表現「Ich wische mir den Nachtschlaf aus den Augen」
（目から夜の睡眠を拭き取る）
→ 目やにを具体的な「夜の睡眠」と捉える、極めて具象的な感覚。

3) 言語の根源的性質（人智学的視点）

- ・子音：外界の行為・出来事の模倣（例：杭を打つ動作と「st」）
- ・母音：内面的・魂的な響き（例：「A」は驚きや内引）。
- ・語は本来、具象→抽象へ移行する。
古い時代は音と意味が直観的に強く結びついていた。

4) 具体的な語源・意味変化の例

- ・Barn（子供）→ ゴート語bairan（運ぶ・胎内で宿す）
→ ギリシャphero、ラテンferoと同源。「運ばれるもの」。

- ・-bar接尾辞 (fruchtbar, kostbar) : tragen (運ぶ・もたらす) の名残。
- ・Denken (考える)
→ 古くは「測る (messen)」の意味。魂の中で何かを測ること。
- ・Hagestolz (頑固な独身男)
→ Hagestalt (生垣の土地に配置された者) → stolzとの音の連想で変化。
- ・Gestalt : 本来は「配置されていること・地位」。
- ・Leich (Leichnam=死体) : 魂の抜けた「写し絵・抜け殻」。
- ・Braut (花嫁) + Bräutigam (花婿) :
Brut (次世代の命) + guma (男=homo) 。
- ・Dumm (愚か) → 元はdumpf (どんより・霧がかかった感覚の鈍さ)
→ stumm (口がきけない) とつながる。
- ・Taufen (洗礼) → tief (深い) → 水に深く沈めること。
- ・Lord / Lady : hlaford (パンの番人) /
hlaefdige (パンの生地をこねる女) から。パン分配の主人・女主人。
- ・Kopf (頭) : 丸い形 (kugelig) に着目 (キャベツの頭と同じ) 。
ロマンス語testaとは命名の視点が全く異なる。

●本文

本日も、第一講の前にそうしたように、やはり二、三の言葉をあらかじめお伝えしておきたく存じます。この問題のために私がここで割くことのできるこの数時間の授業に対して、どうかあまりに大きすぎる期待は抱かないようお願いいたします。まずは内容的な面においてです。もちろん別の側面から見れば、この問題に一つの示唆を与えることは有意義なことでしょう。しかし、これがここで実現した即興的なあり方を踏まえるならば、ここで言語の発展について語られるはずの内容は、本当にいくつかの即興的な事柄にとどまらざるを得ないのです。

そして私たちは、おそらく、私がこの一連の考察の中で維持していくであろう「アプローチの仕方」そのものから、一つの指針を受け取ることになるでしょう。私は、既存のいかなる一般的な手法にもとらわれることなく、言語的生命を有機的に考察するために重要となってくるであろう多種多様な点について、皆さんに手がかりを提示するよう努めてまいります。

第一講において私は、まさに私たちのドイツ語が、その語彙がいわば幾度もの「侵入 (流入)」を経験することによって発展を遂げてきた、という点に言及しました。私たちは、そのような意味深く巨大な流入の例として、北方の諸文化へキリスト教が流れ込んできたことに伴う流入、およびそのキリスト教の流入に結びついていたあらゆる事柄について、指摘することができました。

キリスト教は、単にその内容をもたらしただけでなく、その内容を「言葉の絵」の形で携えてきたのです。そして、北欧および中央ヨーロッパの民衆に固有の民族宗教のなかには、キリスト教がもたらした事柄に類するものが、外面的に見れば皆無に等しかったのと同様に、北欧・中欧の人々の語彙を用いてキリスト教を理解する可能性もまた、皆無に等しかったのです。それゆえ、キリスト教の担い手たちによって、キリスト教と同時に、キリスト教的な表象やキリスト教的な感情、そしてその「言葉の衣服」となるあらゆるものもたらされました。私たちは、いわばキリスト教の翼に乗って言語的に北方へと運ばれたそのような事柄の総体を、いくつか列挙しました。

その後、学校に関わるあらゆる事柄もまた、南部から北方へと向かう潮流とともにやって来ました。例えば「Schule (学校)」や「Tafel (黒板)」といった学校的な事柄に関係する言葉は——「lesen (読む)」

や「Buchstabe（文字）」、あるいは「Lehrer（教師）」といった例外を除いて——南部から上がってきたものであり、本来はロマンス・ラテン語起源のものです。そして、それらはドイツ語の言語有機体の中へと完全に同化させられたため、今日の人間は、そのような事柄によって自分たちがドイツ語の言語有機体のなかに根本的には外来語を抱えているのだ、ということをもはや意識的に考えることはありません。

それから私は、さらに後になって、12世紀以降に今度は西方（フランス）から、多くの言語的要素の新たな流入が起こったことを指摘することができました。そして次にスペインの波、最後に、実質的に19世紀になって初めてやって来たもの、すなわちイギリスから移住してきたあらゆる要素へと、皆さんの注意を向けたのです。

私が皆さんに挙げた例（これらの事柄については後ほどさらに詳しく具体化していきます）から、さしあたり次のことがお分かりいただけるでしょう。まずキリスト教が、そしてそれとともに他の多くの事柄が流入してきたあの古い時代には、「言語霊」が、その時やって来たものを民族感情に従って内面的に自らの中に受け入れ、変容させる可能性をまだ保持していた、ということです。

確かに、この事実の特異性を指摘するにあたって、キリスト教に特有の単語ではなく、一見すると生粋のドイツ語のように思われる「Schuster（靴職人）」という言葉と「sutor（スートル）」との親縁性を挙げました。これらは全く同一の言葉なのです。当時は、ドイツの民族霊のなかに、一つの言葉をこれほどまでに変容させることができるだけの言語形成力が、単純にいままで多く含まれていたのです。「sutor」は最も古い流入に属しています。

この最も古い流入から、より学校制度に関係する次の（第二の）流入へと進めば進むほど、ドイツ語における言葉の響きが、すでにラテン語のそれと似通ってきているのを見出すことになるでしょう。そして事態はそうに進んでいきます。後になって生じた言語の潮流を見れば、その時々で現れるものを変容させる能力が、ドイツ語独自の言語霊においてますます失われていることが示されます。この点を私たちはしっかりと押さえておきましょう。

時間の経過とともに、例えば「Five o'clock tea（ファイブ・オクロック・ティー）」といった言葉までもが（ドイツ語風に）変化させられるのかどうか、すなわち、ドイツの言語霊が、かつてより短い時間の中で展開したような変容力を、比較的長い時間をかければ展開できるようになるのかどうかは、今後の推移を待たねばなりません。しかし、それは私たちの目的にとっては重要ではないのです。

私たちは最終的に、内的な言語形成力が（少なくとも一時的に）減退していること、つまり今日においては以前ほど存在していないということが、民族生活の全体にとってどのような意味を持つのか、という問いを自分自身に投げかけたいと思います。

この言語形成力は、方言へと深く降りていけばいくほど、今日でもなおそれだけ強い割合で存在しています。例えば、オーストリアの方言に見られる非常に独特な言葉、「pakschierli（パクシーリ）」または「bakschierli（バクシーリ）」の起源について問うてみることができます。オーストリアの方言をご存じの方ならよくわかるでしょう。この言葉が何を意味するかは、直感的に感じ取ることができます。見知らぬ人たちの前に連れてこられた小さな女の子が、少しステップを踏んだり、お行儀の良い範囲で色々な仕草を試みせたりする——これが「pakschierli」です。あるいは、思わず大笑いするほどではないものの、もしその印象が同じ方向でもう少し強くなれば笑ってしまうだろう、という手前の内的な魂の状態をもたらすような、小さなマジパン（細工菓子）のことも「pakschierli」と言えます。

これは一体どのような言葉なのでしょう。他の普遍的な方言の言葉とは、まともなつながりが見出せません。実はこれは、「possierlich（おどけた、愛嬌のある）」という言葉が（方言の中で）変容したものにほかなりません。このように、言語形成力というものは方言の中に今なお、ある意味で研究可能な形で残されているのです。そして、こうした事柄を研究することは、今も働き続けている「民族魂」へと深く参入するための優れた手段となります。もし私たちが民族魂へと参入することができれば、それは精神生活を理解することにも計り知れないほど貢献するでしょう。

そうなれば、私が著書『人間と人類の精神的指導』[1]の中で注意を促し、皆さんもよくご存じのデッソワール教授[2]のような知識人たちが嘲笑した事柄へと立ち戻ることになります。私がそこで展開した内容は、精神科学（人智学）によって明確に見出すことができるのです。それは、「子音の形成は、外面的に直観されるものの模倣と結びついている」ということです。子音で表現されるものは、元をたどれば、人間が自分自身を通じて、外界で起こっていることと類似した経験をするによって生まれます。

※訳注

[1] 『人間と人類の精神的指導』（Die geistige Führung des Menschen und der Menschheit）：1911年に出版されたルドルフ・シュタイナーの重要な著作（全集番号 GA 15）。

[2] マックス・デッソワール（Max Dessoir, 1867-1947）：ドイツの著名な哲学者・心理学者。当時、シュタイナーの人智学に対して批判的・懐疑的な立場をとった。

通俗的に表現するなら、こう言えます。人が杭を地面に打ち込むとき、片方の足を踏ん張ることで、その杭打ちの行為を身体で感知することができます。これは、自分自身の意志行為の知覚です。今日の私たちは、言語の音である「st」の中に、この意志行為をもう感じることはありません。しかし、言語発展の初期の時代には、自分自身の意志活動の中に、外界で起こっていることの模倣を感じ取っていたのです。

このようにして、子音の要素は「外界で起こっていることの模倣」となり、これに対して母音の要素は「内面（魂の声）を表現するもの」となりました。「A（アー）」は驚きであり、ある種の内引（自らの内へと引きこもること）です。母音において表現されるのは、人間の外界に対する関係（心のありよう）なのです。

これらの事柄にまで突き進もうとするなら、はるか昔へとさかのぼらなければなりませんが、そこまで突き進むことは可能です。そうなれば、いわゆる「ワンワン（Wau-Wau）理論」や「ディンドン（Bim-Bam）理論」[3]のように、純粹に外面的な仮説に基づいた言語起源論が、いかに恐るべき誤謬であるかということが理解できるようになります。それらは外面的なものにすぎません。これに対して、人間そのものを正しく理解することは、音の響きと、魂的・精神的に直観されようとしているものとの内的な結びつきを、完全に知り抜くことへと私たちを導いてくれるのです。

※訳注

[3] 「ワンワン理論」「ディンドン理論」：近代の言語学における、動物の鳴き声の模倣や自然界の音の響き（擬音）を言語の起源とする、外面的な仮説の通称。

私たちは、まずこのことを、この数時間の講義の中で解き明かすべき一つの問いとして掲げておきたいと思います。言語要素の様々なつながりをこの視点のもとで正しく考察するために、私は言語の中から特徴的な具体例を抽出し、私たちが本当に理解したい事柄へと、皆さんを少しずつ導いていこうと思います。

私は本日、言語的なものが「具象（具体的なもの）」から「抽象（抽象的なもの）」へと、いかにして次第に突き進んでいくかを示すような具体例を選びたいと思います。ここでも、私たちが「現実にあるもの」

を真摯に研究しようとする優れた意志を本当に持っているならば、方言へと目を向けることが時に大いなる助けとなります。ここで一つの小さな例を挙げさせてください。

オーストリアの農民は、朝起きたとき、夜の睡眠（Nachtschlaf）について話しますが、それはおそらく皆さんが「夜の睡眠」について話すのとは異なる方法です。皆さんは教養ある文化人ですので、その言葉の背後に根本的には極めて抽象的な事柄を理解しています。これに対してオーストリアの農民は自然人です。自らを取り巻くあらゆるものの内部に、精神的（霊的）・魂的なものが宿っており、彼らはそのことを強く意識していました。現在では彼らの間でもその意識は見えなくなっていますが、前世紀（19世紀ここで重要なのは、このような観察を通じて、私たちが抽象的に語っている言語表現が、根本的にはいかにして常に「より具体的なもの」へとさかのぼるか、という点に目を向けることです。次の例を取り上げてみましょう。）の70年代や80年代には、私のようにそれを観察しようとする者にとっては、いまだ完全に存在していたのです。

農民は、あらゆる物事の内部に今なお「自然霊・元素霊の力」を見ているため、決して本来の意味での抽象概念で表現することはせず、常に「具体的」に表現します。農民はこう言います。「私は目から夜の睡眠を拭き取る（Ich wische mir den Nachtschlaf aus den Augen）」と。——夜の間に目の中に分泌され、洗い流すことのできるもの（目やに）、それこそが彼らにとっての睡眠の目に見える表現であり、それを彼は「夜の睡眠」と呼ぶのです。

ここに、つい最近まで生き生きと作用していた「言語理解の秘密」があります。このように事物として具体的に理解することは、そこに精神的なものが結びついていることをいささかも妨げないのです。オーストリアの農民は、まぎれもなく一つの自然霊のことを考えていますが、その存在が自分の目にこのような分泌物を送り込んできたのだという「事実」によって、それを表現するのです。彼はこの言葉の背後に、教養ある文化人が理解するような抽象概念を読み取ることは決してありません。

そこから、歴史は少しずつ抽象化の方向へと進み始めます。農民がほんの少し学校に通ったり、あるいは都市と接触したりするようになると、いわば「目に見えない具象物」が彼によって呼び出されるようになります。彼は相変わらず「私は目から夜の睡眠を拭き取る」と言いますが、それが自分にとって極めて外面的かつ具体的に実在するものであることを示すために、より大がかりな手の身振りを交えるようになります。

ここで重要なのは、このような観察を通じて、私たちが抽象的に語っている言語表現が、根本的にはいかにして常に「より具体的なもの」へとさかのぼるか、という点に目を向けることです。次の例を取り上げてみましょう。

私たちの（現代ドイツ語の）中からは消えてしまいましたが、スカンジナビアの国々（北欧語）では、子供のことを表す表現として今なお「barn（バルン）」という言葉が見られます。私たちにはもうこの表現はありません。では、この表現にはどのような歴史があるのでしょうか。この表現は、一方ではゴート語へと私たちを連れ戻します。ウルフィラスによる聖書翻訳の中に、この言葉を見出すことができるのです。それは「bairan（バイラン）」、すなわち「tragene（運ぶ）」という表現へとつながっています。

そしてこれは、ギリシャ語やラテン語の双方とも親縁関係にあります。その親縁性は、ヤコブ・グリムによってゲルマン諸語およびそれらと他の言語との関係性のために発見された、あの「音韻変化（子音変化）の法則（グリムの法則）」を適用すれば、きわめて明瞭に認識できるほどのものです。この法則は次のように定めています。一方の言語で「b」として存在するものは、もう一方の言語では「f」として存在する、と。ここではこの一つの例だけを取り上げておきます。

しかしこれにより、私たちはギリシャ語の「phero（フェロー）」やラテン語の「fero（フェロー）」という表現に到達します。これらは双方とも、やはり「運ぶ、もたらす、向こうへ運んでいく」という意味を持っています。ゴート語の「bairan」は「fero」が変容したものにならず、言葉が別の方向へと成長していったもののなのです。

古高ドイツ語には、まだ「beran」という言葉が存在していました。しかし、ここでの動詞としての用法は次第に消失していき、現代のドイツ語においては、かつて本来的に感じ取られ、経験されていたその意味へとさかのぼって考えるまともな可能性を、私たちはもう持っていません。

私たちは「barn = 子供」という言葉に目を向けます。なぜそう呼ばれるのでしょうか。それは、生まれる前に「胎内で運ばれる（宿される）」からです。子供とは「運ばれるもの（Das Getragene）」なのです。つまり、その起源を指し示しているのです。子供のことを「運ばれるもの（bairan = fero）」と呼んでいるわけですね。

現代のドイツ語において、この組み合わせから残っているのは、唯一「gebären（生む）」という言葉だけです。しかし、私たちには別のものが残されています。これらすべての名残として、私たちは「fruchtbar（肥沃な）」や「kostbar（貴重な）」などに見られる、あの接尾辞「-bar」を手に入れたのです。

「kostbar」とはどういう意味でしょうか。それは「費用（Kosten）を負担する（trägt）」もののことです。「fruchtbar」とはどういう意味でしょうか。それは「果実（Frucht）を実らせる（trägt：もたらす）」もののことです。これらは今日私たちが持っているような抽象概念としてではなく、かつては「具体的に運ぶ／身につける（tragen）」ということに関連して、極めて直観的に表現されていました。

このことが特に直観的に分かるのは、「Etwas wird ruchbar（ある事柄が世間に知れ渡る／うわさになる）」と言うときです。なぜなら、それは「臭い（Geruch）をあなたのもとへと運んでくる（trägt）」からです。臭いがあなたのもとへと運ばれてくる、それによってある事柄が「ruchbar」になるのです。このように、私たちは多くの言葉の中に、きわめて古い時代における「言語霊」の特徴であった、直接的な直観性を見出すことができるでしょう。

ここで、ウルフィラスの聖書翻訳から1行を書き出してみます。「jah witands Jesus thos mitonins ize gath」これはおよそ次のような意味になります。「そしてイエスは、彼らの思い（思考）を知って、語られた」

ここに「mitonins = 思い／思考」という言葉があります。これは「miton」という言葉へと私たちを連れ戻しますが、これはおよそ「考える（denken）」を意味します。古高ドイツ語においては、これはすでに別の形に成長しており、「mezzon」と呼ばれ、これには「mezzan」という親縁関係のある言葉が存在します。そしてそれは「測る（messen）」という意味です。

「測る」ということ、すなわち外的な計測、直観的な計測が、内的に感じ取られることによって、単純に「考える（思考する）」という言葉になったのです。つまり、外面において行われるべき活動が、「考える」という言葉の土台を提供したわけです。

「私は考える（Ich denke）」とは、本来「私は魂において何かを測っている（Ich messe seelisch etwas）」という意味なのです。そしてこれは、私たちが今なお「メディテーション」という言葉の中に保持しているラテン語の「meditor」、あるいはギリシャ語の「medomai」とも親縁関係にあります。

私たちが、ドイツ語またはゲルマン語の言語霊の働きが持っていた、より古い形態へと立ち戻るならば、このことがいかに今なお完全に直観的な形で存在しているかを見出すことができます。しかし、私たちはまさにこのことを、真の内的な理解をもって実行しなければならないのです。

※訳注

ウルフィラス (Ulfilas, 311頃-383) : 4世紀の司教で、ギリシャ語の聖書をゴート語に翻訳した人物。ゲルマン語派の最古の文献として言語学的に極めて重要。

ヤコブ・グリム (Jacob Grimm, 1785-1863) : 「グリム童話」の収集で有名だが、高名な言語学者でもあり、印欧語からゲルマン語への子音の変化規則 (グリムの法則) を提唱した。

皆さんはみな「Hagestolz (一生独身で通す頑固な老独身男)」という言葉をご存じでしょうし、今日の言語においてこの言葉がおよそどのような意味を持っているかも知っているはずです。しかし、この言葉がかつて本来意味していた事柄と、現在の意味とのつながりは極めて興味深いものです。

この言葉は、実は単に「意味の変化」によって今日のような意味になったにすぎません。なぜなら、これはそれほど遠くない過去に使われていた「Hagestalt」という言葉にまでさかのぼり、この「Hagestalt」の中には「stalt」という言葉が隠されているからです。

では「stalt」とは何でしょうか。「stalt」とは、どこかに「配置された人」のことです。中世の (相続) 関係においては、長男たちが農場 (本家) を相続し、次男以降の弟たちが「Hag (生垣で囲まれた小さな土地)」を相続しました。そのため、長男よりも結婚できる可能性が低かった次男は、生垣で囲まれた領地である「Hag」だけを相続し、そこに配置させられたのです。この「stalt」とは所有者のことです。つまり、「Hag」の所有者が「Hagestalt」でした。

ところが民衆は、この「stalt」という言葉の意識が失われてしまったとき、音の響きの類似から、自分たちの「stalt」を (誇り高いという意味の) 「stolz」へと変えてしまいました。したがって、この文脈における「stolz」という言葉は、私たちが普段使っている「誇り (Stolz)」という意味とは全く比較してはならず、単なる音の類似にすぎないのです。

しかし、今なお残されている古い言語の形態の中には、この「stalt = 配置されていること (gestellt sein)」という意識をいまだに見出すことができます。私たちが上演している (シュタイナー学校の伝統的な) 『クリスマス劇』の一つの中で、宿屋の主人の一人が次のようなセリフを語る場面があります。

「私のこの“Gestalt” (身分) にふさわしい宿屋の主人として、私は自分の家と宿舎において全権を持っている」

これを聞いて、人々はそれが一般的な「容姿・体格 (Gestalt)」を意味しているのだと思い込んでしまいます。いいえ、それはこの言葉の本当の意味ではありません。そうではなく、「私の“格 (Rang)” にふさわしい宿屋の主人」、「これほど見事な場所を任された (配置された) 宿屋の主人」、「私の“配置 (宿屋としての格式)” にふさわしい主人」という意味なのです。「私は自分の家と宿舎において全権を持っている」という叫びによって、彼は自分が客を引き寄せる立場にあることを意味しているのです。ここには、本来「Hagestalt」の中に含まれていた意味への意識が今なお残されているのを見て取ることができます。

このように、私たちが魂の視点から「音 (言語表現) の生成・発展」を考察するならば、言語霊の中に、多大なる非凡さと繊細さを追跡することができるのです。

キリスト・イエスが痛風病者（中風の患者）に対して行った癒やしを見て、弟子たちが驚き怪しんだとき、ウルフィラスはその聖書翻訳において「silda-leik（シルダ・ライク）＝seltsam-leich（奇妙な姿／不思議な肉体）」に結びつく言葉を使っています。ウルフィラスの翻訳の中で、彼がこの言葉を使っている文脈全体を捉えるならば、そこで形づくられている事象は、いわば「奇妙な形をとったもの（変容させられた姿）」とでも呼ぶべきものです。

弟子たちの驚きを呼び起こしたのは、まさに肉体的なもの（身体の奇跡的な変化）でした。これは、より客観的な方法で「silda-leik」と表現されているのです。私たちはこの「leih（ライヒ）」という言葉の中に、「姿・形（形骸）」、しかも「写し絵（模写・残像）」としての姿を感じ取らなければなりません。

かつて古い意味において「Gestalt」と言ったとき、それは（先ほどの宿屋の主人の例のように）「配置されていること（置かれた状態）」を意味していました。古い時代には、配置されていることが「Gestalt」という言葉で表現されていたのです。

これに対して、かつて「他の何かの写し絵」として感じ取られていた「本来の姿（肉体そのもの）」は、「leih」によって表現されていました。私たちはこの言葉を、今なお「Leichnam（ライヒナム＝死体、遺骸）」という言葉の中に保持しています。

「Leichnam」とは、そこに存在していたものの「写し絵」のことです。この「Leich」のなかに何が横たわっているかを感じ取るとき、いかにこの「Leich」が人間そのものではなく、「人間の写し絵」であるかということが今なお感知され、非常に繊細に表現されているのです。

しかしここで、直観的なものの中から、感情のなかに、すなわち直観的なものの再現のなかに言語的に今なお存在している事柄がいかにして生じるかについて、さらに別の例を挙げたいと思います。

例えば私たちはウルフィラスから、ゴート語で花嫁のことを「brûths（ブルーツ）」と言うことを学びます。そして、ウルフィラスの聖書翻訳に現れるこの「brûths」は、「Brut（ブルート＝雛、孵化、一腹の子）」や「brüten（ブリューテン＝卵を抱く、孵化させる）」という言葉と本来的に親縁関係にあります。したがって、結婚がなされるとき、花嫁によって単純に「Brut（次世代の命）」が定められることになるのです。花嫁（Braut）とは、結婚に際して次世代の命（Brut）を定める存在のことです。

では、花婿（新郎＝Bräutigam）についてはどうでしょうか。ここでは、花嫁（Braut）に何かが付け加えられています。この付け加えられた部分は、ゴート語では「guma（グマ）」、古高ドイツ語では「gomo（ゴモ）」であり、これは音韻変化によって、ラテン語の「homo（ホモ＝人間、男）」として現れる単語から生まれたものです。

「Bräutigam」の「-gam」の部分には、この「guma＝gomo＝homo」が含まれており、これは花嫁の夫、すなわち自分の方からも次世代の命（Brut）を築くために尽力する「男」を意味しています。つまり、花婿（Bräutigam）とは「花嫁の男」という意味なのです。

このことからお分かりのように、私たちは「言語霊」の言語形成力を真に追いかけるために、時として、何気ないささやかな音節（語尾や接尾辞）のなかにこそ、その意味を探さなければならないのです。

さて、ウルフィラス（の聖書翻訳）において、キリストが癒やした「口のきけない人（口唾者）」に対して、「sa dumha＝der Dumpfe（感覚の鈍い人／ぼんやりした人）」という言葉が現れるのは興味深いことです。この機会に皆さんに思い出していただきたいのですが、ゲートもまた、自分が若い頃にある種の

「Dumpfheit（どんよりとした薄暗さ／朦朧とした状態）」の中で生きていたということについて語っています。

「Dumpfheit（朦朧状態）」とは、周囲の環境を完全に、はっきりと見通す可能性を持たないことであり、どんよりとした、霧がかかったような状態の中で生きることです。それは例えば、話すことを妨げ、人を「stumm（口がきけない状態）」にします。しかし、この言葉はのちに（現代ドイツ語の）「dumm（愚かな／馬鹿な）」へと変化していきました。したがって、この「dumm」という言葉は、本来は「自由に周囲を見回すことができないこと」、すなわち「どんよりとした霧の中にいること」にほかならないのです。

親愛なる皆さん、「言葉（単語）」にまつわる特定の変容や変態がいかにして存在し得るか、そしてこれらの変容や変態が、民族や部族の全体を通じて表現される「言語霊」と呼ばれるあの奇妙な存在の内部において、いかに「無意識」と「意識」が相互に作用し合っているかを示しているのを見ることは、極めて興味深いことです。

例えば、北欧神話の神の名に「Fjörgyn（フィオルグユン）」があります。この北欧の神の名は、ウルフィラスが聖書翻訳の中で、キリストが弟子たちと共に「山」に登ったとされる場面において、山を意味するゴート語として「fairguni（ファイアグニ）」という言葉を使っているのを見出すとき、独特な光（解釈）を与えられます。

私たちは、この言葉の意味が少しズレた名残を、古高ドイツ語の「forha」の中にも見出すことができますが、これは本来「Föhre（マツ）」、さらには「マツの生い茂る山」を意味しています。つまり、神「Fjörgyn」とは、マツの生い茂る山々に宿る「自然神」のことなのです。そしてこれは——「fairguni」の中にその響きをいまだ感じ取ることができますが——ラテン語で同じく（聖なる）樹木を指した「quercus（クエルクス＝カシ／オーク）」とも本来的に親縁関係にあるのです。

ここで私は、言語形成の古い時代においては、音（響き）と意味との間に、ある種の下意識的なつながりが支配していたという点へ、皆さんの注意を向けたいと思います。

今日の私たちは、自らの抽象的な思考を用いて、音のレベルにまで深く分け入る大きな可能性を持っていません。私たちは音の響きをもう全く感じ取れなくなっています。そのため、多くの言語を知っている人ほど、音の響きを考慮に入れるように求められると、かえって腹を立てたりするのです。

きわめて多様な言葉が、当然ながら極めて多様な変遷を経ており、辞書的な翻訳が提示するつながりは、人工的なものにすぎません。なぜなら、まず第一に「言語霊」を追跡しなければならないからです。言語霊は、直接的に翻訳されうる事柄とは、本来まったく別のことを意図しているのです。

私たちはドイツ語で頭のことを「Kopf（コプフ）」と言い、ロマンス諸語（イタリア語など）では「testa（テスト）」と言います。なぜドイツ語では「Kopf」と言うのでしょうか。理由は簡単です。ドイツ語には「造形的な天才」が宿っており、「丸いもの」を表現したいからです。事実、「Kopf」は「kugelig（球状の）」という言葉と結びついており、私たちは根本的に、キャベツの頭（Kohlkopf＝キャベツの結球）について話すときも、人間の頭（Menschenkopf）について話すときも、全く同じ言語形成要素から語っているのです。「Kopf」は丸みを帯びた形状を指し示しています。

これに対して「testa」は、人間の内的な本質、すなわち「testieren（証明する／証言する／遺言する）」、「確証する」、「確定する」ということと結びついています。このように、全く異なる観点から物事が命名されているということに、私たちは配慮しなければなりません。

個々の詳細において多少の語弊が生じることはあるにせよ、言葉の形成の内部で生じるより古い形態へと少しずつ立ち戻ろうと努めれば、この違いを今なお追体験することができます。そして私たちは最終的に、「音（響き）そのものの内部に精神（霊）を感知する」という、言語霊のあの根源的な段階へと立ち戻ることになるでしょう。

現代において、「meinen（思う）」と「Gemeinde（共同体）」が本来は同じ仲間であるということを、一体どれほどの人が感知できるのでしょうか。今日ではそれを感知することは困難です。

しかし、もしこの「Gemeinde」を古高ドイツ語の「gimeinida（ギマイニダ）」にまでさかのぼり、さらにそれと親縁関係にある英語の「mean（意味する）」という、より広範な変容の形を並べてみるならば、一つの好例に突き当たります。そこでは「meinen（思う）」という言葉の中に、「複数の人々の響き合い（合意）の中で思われていること」というニュアンスが感じ取られるようになります。そしてそれは、複数であることによって「力」を獲得するのです。この「力を獲得すること」が、まさに「gi-（現代のGe-）」という接頭辞によって表現されているのです。

このように私たちは、言語形成の内部に存在する「感情の要素」へと立ち戻らなければなりません。

現在の私たちが、きわめて古いゲルマン語である「taufen（タウフェン＝洗礼を施す）」と言うとき、それが本来どのような意味を持っていたのか、私たちはもう正しく感じ取ることができません。

これが直観的に明らかになるのは、古高ドイツ語や中高ドイツ語へとさかのぼり、そこで「toufan」や「taufen」といった形を見出すときです。そして、この「toufan」が（ゴート語の）「diups（深い）」と親縁関係にあり、ウルフィラスの翻訳における「daupjan（洗礼を施す）」、および「daupjands＝洗礼を授ける者（洗礼者）」という言葉とも結びついているのを発見するときです。

そこから、私たちは古高ドイツ語において本来的に同源である「tiof」という言葉を探しさえすればよいのです。これは現在の私たちの言語では「tief（深い）」を意味しており、例えば「vertiefen（深める）」や「tiefen（深くする）」といった言葉につながっています。つまり、これらと親縁関係にある「taufen（洗礼）」とは、「hineintiefen（深く沈めること）」、すなわち「水の中に浸す（潜らせる）こと」にほかならないのです。それは単純に、水の中へと深く沈める行為を指していました。

これらの事柄は、私たちが「言語霊」の内部を覗き見るための手がかりにすぎません。とりわけ重要なのは、「意味の変化」を追跡することです。興味深い意味変化の例として、次のようなものがあります。

ゴート語の「hlaifs（フレイフス）」、古高ドイツ語の「leiba」、中高ドイツ語の「leip」は、古いゲルマン語においては「パン（Brot）」そのものを意味していました。現代の「Laib（ライプ＝塊）」という言葉には、もはや「パン」という意味は残っていません。「hlaifs」は「Laib」へと変化し、パンが提供される際の「形（塊の形状）」だけが言葉として残ったのです。かつて「hlaifs」と言ったときにはパンそのものを意味していましたが、それが「パンの形状（塊）」へと意味が変化したわけです。

この変化のプロセスは、例えば古英語における変容を追跡するとさらに明確に分かります。古英語に「hlaford（ラフォード）」という言葉があり、さらに古くは「hlaforward」や「hlaflowerd」と呼ばれていました。これは「パン（hlaef）を管理する者（ward）／パンの番人」という意味です。「hlaford」とは、人々がパンを手に入れるために頼らざるを得ない人物であり、パンを管理し、畑を耕してパンを作り、それを自由の身分ではない人々（農奴など）に分配する権利を持った人物のことでした。そして——最初の「h」の音

はそれほど重要な意味を持ちませんので消え去り——これが徐々に変化して、現在の「Lord（ロード＝領主、貴族、主人）」という言葉になったのです。「Lord」とは、古代の「パンの番人（hlafward）」にほかならないのです。

これと対をなす片割れ（女性形）も同様に興味深いものです。「hlaifs = Laib（パン）」から（先ほどの男性名詞が）生まれた一方で、変容によって古英語で「hlaefdige（ラエフディゲ）」と呼ばれる言葉が形成されました。この最初の部分（hlaef）もやはり「パンの塊」のことにほかならず、後ろの「dige」はある「活動（作業）」から変化したものです。

人がパンの生地をこねるとき（Kneten）、まさにこの「dige」という言葉に隠されている行為、すなわち「digan」「teigen」（Teig = 生地・種をこねる）を行っているのです。そして、このこねる活動を行う人物へときかのぼるなら、私たちは「Lordの妻」へと行き着きます。「Lord」がパンの番人（パンの分配者）であったのに対し、彼の妻は「パンの生地をこねる人（Brotteigerin / Brotkneterin）」「パンを作る人（パンの提供者）」だったのです。そして、ここからのちに「Lady（レディ＝貴婦人、淑女、奥方）」という言葉が生まれました。

このように、「Lord」と「Lady」は、神秘的な方法で「パンの塊（Brotlaib）」と深く結びついているのです。私たちはこれら二つの単語の中に、古い時代における「パンの分配者（主人）」と、「パンの調製者、パンの生地をこねる人（女主人）」から受け継がれた名残を今なお認めることができるのです。

ですから私たちは、今日の私たちが言語に対して持っている「抽象的なあり方」と、かつて音の響きの内部に「表現しようとする精神（霊）や魂」が同時に感じ取られていた時代の「具体的なあり方」との違いを、真に捉えるよう努めなければならないのです。

第三講

1919年12月29日、シュトゥットガルト

●基本的な視点

言語は、民族の性格や精神生活の本質を最も深く映し出す鏡である。

言語の発展は、単なる外来語の借用ではなく、
民族の魂的・靈的形成プロセスそのものである。

中央ヨーロッパ（特に高地ドイツ語）の言語は、
独自の内面的変容（魂化→靈化）と
外来要素の受容という二つの潮流を通じて、
ヨーロッパの他の言語とは異なる「純粹概念思考」の力を強く育んだ。

●要約

1. 矛盾する二つの事実

・事実A：

現代ドイツ語には、キリスト教流入時以降、
ラテン語・ロマンス諸語（フランス・スペイン）、英語などから
大量の外来要素が取り入れられている。
言語靈の変容能力が弱まるにつれ、
外来語はほとんどそのままの形で残るようになった。

・事実B：

一方で、印欧語族全体に根源的な親縁関係が存在する。

・例：

「船」：サンスクリット *naus* → ギリシャ *naus*
→ ラテン *navis* → 古ノルド *nōr*
「オール」：サンスクリット *aritrās* → ギリシャ *eretmon*
→ ラテン *remus* → 古高ドイツ *ruodar* (Ruder)

この矛盾を解く鍵として、「波動的な発展」が示唆される。

2. 言語・民族の発展は「波動運動」

人類・言語の発展は直線的ではなく、
「閉ざされた（隔離・独自発展）周期」と
「交流・影響し合う周期」が交互に繰り返される。

太古には、広大な地域で
共通の言語形成力が働いていた（印欧祖語的段階）。

その後、各民族が自らを閉ざし、独自の言語（方言・個別言語）を形成。
後になって、再び周辺民族から外来要素を取り入れる（逆輸入）。

この視点で中央ヨーロッパを見ると、
かつてヨーロッパはケルト的要素が強かったが、
ゲルマン系民族が北方から流入。
ケルト人から馬関連語（Mähre）や
「rix（支配者）」→「reich」などを借用・変容させた例がある。

中央ヨーロッパの言語は、独自の内面的変容を遂げながら、
外来の精神的影響（特にキリスト教）を受け入れた。

3. 言語の「地質学的層」と子音推移（第二次子音推移）

言語の音の変化を「地層」として捉える。

第1段階（最古・ギリシャ・ラテン語に多く保存）：

外界への直接的な適応（本能的・模倣的）。

第2段階（ゴート語・古ゲルマン語など）：

魂的変容（Seelisches）。内面性（Innerlichkeit）が強まる。

英語・オランダ語は主にこの段階に留まる。

第3段階（新高地ドイツ語・6世紀頃に結晶化）：

さらに抽象化・霊化（Geistiges）。

生の具体性から遠ざかり、純粋な概念思考を可能にする。

・具体例（子音の変化）：

duo（ラテン）→ two（英語）→ zwei（ドイツ）

thyra（ギリシャ）→ door（英語）→ Tür（ドイツ）

timbar（古サクソン）→ Zimmer（ドイツ）

・一般法則：b → p → pf/f、g → k → ch/h など、
循環的なメタモルフォーゼ。

4. 各段階の意味とドイツ語の特性

第1段階：

外界（自然・身体動作）への適応。

ギリシャ・ラテン語はこれを強く保ちつつ、

エジプト・アジアの秘儀文化を「外的な衣服」として受け入れた。

第2段階：

すでに形成された言葉を内側から魂的に変容させる。

言語に「内面性」を与える。

第3段階（高地ドイツ語）：

生からさらに遠ざかり、純粋な理念的・抽象的思考を可能にする。

ヘーゲルやゲーテの高度な抽象表現がこれに支えられている。

・高地ドイツ語の特徴：

内部の音の変容（抽象化・霊化）＋大量の外来語受容の融合。

外来語は「音の響きと意味の完全な調和」を失うため、

抽象的思考力を鍛える教育効果を持つ。

これにより、中央ヨーロッパ人は

「言葉を離れた純粋な思考」へと特に強く導かれた。

●本文

人生の様々な事実は、外面的に見れば、往々にして矛盾へと行き着くものです。しかし、まさにそのような矛盾を正しく探求の俎上に載せるときこそ、人間はより深い、本質的なつながりへと到達することができます。

皆さんも、ある程度徹底的に思索を巡らせてみるならば、私がここで第一講において詳しく説明し第二講で要約した事柄と、昨日（※第二講のこと）いくつかの具体例を挙げながらヨーロッパ諸言語の内的なつながりとして説明した事柄との間に、まさにそのような一つの矛盾を認めることができるはずです。

では、それによって特徴づけられる二つの事実の系列を、一度目の前に思い浮かべてみましょう。

私たちは一方において、現在の私たちの言語（ドイツ語）の構成の中に、多くの「侵入者（外来の要素）」が存在しているという点に注意を向けました。南部からキリスト教とともに私たちの地域へと、本来のドイツ・ゲルマン語の豊かな資産に対して別のものが付け加わってきたことを、私たちは実感しています。それは、いわばキリスト教的な表象やキリスト教的な感情と同時に、キリスト教的な言葉をもたらしました。その結果、現在これらのキリスト教的な言葉が、先ほど特徴づけたような方法で私たちの言語本質の内部に存在しているのです。

それから私は、やはり私たちの言語本質の範囲にすでに属しているという意味で、一定の重要性を持つ他の侵入者たちについても語りました。およそ12世紀に始まり、西方のロマンス諸国から発したあのいくつかの流入の波のことです。これらは、ドイツの言語霊がまだ変容能力（言葉を自らの中に同化させる力）を保持していた時代に重なっています。そのため、言語霊は西方から受け取ったものを、独自のやり方で音の響きの面でも、また意味の面でも、いまだ自らの中で変容させることができたのです。

私は当時（第一講で）こう言いました。「今日、例えばドイツ語で使われている『fein』という言葉が、本来はフランス語起源の『fin』であり、12世紀以降になって初めて私たちの言語本質の内部に入り込んできたもので、それ以前には存在しなかったということに気づいている人はほとんどいない」と。

さらに私は、ドイツの言語本質がもはや変容能力を保持していなくなった時代においてさえ、すでにスペイン語の要素が浸入していたこと、そして18世紀の後半、とりわけ19世紀になって英語の要素がドイツの言語本質の中へと浸入してきたときには、あの変容能力が完全に、これっぽっちも残っていなかったということに注意を促しました。

このように私たちは、ラテン語や、あるいはラテン語を経由した回り道によるギリシャ語から、あるいはまた西方のロマンス諸語から、言葉が中央ヨーロッパの中へと絶えず取り入れられてきたのを目にしていま

す。これは「現在の私たちの語彙体系は、その一部だけが本来の固有のものであり、その後はのちに取り入れられたものをその内部に宿しているにすぎない」と言わざるを得なくさせる事実です。

ところがその一方で、私は皆さんに、極めて多くの言語の間に「より緊密な親縁関係」が存在しているということにも注意を向けました。私はいくつかのゴート語の形態を提示し、それらがどのようにして私たちの言語の形態へと移行していったかを示しました。そしていくつかの箇所において、該当する言葉がラテン語やギリシャ語の中にも同様に見出せるということを指摘することができました。

つまり、私たちは一方において「私たちの言語は外部から異質なものを取り込んできた」と言わなければならないと同時に、もう一方においては「私たちの言語は、後年になってそこから外来の構成成分のようなものを取り入れることになる、まさにそれらの言語と、本来的に（太古の根源において）親縁関係にあるのだ」と言わなければならないのです。

さて、きわめて広範な意味においてではないにせよ、特徴的な具体例を用いるならば、より広大な地球上の地域にわたって「言語的なものの根源的な親縁関係（Urverwandschaft）」が存在していることは、非常に容易に証明できます。

例えば、サンスクリット語で「船」を意味する「naus」という言葉を取り上げてみるだけで十分です。この言葉をギリシャ語で探してみると、やはり「naus」であり、ラテン語で探してみると「navis」になります。同じ言葉をよりケルト的な色彩を帯びた地域で探すと「nau」という言葉になり、古ノルド語（古いスカンジナビアの諸言語）で探すと「nōr」になります。これらの言葉が（現代の）ドイツ語においては最終的にふり落とされて残らなかったということは、それほど重要なことではありません。しかし私たちは、きわめて広大な範囲にわたって親縁関係が存在しているのを目の当たりにしています。それは、ヨーロッパからアジアの向こう側へと広がる並外れて大きな地域にわたり、多くの事柄について証明できる親縁関係なのです。

また、古いインドの言葉（サンスクリット語）の「aritrās」を取り上げてみましょう。私たちはこの言葉を、ギリシャ語において「eretmon」として再び見出します。さらに同じ言葉を、特定の音の脱落（abwerfung）を伴った形で、ラテン語の「remus」として見出します。ケルトの地域では「rām」を見出し、古高ドイツ語では「ruodar」を見出します。私たちはこの言葉を今なお保持しています。これが私たちの「Ruder（舵／オール）」です。

このように、音の変容を伴いながら、様々な言語の広大な領域にわたって存在している大量の言葉をまとめることができます。例えば、ゴート語、北欧スカンジナビア諸語、フリジア語、低地ドイツ語、高地ドイツ語、さらにはバルト諸語（リトアニア語、レトヴァ語、旧プロイセン語）などです。また、このような親縁関係はスラブ諸語、アルメニア語、イラン諸語、インド諸語、ギリシャ語、ラテン語、ケルト語の中にも証明できます。

これらすべての言語の領域にわたって、言語的なものの「根源的な親縁関係」がいかに存在しているかを、私たちは目にしているのです。したがって私たちは、いわば言葉を形成する原因（言語形成の力）というものが、きわめて古い時代においては、これらすべての地域にわたって類似したものであり、それがのちの時代になって初めて枝分かれしていったのだ、ということを非常に容易に想像することができるのです。

私は「これら二つの事実の系列は互いに矛盾している」と言いました。しかし、まさにそのような矛盾を観察することを通じてこそ、人間は人生の多くの事象のなかに、本質的により深く分け入ることができるのです。なぜなら、私たちはまさにこうした一連の現象を通じて、次のように自分に言い聞かせることへと導

かれるからです。すなわち、「人類が歴史の過程で経験する発展は、しばしば想像されているような、きわめて連続的な形で行われるのでは全くなく、一種の波動運動のなかで行われるのだ」ということです。

なぜなら、これら二つの、一見すると互いに矛盾する事実によって表現されているプロセス全体を、皆さんは一体どのようにして別の形で想像できるのでしょうか。そこには、これらの広大な地域にわたる民衆の間に、ある種の「根源的な親縁関係」が存在しています。その上で、これらの民族はある一定の期間、自らを閉ざし続け、その結果として、それぞれに枝分かれした独自の言語（方言や個別言語）を形成していくのです。

つまり、「民族が独自の言語を育む周期」があり、それが今度は、「ある民族が別の民族へと影響を及ぼし合う周期」と交互にやって来るのです。これは事象を幾分大まかに特徴づけたものですが、このような「上昇と下降の運動（波の満ち引き）」に目を向けて初めて、特定の事実を本当に説明することが可能になります。

私たちが今提示したこれら二つの方向性（独自の発展と外部との交流）に基づいて言語の発展を考察するならば、民族の発展そのものの本質に対して、より深い洞察を投げかけることができるようになります。

私たちは一方において——そして私たちはこれを、これからドイツ語の発展へと適用していくことになりますが——いわば「外部に対して自らを閉ざした状態」のもとで、言語の特定の要素がいかんして発展していくかという点に配慮しなければなりません。そしてもう一方においては、外来の構成成分がどのように取り入れられ、それがまた、言語を通じて表現されうる「精神的・魂的なものの全体」にどのように貢献しているか、という点にも配慮しなければならないのです。

私たちは、これら二つの要素（独自の言語形成と外来語の受容）が、該当する民族の精神生活および魂の生活に対して、全く異なる方法で関わっていかなければならないということを、すでに予感することができます。

私たちは一方において、きわめて意味深い重大な事実を目を向けることができます。それは、例えばラテン語と、中央ヨーロッパの諸言語のより古い形態との間で、並外れて重要な言葉同士が親縁関係にあるのを目にすると、とりわけ顕著に現れる「根源的な親縁関係」です。

ラテン語の「verus」は「wahr（真実の）」を意味し、古高ドイツ語では「wâr」です。あるいは、ラテン語の「velle」とドイツ語の「wollen（～したい／意志する）」、またラテン語の「taceo（私は沈黙する）」とゴート語に現れる「thahan」といった、こうした極めて際立った例を取り上げるだけでも、皆さんは次のように言わざるを得ないはずです。すなわち、類似した響きを持つもの、つまり言語的に親縁関係にあるものが、古い時代にはヨーロッパの広大な地域にわたり——そしてこれはアジアについても証明できますが——支配していたのだ、ということです。

しかしもう一方において、現在のドイツ人の先祖となった中央ヨーロッパの住民たちが、やはり比較的早い時期に「外来の言語要素」を取り入れていたという事実は、並外れて奇妙なことです。それは、私がこれまで皆さんに特徴づけて説明してきた（キリスト教の流入などの）時期よりも、さらに昔にさかのぼります。

かつてヨーロッパが、私たちが通常語るような歴史的な時代よりも、はるかに多く「ケルト的要素」によって満たされていた時代がありました。しかしその後、ケルト人はヨーロッパの西方（イギリスやフランスの地域）へと追いやられ、中央ヨーロッパには、ほぼ間違いなく北方の地域からゲルマン系の諸民族が流入してきました。

その際、今や西方の隣人となったケルト人からも、ゲルマン人はのちに南部（ラテン語圏）から受け取ることになるのと同じように、外来の語彙構成成分を取り入れていたのです。つまり、中央ヨーロッパの住民たちは、一度はより閉ざされた状態で独自の発展を遂げ、他の民族もまたそれぞれに独自の発展を遂げたあとに、かつて太古の根源においては自分たちと共通の親縁関係にあったはずの「周辺地域（Randgebieten）」から、後年になって再び、外来の言語要素を絶えず（逆輸入するように）取り入れ続けたのです。

私たちは、もはや完全には「上品さ」の部類には属さないような言葉も、数多く持っています。例えば「Schindmähre（シントメーレ＝酷使されて衰弱した馬／老いぼれ馬）」という言葉がそれです。これは「酷使された馬」のことです。この「Schindmähre」という言葉は、そもそも馬を意味する古い言葉である「Mähre（メーレ）」を指し示しており、ここから私たちは今なお「Marstall（マールシュタル＝宮廷の厩舎／馬場）」といった言葉を持っています。

しかし、この（馬を意味する）言葉はケルト語起源のものであり、ケルト人がすでに西ヨーロッパへと追いやられた後のケルト人の間に見出されるものです。したがって、これは一方の（ルーツを同じくする）中央ヨーロッパと、もう一方の西方において別々に生じた変容ではなく、この言葉をゲルマン人が後になってからケルト人から単純に「引き継いだ（借用した）」に違いありません。

そして、このような言葉が極めて数多く引き継がれました。もちろん、その中には（ドイツ語側が）変容させる能力をいまだ保持していた言葉もあります。例えば、本来は半分ほどが役職名（あるいは称号）である「Vercingetorix（ウェルキンゲトリクス）」という名前のなかに、皆さんは「rix（リクス）」という言葉を見出すことができます。この「rix」は本来ケルト語の形成であり、ケルト人の間で取り入れられ、彼らの間では「統治者、権力者」を意味していました。そしてこれが、私たちの「reich（豊かな、勢力のある、支配的な）」という言葉、すなわち「富（Reichtum）によって強力であること」へと変化したのです。

つまり、ここでもまた、中央ヨーロッパの言語霊がまだ内的な変容能力を保持していた時代に、ラテン語からだけでなく、ケルト語からも言葉が取り入れられ、独自の形へと変容させられていたのです。

もし私たちが今、言語の発展を外面的な方法で十分に遠い過去までさかのぼって追跡できるとするなら（実際には不可能ですが）、最終的には、昨日私が特徴づけたような「子音や母音に対する関係（身体的・魂的な関わり）」から言語が生み出されていた、あの古い時代の原始的な言語形成の威力へと到達することになります。

言語は原始的な形態において誕生します。その後、言語のなかに「枝分かれ」として現れる現象は、本来なら人間の本性から全く同じように形成されようとしている事柄が、例えばある部族が山岳地帯に住んでいるか、あるいは平地に住んでいるか、といった違いに応じて、極めて多様な方法で表現されることに起因しています。喉頭やその周辺の諸器官は、山岳地帯においては異なった現れ方を求め、平野部においてはまた別の現れ方を求めるのです。

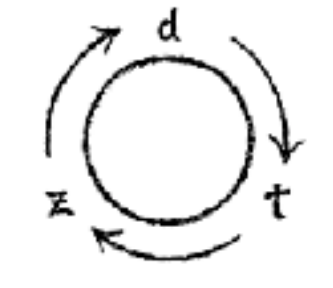
さて、言語のさらなる発展のなかに、一つの奇妙な現象が現れます。私たちはこれを「インド・ゲルマン諸語（印欧諸語）」の例で考察してみましょう。

私たちが使っている「zwei（ツヴァイ＝２）」という言葉を取り上げてみると、ラテン語では「duo（ドゥオ）」になります。これが中央ヨーロッパのより古い言語形態へと移行すると「two（トゥー）」という言葉になり、現代の私たちのところへ至ると「zwei」という言葉になります。

この言葉が辿った変容の道のりのなかに、皆さんは次のことを見て取ることができます。この「duo」は、ラテン語のなかに保存されている最も古い段階を指し示しています。「two」はそれよりも後（第二）の段階であり、そして形成された最新（第三）の段階が「zwei」です。

ここで母音にまで配慮するとなると非常に複雑になってしまいますので、ここでは子音に着目してみましょう。すると、私たちは次のように言わざるを得なくなります。すなわち、この言葉が経てきた変容の道において、「d」が「t」になり、さらに「t」が「z（ツ）」になるという、まさに「d → t → z」という順序（子音推移）で音の変容が完了しているのを目にしているのです。

※図1



このように、言葉が旅（移動）をする中で、音の変容が執り行われます。ドイツ語の「z」に対して、他の言語では「t（あるいはth）」の段階が対応しているのです。

これは決して、人工的な方法で頭の中で考え出された（思弁的な）事柄ではありません。詳細に記述しようとするならば、当然ながらさらに詳しく展開しなければなりませんが、この枠組みは、言語の変容における法則的な進行プロセスに対応しているもののなのです。

例えば、ギリシャ語の「thyra（テュラー＝扉、門）」という言葉を取り上げてみましょう。これを、より古い段階のまま留まった古代のステップ（第一段階）として見るならば、次のステップ（第二段階）は「d」の音を持つものになるはずですが、このステップを、私たちは英語の「door」に見出すことができます。そして、時計の針が進むように、最終的に変容を遂げたステップ（第三段階）は、「d」から「t」へと到達しなければなりません。事実、私たちには高地ドイツ語（標準ドイツ語）の「Tür（テュール＝扉）」という言葉があります。

このようにして、私たちは言うことができます。「私たちはいわば、最も古い『言語地質学的な層（sprachgeologische Schicht）』を立証することができる。そこでは、言葉の変容が常にこれら（d、t、zなど）のステップのいずれかの上に留まっている。そして次の変容は、次のステップの上に立つ。さらに私たちは、高地ドイツ語における第三の層を立証することができ、それはまた次のステップの上に立っているのだ」と。

もし、ギリシャ語の中にその表現を持つステップが「t」の音を持っているとするなら、（変化の途中で）後ろに留まった英語は「th」の音を持つことになり、英語に対してさらに先へと進んだ高地ドイツ語は「d」の音を持つことになるでしょう。

高地ドイツ語が、英語の「th」に対応する「z」の音を持っている箇所では、その前段階（第二段階）は「t」の音を持っていなければならない、さらにその前段階であるギリシャ・ラテン語のステップ（第一段階）

は「d」の音を持っていなければなりません。私たちはこのことを、現実存在する事実として証明することができるのです。

したがって、例えば第二段階であるゴート語において「t」の音を持っていた言葉は、次の段階（高地ドイツ語）では「z」の音を持っていなければなりません。新高地ドイツ語（現代ドイツ語）と、それより一段階深い層にあるゴート語との関係を示すために、ここで使える一つの言葉を取り上げるなら、私たちには「Zimmer（ツィマー＝部屋、かつては木造建築・材木の意）」という言葉があります。これがゴート語、あるいは同じ段階（層）に位置する古サクソン語においては、「timbar（ティンバル）」となるのです。現代の「z」から、かつての「t」へとさかのぼらなければならないわけです。

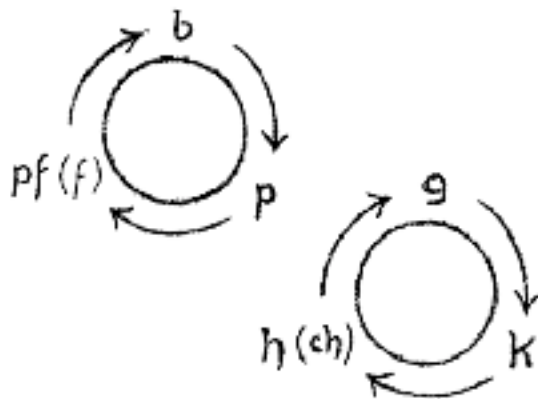
私は皆さんにその原理を提示しているにすぎません。辞書を手に取るなら、皆さん自身でこれらの事例を集めて確かめることができるでしょう。

この順序が正しいのと全く同様に、言語における他の多くの本質的な変容プロセスのなかでも、次の（子音の）流れを追跡することができます。

「b」の音を持つ言葉を比較してみると、それは次の段階（第二段階）では「p」になり、さらに次の段階（第三段階）では「pf」「ph」あるいは「f」になり、そしてこれが再び（一周して）「b」へと戻ります（ $b \rightarrow p \rightarrow pf/f \rightarrow b$ ）。

これと同様に、「 $g \rightarrow k \rightarrow ch(h)$ 」そして再び「g」へと戻るつながりも存在します。これについてもそれぞれに対応する具体例があります。

※図2



したがって、私たちは次のように言うことができます。「ギリシャ・ラテン語は、言語要素をより早い変容段階（第一段階）のまま保存した。これに対して、そこからゴート語になったものは、より後（第二）の段階へと押し上げられた」と。この（第二の）段階にまで押し上げられたものの多くは、今日でも例えばオランダ語のなかに保存されています。

そして、西暦6世紀（キリスト以後6世紀）になってようやく生じた「最後のひと押し」が、さらに一段階上のステップへと押し上げました。それこそが「高地ドイツ語（標準ドイツ語）の段階」なのです。

これにより私たちは次のように言うことができます。私たちは、かつてヨーロッパのきわめて広大な地域に広がっていたであろう、おそらく紀元前1500年頃にまでさかのぼる「第一の段階」を見出さなければなりません。次に私たちは、——最も古い段階がそのまま留まった南方の地域を除いて——広大な地域を支配す

ることになった「第二の段階」を見出します。そして、西暦6世紀になって「高地ドイツ語の段階」が結晶化して現れるのです。英語やオランダ語はそれより前の（第二の）段階に留まり、高地ドイツ語がそこから結晶化して抜け出してきたのです。

ここで、どうか次の点に注目してください。人間が子音の中から自らの言葉の響き（単語の音）を形成するにあたり——すなわち、いまだ完全に言語感情から言葉の響きを形成するにあたり——周囲の環境へと「完全に適応する」形でそれが行われるのは、いわば「最初のたった一度きり」だということです。

中央ヨーロッパ諸言語の遙か遠い祖先たちが、かつて第一の段階に従って、例えば（※後の高地ドイツ語で）「z」の音になるような特定の言葉の響きを形成したとき、彼らは「子音の要素は、外的な現象（外界の動き）に適応させられなければならない」と感じていました。その時、彼らは外界に合わせてその音（のちのzの根元となる音）を形成したのです。

しかし、その後に続く（第二、第三の）進歩の段階においては、もはや外界に合わせて音が形成されるということはありません。「一度言葉がそこに誕生してしまえば、それに続く次の段階は、内面的に変容させられるのであって、もはや外側の世界への適応によって形成されるのではない」のです。この変容は、いわば「民族魂的要素（民族霊の働き）の自立した成果」なのです。まず最初のどこかの段階において、言葉の響きが外界との調和の中で形成され、その後に続く段階は、ただ「内面において体験（追体験）される」だけであり、そこではもはや外的なものへの再度の適応は行われなないのです。

したがって、次のように言うことができます。ギリシャ・ラテン語の中に留まった段階は、多くの関係において、言語形成要素が環境に対して「感情的に適応したもの」を表現しています。

これに対して、ゴート語や古ゲルマン語などのなかに形成された次の段階は、この「直接的な適応」の段階を一步踏み越え、「魂的な変容」を経験した段階なのです。このことが、この言語に「はるかにより魂的なニュアンス（音調）」を与えることになります。

この変容の第一歩（第二段階への移行）を踏み出すことによって、言語要素は一つの魂的なニュアンスを獲得します。ですから、私たちがこの第二の段階を通り抜けたことによって、私たちの言語感情の中へと入り込んできたあらゆる事柄が、私たちの言語（ドイツ語）に「内面性」を与えているのです。

この種の「内面性」は、紀元前1500年頃からゆっくりと、時間をかけて形成されてきました。そして、この種の内面性は特定の古い時代に固有のものでした。しかし、それが後年の時代に向けてそのまま保持された結果、それはより「原始的なもの」へと移行していきました。そのため、それが今日でもなお（第二段階のまま）残されているオランダ語や英語においては、言葉の響きに対するより「原始的な感知（感覚）」へと移行してしまっているのです。

さて、高地ドイツ語（標準ドイツ語）は、西暦6世紀頃になってようやく第三の段階へと登りつめました。しかしこれは、最初の外界への適応からはさらに一步遠ざかることであり、高地ドイツ語がそれより前の段階から自らを脱皮させて形成されるための、強力な「内面的プロセス」だったのです。

第二の段階へ登ることが言語に「魂的なもの」をもたらしたのに対して、この第三の段階に達したことで、言語は「生」からきわめて大きく遠ざかることになりました。

これこそが、高地ドイツ語の持つあの独特の、往々にして「生から遊離した抽象的な要素」の正体なのです。これがあるからこそ、高地ドイツ語は自ずからドイツの魂に対して、ヨーロッパの他の多くの人々には到底理解できないようなある種の刻印を押すことになるのです。

例えば、ゲーテやヘーゲルにおけるように、この高地ドイツ語的要素がとりわけ高度な形で駆使されている場合、それを英語やロマンス諸語（フランス語やイタリア語など）へと翻訳することは不可能です。それらは単なる「擬似的な翻訳（翻訳もどき）」にすぎません。もちろん、全く再現されないよりは、何らかの形で模倣・再現された方がましですから、そのような翻訳も作られざるを得ないのですが。

きわめて卓越した意味において、まさにこの高地ドイツ語の有機体に初めて属するようになった言葉たちの内部に、どれほど強力に「霊化されたもの（Durchgeistigtem）」——単に「魂化されたもの」にとどまらない、高度に精神化されたもの——が横たわっているか。それを、他の言語へとそのまま移行させることは絶対にできません。なぜなら、他の言語にはそれを表現する言葉（器）が存在しないからです。

したがって、第二の段階へ登るということは、一方において言語が「魂化（Durchseelen）」されることであると同時に、言語を通じてその民族の「内面性」が魂化されることでもあります。

これに対して、まさに高地ドイツ語（標準ドイツ語）において研究することのできる、あの第三の段階へ登るということは、どちらかと言えば「生」から自らを遠ざけること」なのです。その結果として、人間は言葉を通じて、例えばヘーゲルや、あるいは特定のケースにおけるゲーテやシラーが到達したような、あのような「抽象的な高み」を掴み取ることができるようになります。このことは、高地ドイツ語が第三の段階へ登りつめたことと極めて深く結びついています。

このように、高地ドイツ語の例を見れば、言語形成すなわち言語の発展というものが、いわば外界への適応から自らを「引き離す」ことによって、またそれが一つの「内面的な、自立したプロセス」になることによって、いかにして、ある意味で自然から独立した形で展開する「人間的・個別的な魂のもの」が前進していくか、ということがお分かりいただけるでしょう。

このように、中央ヨーロッパの言語要素はいくつかの段階を通り抜けてきました。それらの段階を通じて、言語はまず「魂的（seelisch）」になり、次に「精神的（geistig）」になったのです。これに対して、第一の段階においては、一種の「本能的かつ動物的な、外界への適応」が行われていたにすぎませんでした。

一方、ギリシャ語やラテン語といった言語は、別の事柄を通じて発展してきました。これらの言語を単なる語形だけで捉えるならば、次のように言わざるを得ません。「その語形や音の形は、周囲の環境に対してきわめて強力に適応している」と。しかし、これらの言語を話していた該当する民族たちは、その環境への原始的な適応をそのまま維持し続けるという、その段階に留まりはしませんでした。彼らの言語は、ヨーロッパとはまた異なった働き方をした、エジプトやアジアからの多種多様な「外来の影響」を受けることによって、彼らに伝承された文化、その大部分が「秘儀文化」のための、単なる「外的な衣服（器）」となったのです。

ギリシャ人、そしてある程度まではローマ人に対しても、アフリカやアジアの秘儀（神秘の智慧）が伝承されました。そして当時の人々は、ギリシャ人とローマ人の言語の中に、アジアやエジプトの秘儀を「表現する」だけの威力を持っていました。このようにして、これらの言語（ギリシャ・ラテン語）は、自らの中にいわば滴り落とされた精神的な内容のための、外的な衣服となったのです。

これは、中央ヨーロッパの言語や北欧のヨーロッパ言語が「経験しなかった」プロセスでした。これら北欧・中欧の言語は、いま記述したような「もう一方の（内面化の）プロセス」を通り抜けたのです。彼らは単に第一の段階（外界の模倣の段階）において精神的なものを受け入れたのではなく、まず少なくとも第二の段階（魂化の段階）へと自らを発達させ、まさに第三の段階（精神化・抽象化の段階）に到達しようとしている最中にあつたのです。まさにその時、例えばキリスト教が、新たな言葉を伴った外来の精神的要素として彼ら（中欧・北欧の言語）の中へと浸入してきたのです。

そして、今日私がお話しした、あのケルト的要素が浸入してきた時にも、第二の段階は明らかにすでに達成されていました。したがって、これらの言語（ドイツ語など）において私たちが扱っているのは、「言語の内面的な変容（自立的な音の変化）」そのものなのです。その変容があつて初めて、精神的な影響（外来語の受容）がやって来ます。これに対して、ギリシャ・ラテン語において私たちが扱っているのは、そのような言語の変容ではなく、「第一の段階（原始的な適応の段階）への、精神的なものの直接的な注入」なのです。

このように私たちは、個々の民族の特性が本来何によって決定されているのかを、具体的な事柄のなかに探さなければなりません。こうした事柄を通じてこそ、人間は言語の変容や、それが精神生活（霊的生活）に対して持つ関係といったものを見出すことができるのです。

さて、私たちが使っている新高地ドイツ語（現代ドイツ語）には、第一に、それが「第三の変容段階」にまで登りつめたことによって、生から大きく遠ざかってしまったという特徴があります。しかし第二に、この言語の内部には、ありとあらゆる経路を通じて入ってきた、実に多くの外来の言葉が含まれています。南部からのキリスト教、同じく南部からのスコラ学、そして西方からのフランスやスペインの文化を通じて流入してきた言葉たちです。これらの言語要素はすべて後になって入ってきたものであり、現在の高地ドイツ語の内部に収まっています。このすべての事実が、この高地ドイツ語がいかに様々な要素から「合流して」成り立っているかを示しているのです。

そもそも、他の言語から外来の要素として取り入れられた言葉に対しては、人間は、ある民族が自然との関係の中で自ら形づくるような言葉や音のつながり（固有の言葉）に対して抱くような、あのような生々しい感覚を持つことはできません。

例えば、私たちが「Quelle（クヴェレ＝泉、源泉）」という言葉をもどのように感知しているか考えてみてください。この言葉は、私たちがそれを感知しうる限りにおいて、それが属する対象の本質に対してあまりにも見事に適応しているため、私たちの感知する感性からして、それをこれ以外の別の名前と呼ぶことなど到底考えられないほどです。この言葉は、人間が泉（の湧き出る様）を通じて体験するすべての事柄を表現しています。

かつて言葉の音や単語が根源的に形成されたときには、例外なくこのように、子音も母音も周囲の環境に完全に適応していたのです。

しかし、例えば皆さんが「Essenz（エッセンス＝本質）」や「Kategorie（カテゴリー＝範疇）」、あるいは「Rhetorik（レトリック＝修辞学）」といった言葉を耳にすると、その言葉が本来意味している事柄とのつながりを、先ほどの泉のときと同じように（生々しく）感じ取ることができるのでしょうか。

いいえ、民族（の聞き手）は単にその言葉の響きを受け取るだけであり、その音の響きの翼に乗って「概念」を掴み取ろうと努力しなければならないのです。そこでは、言葉の響きと、概念や感情との間の「完全な調和」を意味するような、あのような内面的な体験を通り抜けることは全くできません。

しかし、先ほど特徴づけたような「上昇と下降（満ち引き）を繰り返す発展」のなかに、ある民族が、自分たちで直接形づくったのではない言葉を他の民族から取り入れるということの背景には、実は「深い知恵（Weisheit）」が隠されているのです。つまり、その言葉の響きは耳にするものの、それが指し示している対象との調和を生々しく体験することのないような言葉です。

なぜなら、そのような言葉が多く取り入れられれば取り入れられるほど、それを受け入れる民族は、そうした言葉をどうにかして（自分の頭の中で）処理するために、「魂の生活における全く特別な力（思考の力）」を助けとして呼び出さざるを得なくなるからです。皆さんは、ただそのことを思い出してみるだけでよいのです。

私たちは今日でも「感情の響き（Empfindungslaute＝間投詞や擬音）」のなかに、言語形成力が周囲の環境へと適応している様子を、人間の体験へと具体的に語りかける形で、今なお少しだけ研究することができます。例えば次のようなものです。

「Pfui!（プフイ＝うわ、汚い、恥を知れ!）」

「Tratsch!（トラッチ＝ピシャッ、バシャッ、あるいは噂話のペチャクチャ!）」

「Tralle walle!（トラレ・ヴァレ＝ルンルン、らんらん!）」

これらの中で、私たちは自分が表現したい事柄に対して、いかに見事に身体を適応させていることでしょう！

しかし、皆さんが学校で——なにも論理学や哲学を学ぶときだけとは言いませんが——およそ現代の「科学・学問」を学ぶときには、事態は一体どれほど異なっていることでしょうか。そこでは皆さんは、例えば（牛の鳴き声である）「Muh（ムー）」という音の中に、皆さんが牛から聴き取るものを模倣・再現して感じ取るような、あのようなあり方とは全く異なる、「魂の力のなかの別のもの（高度な抽象的思考の力）」を助けとして呼び出さなければならぬような、そんな言葉たちを真に受け取ることになるのです。

皆さんが「Muh」と発音するとき、そこには、皆さん自身のなかに生じる（牛との出会いの）体験がそのまま追体験されているのです。

皆さんが異国の言語（外来語）の言葉を耳にするとき、そこでは、言葉の響きそのものから聴き取るべき内容をそのまま聴き取るのとは、全く異なる作業を真に行わなければなりません。皆さんは「抽象化する力」を駆使しなければならず、「純粋な概念の力」を駆使しなければなりません。つまり、理念的に（頭の中で）表象することを学ばなければならぬのです。

それゆえ、中央ヨーロッパの諸民族のように、とりわけ多くの外来の要素を取り入れてきた民族は、この外来要素の受容を通じて、「理念的思考（観念的思考）の力」へと自らを教育することになったのです。

そして、私たちが高地ドイツ語（標準ドイツ語）を考慮に入れるとき、この中央ヨーロッパにおいて二つの事柄が融合することになります。

一方においては、第三の段階へ登りつめたことによってもたらされた、すでに内面的な「生からの遊離（生活の具体性からの遠ざかり）」を意味しているような、あの独特な「内面性」。

もう一方においては、外来の要素を絶えず（外部から）取り入れ続けたことによってもたらされたもの。

これら二つの事柄が融合したことによって、高地ドイツ語の要素の内部において、かつてないほど強力な「理念の力」が展開されることになりました。それは、「完全に純粋な概念へと登りつめ、その純粋な概念のなかで自由に活動（思索）する可能性」です。

これこそが、言語発展におけるこれら二つの潮流（独自の音の変容と、外来語の不断の受容）を通じて、中央ヨーロッパの言語の本質にもたらされた、圧倒的な「教育（自己教育のプロセス）」だったのです。「内面的な、言葉を伴わない思考（wortloses Denken = 言葉なき思考）」への教育——私たちが言葉に依存することなく、純粋な思考そのものへと真に進み進境していくような思考への教育——は、いま特徴づけた事実によって、中央ヨーロッパにおいて特に高度な形で生み出されたのです。

これらは、事実から直接的に導き出される事柄です。私たちがこの高地ドイツ語の言語本質をこのような意味において考察しないのであれば、すなわち、音のメタモルフォーゼ（子音推移）や言葉のメタモルフォーゼ、そして様々な段階における外来語の同化吸収というプロセスを通して考察しないのであれば、私たちは高地ドイツ語の本質をまったく理解することができません。

本日は、中央ヨーロッパの諸言語の特性として、以上のことを皆さんに提示しておきたかったのです。

第四講

1919年12月31日、シュトゥットガルト

●基本的な視点

言葉の形成プロセスや現代の言語構造を理解するには、
魂の視点が不可欠である。

言語の発展は民族魂の像そのものである。
太古の人間は、音を通じて外界と内面を
直接的に生き生きと表現していたが、
抽象化の過程で感情要素を下意識に沈め、純粹思考の力を獲得した。

このプロセスを追うことで、私たちは
人間の魂的・精神的な発達の秘密に触れることができる。

●要点

1) 言葉の中に残る古い具象的イメージ

Eimer (バケツ) ← 古高ドイツ語 einbar (1つで運ぶもの=片手桶)

Zuber (手桶) ← zweibar (2つで運ぶもの=両手桶)

Messer (ナイフ) ← mezzisahs (食事用の剣)。

「sahs」は軍神Saxnot (剣の神) の「剣」を指し、
食事のナイフが「食事用の剣」であった。

Wimper (まつ毛) ← winthra bra (うねる眉=まばたきする毛)

Schulze (村長・姓) ← sculdheizo (罪を言い渡す者=Schuld-heißer)

これらの例は、現代では抽象化・融合した言葉の中に、
かつての生活動作・身体的イメージ・神話的つながりが
凝縮されていることを示している。

2) 接頭辞・接尾辞の魂的意味

-er (Gärtner, Wächter) ← 古高ドイツ語 -ari :

手を動かして活発に実践する姿 (Hantieren) 。

ur- / er- : 根源・最初のもたらすもの

(Urkunde, urbar machen, erkennen, Ertrag) 。

名詞と動詞で形は異なるが本質は同じ。

ge- (Geselle, Genosse) ← ゴート語 ga :

引き寄せて一つにまとめる・凝縮する力。

-lich (göttlich, ähnlich) ← leiks (姿・写し絵) 。

「神の姿をしたもの」「ほとんどその姿を持ったもの」。

-tum (Königtum, Ungetüm) :

tun (行う・秩序をもたらす) 。

Ungetüm＝調和した秩序 (getum) が生じていないもの。
-ig : eigen (固有の)。
feurig＝火がそのもの自体に固有に備わっている。

これらの要素は、
かつて音楽的・身体的・感情的な響きを持っていたものが、
抽象的な文法記号へと硬化していった過程を示している。

3) 抽象化のプロセスと二語表現

言語は感情・感覚との生々しい結びつきを失うことで、
純粋な思考 (抽象化) を可能にする。
人間は音の生活から意識を引き上げ、
下意識に音を沈め、表象・概念を高める。

二つの具象語を並べて「中間」の概念を挟み込む伝統：

Land und Leute (土地と人々)
Wind und Wetter (天候)
lebt und webt (生き、そして織りなしている＝全人格的に息づく)
singen und sagen (歌い、かつ語る)

これらは、頭韻や母音韻を伴い、抽象一語が生まれる前の魂の手法である。

4) 意味の変化 (魂のドラマ)

albern (愚か) ← alawari (完全に真実な)
→ 正直者が「要領の悪い馬鹿」と見なされる心理的逆転。
fromm (敬虔) ← 本来「役に立つ・有用」。
キリスト教の影響で「信心深い」へ。
keck (生意気) ← 本来「活発に動き回る・きびきびした」。
frech (無礼) ← 本来「戦いにおける勇敢」。
Demut (謙虚) ← diomuoti (下僕の忠誠心)。
キリスト教が「神に対する下僕の心構え」へ転用。
in Bausch und Bogen (一括して) :
同じ曲線を「下から見上げる (Bogen＝弓)」か
「上から見下ろす (Bausch＝膨らみ)」か、という
視覚的・身体的両面を包み込む。

特にキリスト教流入は、多くの言葉の意味を大きく変容させた。

5) 言葉の旅と教育への示唆

Biwak (野営) ← 古ドイツ語 Beiwacht (共に守る見張り) → フランスへ (bivouac) → 再びドイツへ逆輸入。
言葉は国境を越え、変容し、故郷に帰るドラマを繰り返す。

●本文

皆さんがご覧になった通り、これらの一連の考察においてまず重要となるのは、言語史的な契機を「魂的なもの」へと還元することです。実際、魂的な要素へと深く分け入らなければ、言語形成のプロセスを理解することも、今日のいかなる言語構造物の状態を理解することもできません。

本日もまた——次回以降の講義において、より具体的な言語史的事実によってこれを説明していくために——言語史的現象の考察から「民族魂の発展」へと皆さんを導くことになる事柄を、いくつか提示しておきたく存じます。

ここで私は、互いに対をなす二つの言葉、すなわち「Zuber（ツューバー＝手桶／二手桶）」と「Eimer（アイマー＝バケツ／桶）」へ皆さんの注意を向けたいと思います。

今日、古いドイツ語であるこれらの言葉を取り上げてその使われ方を考えてみるなら、次のことが分かります。すなわち「Eimer（バケツ）」とは、人が何かを運ぶための容器（容器）であり、上部に「たった一つの取っ手」がついているもののことであり、これに対して「Zuber（手桶）」とは、「二つの取っ手」がついているもののことです。今日、この事実が厳然として存在しており、それが「Zuber」と「Eimer」という二つの言葉の中に表現されているのです。

この「Eimer」という言葉を調査してみると、1000年以上過去へとさかのぼることができます。古高ドイツ語、あるいはそれよりもさらに前の段階において、私たちはこの言葉が「einbar（アインバル）」という形であったのを見出します。さて、皆さんは私が以前、「bar（バル）」という音のつながりを示したことを覚えているでしょう。これは「beran：運ぶ、持つ、身ごもる」と結びついています。そして、この「einbar」が（音が縮まって）一つに融合したことによって「Eimer」が生まれたのです。

つまり、古い形態においてはきわめて明らかに見出せるように、「一つの取っ手で運ぶこと」がはっきりと表現されているわけです。なぜなら「bar」とは単純に「運ぶためのもの」を意味するからです。

これに対して「Zuber」は、古高ドイツ語では「zwiebar（ツヴィーバル）」と言いました。これは「二つ（zwie）で運ぶもの」、すなわち「二つの取っ手がついた容器」という意味です。このように、現代の言葉が「音が縮まること」によって生じたものであり、古い形態の中に分け入ってみれば、現代の言葉の中ではもはや区別できなくなっている本来の意味が、バラバラに分解された形でありありと残されているのを目にすることができるのです。

これと類似した現象は、他の言語素材（単語）についても観察することができます。いくつかの特徴的な現象を魂の前に思い浮かべてみましょう。

例えば「Messer（メッサー＝ナイフ／包丁）」という言葉を取り上げてみてください。この言葉は、古高ドイツ語の「mezzisahs（メッツィザクス）」へとさかのぼります。「mezzi（メッツィ）」の頭にある「M」の音を考慮に入れたとしても、これは「ezzi、essen（食べる）」——すなわち食べることを意味する古い形態「ezzan（エッツァン）」——と結びついているものにほかなりません。

では、後半の「sahs（ザクス）」、あるいは別の発音で「sax（ザクス）」とも言えますが、これは何でしょうか。皆さんは次のことを思い出すだけで十分です。

キリスト教が南ドイツ一帯に広がっていった時代、修道士たちは現地（ゲルマンの地）で、いまだ古代の三柱の神々に対する信仰が残っているのを目にしました。そのうちの一片が「Saxnot（ザクスノット）」という神でした。これは軍神「Ziu（ツィウ＝北欧神話のティール）」のことです。この「Saxnot」とは「生きている刀剣」を意味する合成語であり、この「sahs」もそれと全く同じ音のつながり（語源）を持っているのです。

したがって、皆さんが普段使っている「Messer（ナイフ）」という言葉のなかには、「Essensschwert（エッセンシュヴェールト＝食事用の剣）」、すなわち「皆さんが食事をするための剣」という合成語が隠されているのです。

同じように「Wimper（ヴィンパー＝まつ毛）」という言葉も興味深いものです。この言葉は「winthra bra（ヴィントラ・ブラ）」へとさかのぼります。「bra」は「Braue（眉／眉毛）」のことであり、「wint」は「sich Windende（うねるもの／動くもの）」を意味します。ここには「うねり動く眉（まばたきする毛）」という情景が、ありありと表現されているのを見て取ることができます。現代の合成語である「Wimper」の中では、私たちはもうそれを区別することはできません。

さらに、本来は生々しく感じ取られていた文脈が、のちに音が縮まって融合した、もう一つの特徴的な言葉を挙げましょう。皆さんも、ドイツの歴史や名字などで時折耳にする「Schulze（シュルツェ＝中世の村長／裁判官）」という言葉をご存じでしょう。古高ドイツ語にさかのぼると、この言葉は「sculdheizo（スクルトヘイツォ）」という形で見出されます。

これは、村の中で何か問題を起こしたときに、「お前にはこれこれの罪（Schuld＝責務・負い目）がある」と言い渡してくれる、あるいは注意を促してくれる人物のことでした。「罪が何であるかを告げる（heißen＝命じる・名付ける）べき人物」、すなわち「sculd-heizo（罪を言い渡す者＝Schuld-heißer）」が、のちに「Schulze」という言葉になったのです。発展を続ける言語がどのような道のりを辿るのか、皆さんに理解していただくために、まずはこれらの具体例を提示しておきました。

この方向性において、私たちはさらに別の現象も観察することができます。方言の中に今なお残りやすい、ある言葉を例に挙げてみましょう。

例えばウィーンにおいては、抽象化が早い段階で浸透した北ドイツに比べて、多くの方言的要素がより純粋な形で保存されてきました。そしてこれは、10世紀頃にまでさかのぼる原始的な文化に根ざしています。南ドイツの地域に保存されてきた、あの「言葉を創造する言語霊」の働きは、北方の文化の中には入り込みませんでした。南ドイツの言語霊の中には、古い時代の言語の営みの形態が今なお頻繁に現れているのを認めることができます。

例えばウィーンには、きわめて生々しい「Hallodri（ハロードリ＝いたずら者／お天気屋／軽薄な男）」という言葉があります。これは、好んで悪ふざけをしたり、いたずらに揉め事を起こしたり、場合によっては（それほど深刻ではないにせよ）羽目を外した生活に身を投じたりする人物のことです。頭の「Hallo（ハロー）」は彼の起こす大騒ぎする行為を指し示しており、後ろの語尾である「-ri」は彼の「振る舞い（身振り）」を指し示しています。

この「-ri」という語尾は、古高ドイツ語の「-ari」が、中高ドイツ語の「-aere」となり、現代の標準ドイツ語（新高地ドイツ語）においては名詞の末尾につく「-er」という平凡な語尾へと、完全に弱められてしまったものの「方言的な名残」なのです。

例えば、古高ドイツ語の「wahtari (ワハタリ)」という言葉を取り上げてみましょう。ここにもまさにこの「-ari」という音節があり、オーストリアの方言で「Hallodri」の中に感じ取られているものと同じ要素が含まれています。「何らかの事柄を伴って現実の生活の中に立ち現れること」、それこそがこの「-ari」という接尾辞に込められた意味なのです。そして頭の「waht」は「Wachen (見張り／夜警)」を意味します。したがって、見張りという任務を身をもって遂行する人物が「wahtari」でした。これが中高ドイツ語では「wahtaere」となり、この段階ではまだ本来の豊かな響きを保持していましたが、現代語では「Wächter (ヴェヒター＝見張り人／看守)」となりました。

現代語では単なる「-er」という語尾に縮まってしまったため、かつて「-ari」という響きの中に込められていた「その事柄を身をもってせわしなく取り扱うこと (Hantieren mit der Sache)」という生々しいニュアンスは、もうほとんど感じ取ることができなくなっています。

したがって、この「-er」という語尾を持つすべての言葉 (～する人、～の職人) に接するとき、私たちは古い時代から保存されてきた豊かな響きを自らの中に再び浸透させ、「その事柄を手を動かして実践している姿」を感じ取らなければならないのです。

かつて庭の中で手を動かして働いていた (実践していた) 人は「gartenaere」であり、これが現在の私たちの「Gärtner (ゲルトナー＝庭師)」という言葉になりました。

このことからお分かりのように、言語というものは、かつて持っていた豊かな響き、いわば「音楽的な要素」を、次第に「抽象的なもの」へと変調させていく傾向を持っています。その抽象化の過程で、音の持つ十全な響きの豊かさは追体験されなくなり、とくに、その言葉が宿していたイメージ (表象) や感情の十全な中身とのつながりも、引き離されて失われていってしまうのです。

興味深い例として次のようなものがあります。今日の私たちは、「Ursache (原因)」、「Urwald (原始林)」、「Urgroßvater (曾祖父)」などの言葉の中に、「ur- (ウル＝本来の、根源の)」という接頭辞があるのを知っています。

私たちの言語の発展を約2000年さかのぼると、ゴート語ではこの同じ音節が「uz (ウズ)」として存在していました。また、西暦1000年頃の古高ドイツ語にさかのぼると、この同じ音節が「ar」「ir」「ur」という形で見出されます。そして700年前 (中高ドイツ語の時代) にはやはり「ur」となり、今日でも「ur」のままです。つまり、この音節は比較的早い時期に変容を遂げたのです。

ただ、動詞においては、この「ur」の響きは弱められていきました。例えば、私たちは何事かを知らせるものを表現するときに「Kunde (通知／便り)」と言います。しかし、ある通知の「最初の根元」、つまり他のすべての通知がそこから発している最初の根元を指し示したいときには、私たちは「Urkunde (公式文書／証書)」と言います。

ところが、動詞においては、この「ur」が「er- (エア)」へと弱められてしまうため、私たちは「kennen (知っている)」という動詞を発展させる際、「urkennen」と言うことも可能であったはずなのに、そうは言わずに「erkennen (認識する)」と言います。しかし、この「er-」は「Urkunde」における「ur-」と全く同じ意味の価値を持っているのです。

また、私が誰かに対して何かを行うことを可能にするとき、私はその人に何かを「erlauben (許可する)」と言います。これを特定のケースにおいて名詞にするなら、私の「erlauben (許可)」によってその人に与える「Urlaub (休暇)」という言葉になります。

さらに、これらすべての響きに連動している、もう一つのきわめて興味深い言葉の形成があります。皆さんは「einen Acker urbar machen（土地を開墾して耕作可能にする）」という表現をご存じでしょう。この「urbar（耕作に適した／実りをもたらす）」の「-bar」もまた、「beran（運ぶ／実らせる）」と結びついています。つまり「urbar」とは、土地に「最初（ur）の実りをもたらさせること」なのです。

ここには、今日でも残っている「ertragen（耐える／産出する）」という言葉との間に、いわば「意味の類似性（アナロジー）」が存在しています。今日の皆さんが「Ertrag des Ackers（土地の収穫高／実り）」と言うとき、これは土地を「urbar」にすること、すなわち「土地の最初にもたらされたもの（最初の実り）」と全く同じ言葉（語源）なのです。そして古い時代には、この「urbar」という言葉は、土地が何かをもたらすことができるように、例えば「小作料（年貢）」や「税金」を納められるように土地を耕作するという意味でも使われていました。

私たちの言葉の中に現れる「接頭辞」や「接尾辞」の研究は、総じて並外れて興味深いものです。例えば、私たちは非常に多くの言葉の中に「ge-（ゲ）」という接頭辞を持っています。これはゴート語の「ga（ガ）」へとさかのぼります。このゴート語の「ga」のなかには、「引き寄せて一つにまとめること（凝縮）」という感覚がいまだ完全に感じ取られていました。「ga」はおおよそ、引き寄せ、押し縮めるという「感情的な意味」を宿していたのです。これが古高ドイツ語では「gi」となり、現代の標準ドイツ語（新高地ドイツ語）ではまさに「ge-」となりました。

そこから、別の経路で形成された「salle（ザレ）」や「seile（ザイレ）」という言葉（広間／大部屋の意）の頭に、この「ge-」を置いてみましょう。すると「Geselle（ゲゼレ＝仲間／同僚、かつての職人の徒弟）」という言葉になります。これは、「他の人間と同じ部屋（Saal）に住んでいる人」、あるいは「同じ大部屋で一緒に眠る人」のことです。それがのちに「Geselle（仲間）」となったのです。

同様に「Genosse（ゲノッセ＝同志／相棒）」とは、「他の人間と同じものを一緒に享受する（genießen）人」のことなのです。

私はここで、これらの具体例を通じて特徴的に浮かび上がってくる「共通のプロセス」に、すでに皆さんの注意を向けています。言葉の音の内部に、それが意味する事柄に対する直接的な感情がいまだ息づいている場合と、その感情がもはや失われてしまっている場合とでは、人間が言葉に対してとる関係性は自ずから異なってくるはずです。

幼少期から「Geselle（仲間）」という言葉はこれこれの意味だと記憶しているがゆえに、ただ単に「Geselle」と発音する場合と、その言葉を口にするときにいまだ「Saal（大部屋）」の感覚を抱いており、「Geselle」という言葉の中に、まさに大部屋と二、三人の人間とのあの（生々しい）結びつきを感じ取っている場合とでは、やはり全く意味が異なります。

この「感情の要素」がふり落とされることによって、初めて人間には「抽象化する可能性」が与えられるのです。

例えば、私たちの多くの言葉のなかに、「-lich（～のような／～らしい）」という接尾辞があります。「göttlich（神々しい）」、「freundlich（親切的な）」などです。この「-lich」という音節を2000年前に探してみると、ゴート語では「leiks（ライクス）」という形で存在していました。

しかし、このゴート語の「leiks」——これがのちに古高ドイツ語の「lich」になるのですが——は、「leich（ライヒ）」、さらには「leib（ライプ＝肉体）」とも本来的に親縁関係にあります。そして、私はすでに（第二講で）皆さんに申し上げた通り、この「leich-leib」という言葉は、「人間が死んだあとに残された“姿”」を表現しているのです。

したがって、現代語の「Leichnam（死体／遺骸）」という言葉は、実は一種の「トートロジー（同義語反復）的な形成」にほかなりません。それは、子供が最初は全く同じ音の言葉を二つ並べて、「ワンワン（wau-wau）」や「モーモー（muh-muh）」と言い、その繰り返しのなかに意味を込めるような、あのような言葉の作られ方と同類なのです。

もちろん、全く同じではない音同士を組み合わせることも可能です。そのような組み合わせの例が、まさに「Leichnam」という言葉なのです。前半の「Leich」は、本来すでに、人間が魂に去られたあとにあとに残る「姿」のことです。これに対して、後半の「-nam」は「ham（ハム）」へとさかのぼり、この「ham」は今なお「Hemd（ヘムト＝シャツ／肌着）」という言葉の中に保存されているもので、「Hülle（被膜／包み／衣服）」を意味しています。

つまり「Leichnam（死体）」とは、「姿の包み（Gestalten-Hülle）」、あるいは私たちが死後に脱ぎ捨てた姿のシャツ（Gestalten-Hemd）」という意味なのです。したがって、ここでは「姿（Gestalt）」と、そこから少しニュアンスのズレた「包み（Hülle）」という、二つの類似した事柄が「ワンワン」と同じように並べられているわけです。

そして、この「leiks / leich（写し絵としての姿）」という言葉から、現在の私たちの接尾辞である「-lich」が形成されました。

このことから、次のようなことがお分かりいただけるでしょう。皆さんが「göttlich」という言葉を形成するとき、この言葉は本来、ある「姿」を指し示していなければならないのです。なぜなら「-lich」とは「leiks = 姿」だからです。私はそこに、神的なものを表現しているある姿を指し示しているわけです。すなわち、「神の姿をとったもの（gottgestaltet）」こそが「göttlich」の本来の意味なのです。

このことは、例えば古高ドイツ語の「anagilih（アナギリヒ）」という言葉に目を向けると、とりわけ興味深く観察することができます。この言葉の内部には、ゴート語に由来する「ana（アナ）」がいまだ含まれており、この「ana」とは「nahezu（ほとんど／～に近い）」という意味です。そして後ろの「gilih（ギリヒ）」は「姿」のことです。したがって、「類似している（ähnlich）」ものとは、本来「ほとんどその姿を持っているもの（fast die Gestalt hat）」という意味なのです。これが、のちに現代の標準ドイツ語（新高地ドイツ語）の言葉になるときに、「ähnlich（類似した）」という言葉へと変化したのです。

まさにこの例において、皆さんは、最初は純粋な言語史的なものではなく、いわば「言語心理学的」な事柄とでも言うべき現象を研究することができます。なぜなら、それが皆さんに、言葉のなかに「感情の価値」がいかに息づいているか、しかし、その感情の価値が人間の感覚の中でいかに次第に切り離されていき、表象と音の響きとを結びつけているものが、いかにして完全に「抽象的な要素」へと変化していくかを示してくれるからです。

私は皆さんに、接頭辞の「ge-」、ゴート語の「ga」を提示しました。ですから、この「ga（現在のge）」に込められた「共に作用すること（凝縮・調和）」という感覚をいまだ（生々しく）感じ取っており、それを「姿（形骸）」、すなわち「leich」に対して適用したと想像してみてください。

すると、私はそれを感情史の観点から「調和し合う姿 (zusammenstimmende Gestalt)」と呼ぶでしょう。その意味は、わざわざ言葉にして口に出さずとも、その響きの内部に生きているのです。「Geleich (ゲライヒ)」、のちの「gleich (グライヒ＝同じ、等しい、均等な)」とは、本来「調和し合う姿」「共に作用し合う姿」という意味だったのです。それが「geleich」から「gleich」となりました。

ここで、多くの秘密を明らかにしてくれる一つの言葉に注目してみましょう——本日はこれを、ある一つの側面からだけ考察してみたいと思います——私たちの「Ungetüm (ウンゲテューム＝怪物、化け物、巨大なもの)」という言葉に注目してください。

この(現代語の)「ü」の音は、本来の「u」の音が変音(ウムラウト)した形にすぎず、元は「Ungetum」でした。そして、私たちがここから切り離すことができる「-tum (テューム)」という後ろの部分は、古高ドイツ語の「tuom (トゥオム)」へとさかのぼります。この「tuom」は、行為を表す動詞の「tun (トゥーン＝行う、成し遂げる、創り出す、ある関係性をもたらす)」という言葉と結びついているのです。

したがって、この「-tum」が接尾辞(後ろつづり)になっているすべての言葉のなかには、何らかの「共に作用し合う関係性」が含まれているのだ、ということを私たちは今なお追体験することができます。「Königtum (王権／王国)」、「Herzogtum (公爵領)」、そして「Ungetüm (怪物)」です。

「Ungetüm (怪物)」とは、「まっとうに共に作用し合う秩序 (getum) が“生じていない (un-)”もの」という意味なのです。「un-」という否定の接頭辞が、共に作用し合う調和(秩序)を否定しているわけです。その肯定形である「getum」そのものであれば、「共に作用し合う秩序ある状態」を意味していたはずなのです。

また、ご存じの通り、私たちのところには「-ig (イッヒ＝～の性質を持った)」という接尾辞がついた言葉が数多く存在します。「feurig (情熱的な／火のような)」、「gelehrig (物分かりの早い／従順な)」などです。これは古高ドイツ語の「-ag」や「-ic」、中高ドイツ語の「-ag」「-ig」へとさかのぼりますが、これは本来、形容詞的に使われる「eigen (アイゲン＝固有の)」ということを表現したものであり、「それに固有である (es ist ihm eig)」という意味を持っています。

したがって、この「-ig」という接尾辞が現れる場所では、それは常に「固有であること (アイゲン)」を指し示しているのです。「feurig (火のような)」とは、本来「feueereigen (火が固有のものとして備わっている)」、すなわち「火の性質がそのものの自体に属している」という意味なのです。

私が皆さんに申し上げてきた通り、私たちは、こうした「音が縮まること(融合)」、そして融合の過程で生じる音構成の変容を通じて、言語霊が経ていく「抽象化のプロセス」を、まさにこのようにして観察することができるのです。

このことは次のように表現できるでしょう。ある民族の言語発展におけるきわめて、きわめて初期の時代において、人間はその感情を完全に「音(響き)」へと寄り添わせていました。いわば、当時の言語は、子音の響きによって外的な出来事(自然界の動き)を模倣・再現した分化され複雑化された身振りと、その内部に現れる母音の構成による間投詞や感情の響きだけで、本来成り立っていたのです。

ここから、言語形成のプロセスが前進します。人間は、この「音の響きを感情的に追体験すること」から、いわば脱却していくのです。では、そのとき、人間は一体何を行っているのでしょうか。

人間は相変わらず言葉を話し続けてはいます。しかし、彼が話すとき、「発声行為」自体が、かつて表象や感情が音形成とダイレクトに結びついていた時代よりも、はるかに深い「下意識」の領域へと押し込められてしまうのです。話すこと自体が、下意識の領域へと投げ落とされます。

その一方で、人間の「意識」は、その背後にある「思考」を捕らえようとするようになります。どうかこのことを、一つの「魂のプロセス」としてよく観察してください。

音のつながりを「無意識」のものにすることによって、人間は自らの意識を、もはや音や音のつながりの中だけに縛られることのない「表象」や「感情」へと高めていくのです。つまり人間は、音が今なお指し示してはいるものの、もはやかつてほど緊密には音と結びついていない「何か」を掴み取ろうと努力するわけです。

このようなプロセスは、音のつながりからいわば「自らを脱皮させる」というあの根源的な段階がすでに過ぎ去ったあとの時代においてさえ、今なお観察することができます。かつて「音のつながり」を用いて行われていたのと全く同じプロセスを、今度は「言葉のつながり」を用いて行わなければならないのです。なぜなら、そこではすでに（抽象的な）言葉たちが誕生しており、人間はもはや言葉の音のつながりを（身体的に）十全に感じ取ることができず、むしろ「記憶」を頼りにして、音のつながりと表象のつながりとを結びつけているからです。

人間は、より高い段階において、かつて「音」や「音節」を用いて経験したのと全く同じプロセスを、今度は「言葉」を通じて経験しているのです。

皆さんが、ある特定の地域に住む人間たちを表現したいと考えていると仮定してみましょう。ただし、皆さんはまだ完全な抽象概念へと突き進みたくはないので、例えば「ヴュルテンベルクの人間存在（Die menschlichen Wesen Württembergs）」といった言い方はしたくないとします。それはまだ抽象的すぎるからです。人間はまだ、例えば「ヴュルテンベルクの人々（Die Menschen Württembergs）」といった、これほど強力な抽象概念にまで自らを高めてはいなかったのだ、と仮定してみましょう。

のちに「ヴュルテンベルクの人々」という表現によって引き出されることになるまさにその事柄を、いまだ「より具体的なもの」によって捕らえようとするならば、当時の人々はこう言ったでしょう。**「ヴュルテンベルクの市民と農民（Die Bürger und Bauern Württembergs）」**と。

人々は、農民でも市民でもないもの、あるいはその双方でありながらも、いわば「その中間に漂っているもの（地域住民全体）」を意図しながら、この表現を口にするのです。この「中間に漂っているもの」を捕らえるために、彼らはあえて二つの言葉を並べて用いるのです。

このことは、一つの概念を表現するために用いる二つの言葉（それによって人間は、いわばその概念に対して二つの異なる側面から接近することになるのですが）が、互いにさらに遠く離れた言葉であるときに、とりわけ興味深く、かつ明瞭になります。

例えば、「土地と人々（Land und Leute = 国と人々／風土と民衆）」と言うときがそうです。この言葉を口にするとき、本当に言いたい事柄はその「中間」に横たわっているのであり、人間は二つの言葉によってその中間にアプローチしているのです。

あるいは、「風と天気（Wind und Wetter = 天候／嵐）」という言葉もそうです。皆さんがこの言葉を口にするとき、皆さんは一つの言葉では表現できない何か、すなわち風でも天気でもない、まさにその「中間」

にあるものを意味しているのであり、あえて「風」と「天気」という二つの言葉を並べることで、その中間の事象を「挟み込んで」表現しているのです。

さて、興味深いことに、言語形成の過程において、このような二つの言葉の組み合わせは、「頭韻 (Alliteration)」を踏んだり、「母音韻 (Assonanz)」を響かせたりする形で表現されます。このことから、音の響きの感覚が、こうした事柄の内部に今なお深く作用していることがお分かりいただけるでしょう。

実際、生き生きとした言語感情を持っている人であれば、今日においてさえ、これと同じことを引き継いで行うことができます。すなわち、「類似した響きを持つ二つの言葉」を用いることで、さしあたり直接的な一本の単語を持ち合わせていないような、その「中間に浮かび上がる表象 (概念)」を挟み込んで捕らえることができるのです。

例えば、私が人間の「振る舞い」、つまり彼にとって習慣的であり、本質的に固有であるような何かを表現したいと仮定してみましょう。その際、人間を単なる「受動的な生き物」として提示するような一本の言葉を使うことに、私がためらいを覚えたとします。なぜなら、私は人間の本質的な自己表現や自己開示を、単なる受動的な生として提示したくはないし、かといって単に能動的な行為としてだけ提示したくもなく、むしろその活動を彼の「本質」から導き出したいと考えているからです。

このとき、私は「人間の魂は生きている (lebt)」とは言えません。それでは私にとって受動的すぎます。また、「人間の魂は織りなしている (webt)」とも言えません。それでは能動的すぎるのです。私はその「中間」にある何かを必要とします。そこで、私は今日でも次のように表現するのです。「魂は生き、そして織りなしている (Die Seele lebt und webt = 魂は息づいている)」と。

言語霊の内部からは、こうした例が数多く見出されます。例えば、歌 (Sang) でも響き (Klang) でもないその中間を表現したいとき、人々は「Sang und Klang (歌と響き = 鳴り物入りで／賑やかに)」と言います。

あるいは、中世の詩人 (吟遊詩人) が「旋律と歌詞 (」を披露していたという事実を表現したいとき、詩人たちが旋律と歌詞を携えていたことを表現するために、当時の人々はただ「彼らはあちこちを巡って歌っている」と言うだけでは不十分でした。そこで、「彼らは巡り歩いて“歌い、そして語っている (singen und sagen) ”」と言ったのです。彼らが実際にやっていた真の行為は、ひとつの単語では存在しないような、まさにその中間の概念だったのです。

こうした表現は、かつて「今日ではもう意味が透けて見えなくなってしまった音のつながり」を用いて行われていたプロセスの、いわば「忘れ形見」にすぎないのです。私たちは「Sang und Klang」や「singen und sagen」といった言葉を用いて、いわば今なお、かつて「音の構成」そのものを用いて行われていたのと同じ「融合」を執り行っているのです。太古の時代には、その音の構成の内部に、響きと表象要素 (あるいは感情要素) との間の生々しい結びつきがいまだ存在していたのです。

この方向性における極めて特徴的な例を皆さんの魂の前に提示するために、次の事実に注目してみましょう。

古代のゲルマン人たちが一箇所に集まり、裁判 (評議会) を開いた日、彼らはその日のことを「tagading (タガディング)」と呼びました。そこで彼らが行っていたこと (事象) が「ding (ディング = 現代語の物・事、かつては評議・公事の意)」でした。現代でも (泥棒の隠語などで) 「Ding drehen (一仕事仕掛ける)」という言い方が残っていますが、この「ding」とは、古代ゲルマン人たちが集まったときにそこで

行われていた「公の出来事（裁判）」のことだったのです。したがって、それを「tagading（裁判の日）」と呼びました。

ここで、接頭辞の「ver-（フェア）」を連れてきましょう。この接頭辞は、常に「何らかの事柄がプロセスの中へと入っていくこと」を指し示しています。したがって、この裁判の日（Tageding）において行われている事柄がプロセスの進行の中へと入っていくとき、当時の人々は「es wurde vertagedingt（フェルタゲディンクテ＝裁判にかけられた／決着へと向かわせた）」とすることができました。

そして、この「vertagedingen」という言葉が、時を経てゆつくりと、私たちの現在の「verteidigen（フェアタイディゲン＝弁護する／防衛する）」という言葉へと変化していったのです。若干の意味の変化を伴いながら、そこから私たちの「verteidigen」が生まれました。

このようにして、皆さんは「vertagedingen」という（古い時代の）音の構成の内部において、のちの時代に「（二つの）言葉の構成」を通じて執り行われることになるのと同じプロセスが、すでに完全に遂行されているのを目にすることができるのです。

ここから私たちは、表象の生活が、単なる音の生活からさらに一步「離れていく」プロセスへと次第に到達することになります。

例えば、古高ドイツ語の「alawari（アラヴァリ）」という言葉を取り上げてみましょう。これは本来、「完全に真実な（ganz wahr）」という意味を持っていました。ところが、ここから現代の私たちの「albern（アルベルン＝愚かな／ひょうきんな／他愛のない）」という言葉が生まれたのです。

本来は「完全に真実なこと」を意味していた言葉が、今日私たちが「albern」という言葉に感じているような意味へと変わっていくとき、人間が民族魂のいかに深い深層を覗き見ていることになるか、一度考えてみてください。

そこには、この「alawari（完全に真実であること）」という言葉の適用が、いわば次のような部族たちの手を経ていったという歴史が隠されているに違いありません。すなわち、「人間が『完全に真実である』という性質をもって現れることを、むしろ軽蔑すべき（愚直で要領の悪い）ことと見なし、利口な人間というものは決して『alawari（馬鹿正直）』ではないという信念に身を委ねていた部族たち」です。

これにより、感情の置き換えが起きました。「完全に真実な奴は、利口者ではない（ただの世間知らずだ）」という感情が、元々は全く異なる感情が適用されていた対象へと移し替えられたのです。こうして、「完全に真実な」という意味が、現代の「albern（愚かな／お調子者の）」へとズレていったのです。

私たちがこうした「意味の変化（意味転成）」を研究するならば、魂的なものと結びついた「言語霊」の内部を、深く覗き見ることができます。

例えば、私たちの「Quecksilber（クヴェックジルバー＝水銀）」という言葉を取り上げてみましょう。これは「動き回る（流動的な）金属」のことです。この「Queck」という部分は、例えば激しい生命力や運動性を意味する「Quecke（シバムギ＝生命力の強い雑草）」や、元気づけることを意味する「erquicken（元気づける／生き返らせる）」の中に含まれているのと同じ言葉です。

この「queck」や「quick（クイック）」——そしてわずかな音の変化（子音推移）を伴った「keck（ケック＝大胆な／生意気な）」——という音のつながりは、本来は「動きが活発であること（beweglich sein）」を意味していました。

したがって、もし500年前の私が皆さんのうちの誰かを指して「彼はkeckな人間だ」と言ったとしたなら、私は「彼は怠けておらず、よく働き、きびきびとあちこち動き回る活発な人間だ」ということを表現していたはずなのです。それが意味の変化によって、現代語の「keck（生意気な／怖いもの知らずの）」という言葉になりました。ここでも、言葉の「魂化（Verseelischung）」が、同時にきわめて意味深い意味変化への道筋となっているのです。

同様に、本来は「戦いにおける勇敢さ」を表現していた言葉も見出すことができます。私たちがほんの500年ほど過去にさかのぼるだけで、戦いにおける勇敢さを表す言葉は、なんと「frech（フレヒ＝現代語では、生意気な／無礼な）」という言葉だったのです。古い時代の意味における「frechな人間」とは、「勇敢な人間」、「戦いの場においてしかるべく立ち現れることを恐れない人間」を意味していました。ここに意味の変化があります。こうした意味の変化こそが、発展のプロセスにおける魂の生活を、真に深く覗き込ませてくれるのです。

もう一つ、古高ドイツ語の「diomuoti（ディオムオティ）」を取り上げてみましょう。「deo」「dio」は常に「Knecht（従事者／下僕／奴隷）」を意味し、「muoti」は現代語の「Mut（勇気）」と親縁関係にあります。かつては異なる意味を持っており、今日では「Gesinnung（心構え／精神のありよう）」、すなわち外界や他の人間に対して自らの心をどのようにチューニング（調律）しているか、という心の持ち方を意味していました。したがって、この「diomuoti」とは本来、「まっとうな下僕としての心構え」、つまり下僕がその主人に対して抱くべき心構え（忠誠心）を意味していたと言えます。

そこへ、キリスト教が浸入してきました。修道士たちは現地の民衆に対して、彼らが神や霊的な存在に対して抱くべき「心構え」を語ろうとしました。しかし彼らは、人々に語り伝えたいその（崇高な）事柄を、民衆がその下僕としての心構え（忠誠心）に対してすでに抱いていたあの生々しい感情（知覚）に「結びつける」ことによってしか、表現する手段を持ち合わせていませんでした。

こうして、この「diomuoti」という言葉が、時を経てゆつくりと、現代の「Demut（デームト＝謙虚／謙遜／従順）」という言葉へと変化していったのです。宗教における「謙虚（Demut）」とは、古代ゲルマン時代における「下僕としての忠誠心（Knechtsgesinnung）」の末裔（子孫）なのです。意味の変化というものは、このようにして執り行われます。

総じて、キリスト教の導入によって意味の変更を経験した言葉、より正確に言うなら「音と音節のつながり」の、その意味の変化を研究することは極めて興味深いことです。ローマの聖職者階級（司祭職）が北方の地域へとキリスト教をもたらしたとき、そこには様々な出来事が起こりました。言葉の意味の変化に目を向けるなら、本来の原始的な意味においてのみ外面的に認識できるような事柄が、数多く存在しています。

まだキリスト教が存在せず、しかし「支配するもの」と「仕えるもの」との関係性が明確に際立っていた古い時代において、主人が、自分が服従させ、隷属させた、あるいは征服した何らかの人間を指して「こいつは俺にとって役に立つ（重宝だ）」と言いたいとき、彼はこう言いました。「こいつは“fromm（フロム＝現代語では『敬虔な／信心深い』）”だ、これは“fromm”な奴だ」と。

今日の私たちは、この言葉をほんの最後の名残としてのみ保持しています。それは、本来の「役に立つ」という元の意味を、いわば少しいたずらっぽく思い出させるような表現、すなわち「zu Nutz und Frommen（～の利益と福祉のために／～の役に立つように）」という慣用句の中においてです。

この「zu Nutz und Frommen」と言うとき、そこでは確かに、本来の言葉の意味において同一であった「Nutzen（利益／役立ち）」という言葉と並べられてはいるものの、そこではもう、この「役に立つと見なすこと」へとお茶目に指し示されているにすぎません。「frommな下僕」とは、主人にとって「できる限り多く役に立つ下僕」のことだったのです。

ローマの司祭たちもまた、自分たちにとってある者はより多く役に立ち、ある者はそれほど役に立たないということを見出しました。そして、最も役に立つ者たちのことを、彼らは「fromm（従順で信心深い）」と呼んだのです。こうして「fromm」という言葉は、まさにローマからのキリスト教の移住（布教）を通じて、奇妙な道を辿って現代の意味へと至りました。「Demut（謙虚）」や「Frommsein（敬虔であること）」、その他多くの言葉の中に、皆さんはキリスト教が南部から北方へと運ばれていった際の、あの独特な衝動（インパルス）をすでに研究することができるのです。

言語を真に理解したいと願うなら、人間はやはり「魂的なもの」、すなわち「内的な体験」へと深く分け入らなければなりません。

言葉を形成する内部には、私が一方において「子音の要素」として特徴づけたもの、すなわち外界の動きを模倣・再現する要素と、もう一方において「感情の要素」、すなわち外的なものに寄り添いながら自らの感情を表現する間投詞的な要素とが、まぎれもなく存在しているのです。

言語を発達させる進んだ段階において、言語感情の中にある、明らかに「子音的な性質を持った本質」を取り上げてみましょう。皆さんが、私がここに描くような「曲線（へこみ、あるいは膨らみ）」の形態を感じ取っていると仮定してください。

根源的な人間がこの形態を感じ取ったとき、彼はそれを二通りの方法で感じ取りました。彼が「下から上へと見上げた」とき、彼はそれを「押し込まれたもの（凹み）」として感じました。これが徐々に、私たちの「Bogen（ボーゲン＝弓／アーチ／曲線）」という言葉の中に存在している音の構成へと変わっていったのです。

これに対して、彼がこの形態を「上から下へと見下ろした」とき——それは外面的な身振りとしては、私ができる限りこれを「上向きに曲げる（※黒板に図をドローイングする）」ことによって特に表現できますが——そこには、私が上から下へと眺めるものが生じます。すると、それは「Bausch（バウシュ＝膨らみ／束）」になるのです。

下から上に見れば「Bogen（弓型）」であり、上から下に見れば「Bausch（膨らみ）」です。「Bogen」と「Bausch」の中には、あの古代人の（視覚的・身体的な）感情がまだ息づいているのです。

そして、その双方を包括するような何か、すなわち、もはや（個々の）感情だけに寄り添うのではなく、プロセス全体のありようを表現するために外面へと走るような事柄を表現したいとき、人間はこう言います。「in Bausch und Bogen（イン・バウシュ・ウント・ボーゲン＝まるごと／込み込みで／一括して）」と。

「in Bausch und Bogen」を、イマジネーション（直観絵画）的に表現するなら、それは（黒板の図を指し示しながら）上からも下からも眺められた「これ」のことなのです。

このことは、私たちが誰かと商売（取引）の契約を結ぶような「道徳的・社会的な関係」に対しても適用することができます。そこから生じる結果というものは、内側からも外側からも眺めることができるからです。内側から見れば「利益（プラス）」をもたらす、外側から見ればその反対である「損失（マイナス）」をもたらします。

ある人と、利益も損失も含めた（一蓮托生の）取引を結ぶとき、人はこう言うことができました。「私たちはそれを『in Bausch und Bogen』で締めくくる（一括契約する）」と。そこでは、個々の名称（項目）によって細かく区別される事柄に対しては、もはや配慮はなされないのです。

私は以上の事柄を通じて、音の構成の発展、さらには語彙の構成の発展を追跡していくことによって、「民族魂的要素（民族霊の働き）の発展の絵（イメージ）」を手に入れることができる、という点を皆さんに明確にしたかったのです。

皆さんも、この「音の生活の持つ具象性」から「表象（思考）の生活の持つ抽象性」への前進というプロセスを「指針」として追跡していくならば、多くのことを皆さん自身で見出すことができるでしょう。普通の辞書（レキシコン）を開いてみたり、あるいは日常の話し言葉からいくつかの単語を拾い上げたりして、このような指針のもとでそれらを追跡してみるだけでよいのです。

私たちの教師陣（ヴァルドルフ学校の教師たち）に向けて、とりわけ付け加えておきます。授業の中で物語を語っているその最中に、時折こうした言語史的な契機（語源のドラマ）へと注意を向けさせることは、子供たちにとって「並外れて刺激的」なものとなります。なぜなら、それらは時に物事の深層を鮮やかに解き明かして（深い腑落ちをもたらして）くれますし、その上、子供たちの「思考力」を並外れて刺激してくれるからです。

ただし、その際には当然、間違った方向へと迷い込んでしまう可能性があることを、常に覚悟しておかなければなりません。ですから、常に極めて慎重である必要があります。今しがた皆さんがご覧になった通り、言葉というものは実に多様で複雑なメタモルフォーゼを経て現代に至っているからです。したがって、表面的な（音や文字の）表面的な類似性だけに飛びついて、すぐにいい加減な仮説（こじつけ）を立てたりするのはではなく、「徹底的に誠実（良心的）に」プロセスを進めなければなりません。

どれほど誠実に進めなければならないかということは、皆さんに最後にもう一つの例をお見せすればお分かりいただけるでしょう。

かつて、本来の、極めて実直な古いドイツ語として、Beiwacht（バイヴァハト＝加勢の見張り／共に夜警をすること）」という言葉がありました。人々が一緒に腰を下ろし、互いに見張り（Wachen）をしていた状態のことです。「Beiwacht」、すなわち「共に守り合う見張り」です。

この言葉は、他の多くの（フランスからドイツにきた）言葉とは異なり、なんと予期せずして一度「ドイツからフランスへと旅立った」言葉の一つなのです。それは、戦争（Krieg）を意味するフランス語の「guerre（ゲール）」が、元々はドイツ語の混迷・乱れを意味する「Wirren（ヴィレン）」に由来するのと同じような旅（伝播）でした。

この「Beiwacht」は、古い時代に一度フランスへと旅立ち、現地で「bivouac（ビブアック＝野営／露營）」という言葉になりました。そしてそれが、12世紀以降に西方からこちら（ドイツ）へとやって来たあの大量の「西欧語の移住（流入）」の波に乗って、再びドイツへと逆輸入されて戻ってきたのです。こうして戻ってきた言葉が、現代語の「Biwak（ビーヴァク＝野営／ビバーク）」という言葉なのです。

この言葉は元をたどれば生粋のドイツ語（Beiwacht）なのですが、一度フランスへと旅に出て、それから再び故郷へと帰ってきたわけです。その間の期間、ドイツ国内ではこの言葉はほとんど使われなくなっていました。

このように、言葉が一度外国へと移住したものの、異国の雰囲気の中で「居心地が苦しく（息苦しく）」なり、再び自らの故郷へと舞い戻ってくるという、そんな現象さえも現実にかかるのです。つまり、言語の歴史においては、ありとあらゆる事象（ドラマ）が執り行われているのです。

第五講

1920年1月2日、シュトゥットガルト

●基本的な視点

言語の発展は民族魂の像そのものである。

太古の人間は音を通じて
外界と内面を直接的に生き生きと表現していたが、
抽象化の過程で感情要素を下意識に沈め、
純粹思考の力を獲得した。

このプロセスを追うことで、私たちは
人間の魂的・精神的な発達の秘密に触れることができる。

●要点

1) 言葉の中に残る古い具象的イメージ

Eimer (バケツ)

← 古高ドイツ語 einbar (1つで運ぶもの=片手桶)

Zuber (手桶)

← zweibar (2つで運ぶもの=両手桶)

Messer (ナイフ)

← mezzisahs (食事用の剣)。

「sahs」は軍神Saxnot (剣の神) の「剣」を指し、
食事のナイフが「食事用の剣」であった。

Wimper (まつ毛)

← winthra bra (うねる眉=まばたきする毛)

Schulze (村長・姓)

← sculdheizo (罪を言い渡す者=Schuld-heißer)

これらの例は、現代では抽象化・融合した言葉の中に、
かつての生活動作・身体的イメージ・神話的つながりが
凝縮されていることを示している。

2) 接頭辞・接尾辞の魂的意味

-er (Gärtner, Wächter) ← 古高ドイツ語 -ari :

手を動かして活発に実践する姿 (Hantieren) 。

ur- / er- :

根源・最初のもたらすもの

(Urkunde, urbar machen, erkennen, Ertrag) 。

名詞と動詞で形は異なるが本質は同じ。

ge- (Geselle, Genosse) ← ゴート語 ga :

引き寄せて一つにまとめる・凝縮する力。

-lich (göttlich, ähnlich) ← leiks (姿・写し絵)。

「神の姿をしたもの」「ほとんどその姿を持ったもの」。

-tum (Königtum, Ungetüm) : tun (行う・秩序をもたらす)。

Ungetüm=調和した秩序 (getum) が生じていないもの。

-ig : eigen (固有の)。

feurig=火がそのものの自体に固有に備わっている。

これらの要素は、

かつて音楽的・身体的・感情的な響きを持っていたものが、
抽象的な文法記号へと硬化していった過程を示している。

3) 抽象化のプロセスと二語表現

言語は感情・感覚との生々しい結びつきを失うことで、
純粋な思考 (抽象化) を可能にする。

人間は音の生活から意識を引き上げ、
下意識に音を沈め、表象・概念を高める。

○二つの具象語を並べて「中間」の概念を挟み込む伝統：

Land und Leute (土地と人々)

Wind und Wetter (天候)

lebt und webt (生き、そして織りなしている=全人格的に息づく)

singen und sagen (歌い、かつ語る)

これらは、頭韻や母音韻を伴い、
抽象一語が生まれる前の魂の手法である。

4) 意味の変化 (魂のドラマ)

albern (愚か) ← alawari (完全に真実な)

→ 正直者が「要領の悪い馬鹿」と見なされる心理的逆転。

fromm (敬虔) ← 本来「役に立つ・有用」。

キリスト教の影響で「信心深い」へ。

keck (生意気) ← 本来「活発に動き回る・きびきびした」。

frech (無礼) ← 本来「戦いにおける勇敢」。

Demut (謙虚) ← diomuoti (下僕の忠誠心)。

キリスト教が「神に対する下僕の心構え」へ転用。

in Bausch und Bogen (一括して)：

同じ曲線を「下から見上げる (Bogen=弓)」か

「上から見下ろす (Bausch=膨らみ)」か、

という視覚的・身体的両面を包み込む。

特にキリスト教流入は、多くの言葉の意味を大きく変容させた。

5) 言葉の旅と教育への示唆

Biwak (野営) ← 古ドイツ語 Beiwacht (共に守る見張り)

→ フランスへ (bivouac) → 再びドイツへ逆輸入。

言葉は国境を越え、変容し、故郷に帰るドラマを繰り返す。

教師への助言：

授業で語源のドラマを適度に取り入れると、

子供の思考力を強く刺激し、深い腑落ちを生む。

ただし、表面的な類似に惑わされず、誠実に扱うこと。

●本文

さて、これまでに説明してきた事柄を踏まえ、またそれらの事実をさらに裏付けるためにも、本日は次のような指摘から始めたいと思います。すなわち、「言語学においてこそ、唯物論的な考察方法がもたらした帰結が最も悲惨な形で、しかしおそらく最も明白な形で現れている」ということです。

もちろん、この唯物論的考察方法が例えば「物理学」などにおいて、気づかれにくいぶん、さらに有害な働きをしていないとは言えません。しかし、言語学においてそれが最も悲惨な働きをしていると言える理由は、言語学においてこそ、そのようなアプローチを最も容易に回避できたはずだからであり、また「言語霊」の内部で精神（霊）や魂が本来どのように働いているかを、そこでならはっきりと目撃できたはずだからです。

ここで重要となるのは、私が今示唆したこの視点を持って、言語形成のより古い時代へと接近することです。そのためには、まず比較的「新しい時代」における言語変化を観察することを学ばなければなりません。新しい時代であれば、まだ全体を見通しやすく、言葉の変化とその変容の向こう側に、民族魂の「感受性」や「感情」の変化がはっきりと透けて見えるからです。

ドイツの民衆の言語において、いわゆる「ミンネザング（中世の宮廷愛の歌）」の時代、すなわち歴史的に「騎士の時代」と呼ばれる頃の言語は、すでに比較的遠い過去に属しています。しかし、それでも特定の事柄を文献として今なお容易に追跡することができ、多くの「意味の変化」について自らを啓発させることができる程度には、十分に近くに位置しています。

もっとも、この時代（ドイツの中世）にさかのぼっても、ホメロス（古代ギリシャの詩人）を読むときほど極端な違いを目撃できるわけではありません。ホメロスの作品のなかでは、現代の私たちにとっては単なる「悪口」にしか聞こえないような表現を、ギリシャの英雄たちが互いに浴びせ合っています。今日の私たちは、お互いに「山羊の胃袋」だの「ロバ（間抜け）」だのと呼び合うことなど到底耐えられません。

しかし、こうした表現は、かつてロバという動物が、英雄の呼び名として使われるほどに「高い名誉・評価」をいまだ受けていた時代があったことを指し示しています。ホメロスの叙事詩から明らかなように、当時の動物たちは、今日私たちが抱いているようなネガティブな「感情のニュアンス」をまとわされてはいなかったのです。

さて、私たちは、それほど遠くない過去の特徴的な例を探してみるだけでも、こうした事柄（感情世界の変化）をいくらか理解する高みへと自らを高めることができます。

例えば、中世（の文献）の中に次のような言い回しを見出すことができます。「彼らは敵の軍勢のなかにピッチ（瀝青）のようにへばりついてた」（Sie klebten wie ein Pech in ihrer Feinde Scharen）」

今日の私たちは、戦いの場で奮戦している戦士を指して「ピッチのようにへばりついてる」などと言うと奇妙に感じられますが、この「ピッチのようにへばりつく（粘り強く戦う）」という表現は、ミンネザング（中世の宮廷愛の歌）の時代には、完全に通用する立派な表現方法だったのです。

また、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ（中世ドイツの代表的な詩人）の作品のなかには、特徴的な言い回しが見出されます。これは、当時の人々が第一にいかに「直観的・感覚的な描写」を重視していたか、そして第二に、現代の私たちならそのプロセスや事物を軽蔑的に扱ってしまうような事柄に対して、当時はある種のポジティブな感情のニュアンスを抱いていたか、ということを示してくれます。

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハが、ある公爵夫人が男性の前に現れる場面を大真面目に描写する際、彼はこう語っています。「彼女の美しい姿はその男性の目の中に飛び込み、目を通して心臓へと突き刺さった。それはまるで、クリスマスローズの粉が鼻を突き抜けていくかのよう”であった」

これは極めて直観的です。なぜなら、クリスマスローズの匂いは、非常にありありと、いわば「強烈なおい」を伴って鼻を通り抜けていくからです。しかし、現代の私たちがこのような表現を使うことは到底ありません。

このことから、人間の「感情の世界」がいかに変化してきたかがお分かりいただけるでしょう。もし私たちが、唯物論的な言語学を行いたくないのであれば、まさにこうした「感情世界の変容」をこそ研究しなければならないのです。

ご存じの通り、もう少し近代（近世）の詩人に至ってようやく、気品ある女性を指して「彼女は*満月のように見つめていた」（Sie blickte wie ein Vollmond drein）」と表現することが許されていました。しかし、中世には完全に日常的であったこの言い回しも、今日の広い社会においては、もはや（面と向かって使うことは）許されないでしょう。

皆さんがもし、当時と同じような称賛の気持ちから、ある女性に向かって「あなたは満月のように私を見つめていますね」と言ったなら、それは現代の日常の共通語としては到底成り立ち得ません。しかし中世においては、民衆の心の中で「月の愛らしさ、月の慈愛」が圧倒的な優位を占めていたのです。そのため、当時の人々は、女性の眼差しや表情のなかに宿るまさにその愛すべき性質を、満月に例えていたのです。

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（もう一人の高名な宮廷詩人）は、その叙事詩『トリスタン』の中で、大真面目に「膠（にかわ）で接着された愛（geleimte Liebe）」について語っています。「膠で接着された愛」とは、一度は離れ離れになってしまったものの、再び結び合わされた愛のことです。また彼は、負傷兵たちが戦場に「へばりついて離れない」ことについても語っています。これらは現代なら（負傷した人間をモノのように扱っているとして）侮辱的に響くでしょう。

さらには、中世（の表現）において、ある人の気品ある足並み・佇まいを表現するために「あの人の“皇帝のような脚（die kaiserlichen Beine）”」と言ったり、あるいは（聖母マリアを称えて）「“皇帝の女中（kaiserliche Magd）”マリア」と言ったりする場合、これらは皆さんに、本質的な事柄として「感情世界のドラマティックな変化」をはっきりと示してくれているのです。

私がこれらの例を皆さんに挙げる理由は、こうした感情のニュアンスの変化が、普段はあまり気づかれなような領域において、いかに強力に作用しているかという点に皆さんの注意を向けさせたいからです。

例えば中世において、まだ「病んだ (krank) 葦」という表現が使われていました。「病んだ葦」とは何でしょうか。ここでの「krank」は、まっすぐ長く伸びた美しい葦を指す、単なる「飾り言葉 (美称)」にすぎません。

実際、私たちが「krank」という言葉を口にしていた時代、それがそもそも「schlank (細長い)」ということ以外に何も意味していなかった時代は、それほど遠い昔のことではないのです。当時の時代に誰かを「krank」と呼んだなら、それは「背が高く、スラリとした人だ」という意味でした。現代の意味のように「病気である」という意味では全くありませんでした。もし「病気である」と言いたいのであれば、当時は「süchtig (ズィヒティヒ = 現代語では依存症などの意、かつては病に侵されたの意)」、すなわち「病癖 (Sucht) に襲われている」と言わなければならなかったのです。

当時は、「病んでいること (krank)」が、そのまま「スマートであること (schlank)」と同じだったのです。

では、そこで一体何が起こったのか、考えてみてください。人間は次第に、「スラリと細長いことは、人間としてどこか不自然なことだ」という感情を抱くようになりました。「人間にとって正常な状態とは、少し太めであることだ」という感情を身につけたのです。この回り道を経て、かつてスマートさを表していた「krank」という音のつながりが、「süchtigsein (病気に罹っていること)」、すなわち「正常な組織をしていないこと」という意味へと結びつけられてしまったのです。

つまり、かつては全く別の感情のニュアンスに属していた言葉が、時代の変遷とともに、ある特定の (ネガティブな) 感情のニュアンスを担わされるようになったわけです。

また、ある宿屋の主人が「“みじめな (elend) ”ワイン」を売り込んで、大繁盛することができた時代も、それほど遠い昔のことではありません。宿屋の主人は村の中でこのように宣伝させることができたのです。「うちの店には、elend (みじめな) なワインがありますよ」と。

この「elend」は、現代の私たちが使っている「Elend (みじめさ)」という言葉と全く同じ単語です。皆さんがこの「elend」という言葉にかつて込められていた古い感情のニュアンスの名残を見出せるのは、今や「方言」の中に限られます。方言の領域では、国境の遙か外側にある特定の村々のことが、今なお「Elend (エレント)」、すなわち「エレントの村」と呼ばれています。

私の時代 (19世紀後半) にも、シュタイアーマルク (オーストリアの州) ではまだ、「あの男はエレント (elend) の出身だ」という言い方が残っており、それは「彼は国境の町の出身だ」ということを意味していました。そしていくつかの村々は、現在に至るまでその「Elend (エレント)」という名前をそのまま保持しています。

この名称は、単に「遙か外側の世界」から内側へと入り込んできたものにすぎません。なぜなら、当時「elender Wein (みじめなワイン)」と言ったとき、それは「外国産の (ausländisch) ワイン」を意味していたからです。そして「Elend」とは、本来「外国 (Ausland)」のことだったのです。したがって、その宿屋の主人は——少なくとも1914年 (第一次世界大戦) 以前であれば——例えばフランス産のワインを売り込む際に、「elende Weine (外国産のワイン)」と宣伝すれば、大いに商売繁盛したはずなのです。ここにも、先ほどの「krank」と同じような意味の変化が存在しています。

説教者のガイラー・フォン・カイザースベルク（15世紀の宗教家）は、奇妙なことに——彼の著作の中でこれを探してみるなら、その意味はより明瞭になりますが——「“小綺麗な（hübsch）”神」について語っています。今日の私たちは、神に対してこのような言い方はもう到底できません。

彼はこれによって、「慈愛深い（wohlwollend）神」のことを意味していたのです。当時の「hübsch（現代語では、可愛い）」という言葉の中には、今日の私たちが「慈愛深い／好意的な」という言葉の中に結びつけている、あの感情のニュアンスが宿っていたのです。

今日の私たちは、今なお時折、次のような言い回しを耳にすることがあります。こうした事柄は「名残（生きた化石）」として保存されているからです。「あいつは“鉋（かんな）”がかけられていない（ungehobelt = 粗野な／洗練されていない）”人間だ」

皆さんは、マルティン・ルター（宗教改革者）の聖書翻訳を読めば、この言葉の本当の意味を理解できるでしょう。ルターの記述のなかには、「人間は、預言者たちによって“鉋”をかけられる”（die Menschen durch die Propheten gehobelt werden）」という表現が登場します。

人間が預言者たちによって鉋をかけられる、すなわち、彼らは（神の言葉によって内面を）「しかるべく整えられる」というわけです。ここには、鉋をかける（Hobeln）という「物質的・感性的な直観」が、人間を「修繕し、教育する」ということと、いまだ（生々しく）結びついているのを見ることができるのです。

これらの例によって、私たちは少し過去へとさかのぼりました。しかし、さらにより身近な（年代の）ことにも目を向けてみましょう。

それほど遠くない過去の人物であるレッシング（18世紀ドイツの劇作家・批評家）は、あるとき次のような事柄を表現しようとしました。——これは、今日の私たちが彼の言葉遣いに出会うと、すでに誤解してしまいかねない事柄です。——それは、「私たちが正当な理由から共感を寄せるような事柄は数多く存在するが、それらは決して『美』の性質を持つものではないため、芸術の対象へと引き上げることはできない」という事柄です。

そして、彼はこの真理を次のように表現しました。「最も“anzüglich（アンツィュークリッヒ = 現代語では『嫌味な』）”***なものの多くは、芸術の対象とはなり得ない」

私たちが今日これを読むと、レッシングの言う「anzüglich」とは、まさに現代と同じ意味（嫌味な）で使われているのだと、直感的に思い込んでしまうでしょう。しかし、文脈をたどれば、私たちが現代語で「最も“anziehend（アンツィーエント = 魅力的な／引きつける）”なものの多くは、芸術の対象とはなり得ない」と言うときに意味する事柄と、彼の言わんとしたことが全く同じであるという結論に達します。

つまり、ここには感情のニュアンスの変化が存在しているのであり、皆さんが今日「最も魅力的（anziehend）」と表現するものを、レッシングの時代にはまだ「anzüglich」と表現していたのです。現代の私たちは、この言葉によって本質的に全く異なる事柄を表現しています。

ここで、このような意味の変化が、実際にはいかに複雑な方法で執り行われるかを追跡してみることは興味深いことです。

かつては「schlank（細長い）」を意味し、葦に対しても適用され得た、あの「krank」という言葉をもう一度思い浮かべてみてください。「krankな葦」とは細長い葦のことであり、したがって、短くて太い葦に比べれば、それほど役には立たない葦のことでした。

これが、人間の感情のニュアンスの中で次第に変容していき、ついに現代の「病気（krank）」という意味を受け取るに至ったのです。しかし、現代の段階に達すると、そこから（かつて保持されていたある種のニュアンスが）すでに再び「剥ぎ取られて」しまっています。

なぜなら、その中間の時代（18世紀後半）に生きた言語学者アーデルングは、例えば「“傷ついた（gekränkt）”船を修理しなければならない」と記述しているからです。今日の私たちが、例えば「“病んだ（gekränkt）”時計”などと言うと、どこか奇妙に響くか、少なくともその話し手が「冗談好き」であることを知っているかのように感じられますが、当時は、この間に意味が変化してしまった「krank」という言葉を、非有機的な物質に対して適用することは、完全に当たり前のことだったのです。

このことから、次のようなことがお分かりいただけるでしょう。「krank」という言葉は、元をたどれば本来は「形態」に関わる事柄を指していたのであり、現代のような意味は、のちになってからゆっくりと忍び込んできたものにすぎない、ということです。しかしその結果、かつてそこに存在していた本来の意味は完全に投げ捨てられ、全く新しい意味が与えられてしまいました。その一方で、アーデルングの言う「傷ついた（gekränkt）船」という表現の中にだけは、私たちは今なおその古い本来の意味を思い起こすことができるのです。

このように、言葉のなかに宿っていた「感情に合致するもの」に対する直接的な感知は、ますます剥ぎ取られていきました。

あのゲーテにおいてさえ——しかも彼の場合は、多くの関係において、言語霊の生き生きとした働きへとあえて立ち戻ろうとしたがゆえに——今日の私たちがもはや明確に感じ取ることができなくなってしまった言葉の数々に対して、いまだきわめて生々しい感覚を保持していたのを見出すことができます。

例えば「“bitter（ビター＝苦い）”」という言葉を取り上げてみましょう。現代の私たちにとって、この言葉は純粹に主観的な体験、すなわち「味覚の体験」を表す名称になってしまっています。そのため、古い時代にはきわめて直観的（具体的）であり、この「bitter」という言葉の語源となったあの行為、すなわち「beißen（バイセン＝噛みつく）」ということとのつながりを、今日の私たちは自分の感情（知覚）の中で通常もう結びつけることができません。しかし、この言葉は本来「beißen（噛む）」と結びついているのです。すなわち、苦く（bitter）感じられるものとは、本来「私たちに噛みついて（beißen）いる」ものなのです。ゲーテは今なおそのことを（身体的に）感じ取っていたがゆえに、運命の女神パルカの「bitterな（苦い）ハサミ」について語っています。それは、パルカの「噛みつく（beißen）ハサミ」のことなのです！

現代の人々はすでにすっかり「抽象化の奴隷」になってしまっているため、このような言葉（ゲーテの詩的な表現）に出会うと、すぐに「詩人の自由なレトリック」などと言って片付けてしまいます。しかし、それは決して詩的許容などではなく、まさに「十全な内面的な体験」から直接的に湧き出てきたものなのです。

さらに言うなら、ゲーテが生きていた時代は、現代のように、世の中で創作される詩の99パーセントが余計なものである（中身のない言葉遊びである）という時代ではまだありませんでした。彼は言語に対して——このことは彼の多くの作品に接する際に常に念頭に置いておかなければならないことですが——現代のい

かなる人間が外面的な教育の内部にただ佇んでいるときに感じ取りうるよりも、はるかにより内面的に、より生き生きと言語を感じ取っていたのです。

このことは、皆さんがゲーテの文章の中に次のような言葉を見出すとき、再びありありと感じ取ることができます。「あるキリスト受難の肖像画（エッセ・ホモ）が、その“erbärmlich（エアベルムリッヒ＝現代語では『惨めな／お粗末な』）”な描写のゆえに、私の気に入った」

今日、これほど平気でこのような語り方をする人がいたとしたら、それを「下手くそな描写」という意味以外に受け取る人は誰もいないでしょう。しかし、ゲーテがここで暗示しようとしているのは、「その描写が、私たちの心の最深部から湧き上がる『深い慈悲（Erbarmen＝憐れみ、同情）』を呼び起こした」ということです。

したがって、私たちが現代の完全に抽象的な言葉でこれを言うとするなら、「あるエッセ・ホモが、その『慈悲の心と呼び起こすような』描写のゆえに、私の気に入った」と言わなければなりません。しかし、ゲーテは今なお（語源のみずみずしい感覚から）このように語ったのです。「あるエッセ・ホモが、その“erbärmlich（深い慈悲を湛えた）”な描写のゆえに、私の気に入った」と。

比較的それほど遠くない過去（18世紀）においてさえ、街を歩きながら子供たちや貧しい人々に気さくに声をかけて話し、決して傲慢ではなく、威張ったりもしないような人物に対して、称賛の気持ちを込めて次のように言うことができました。「あなたは本当に“niederträchtig（ニーダートレッヒティヒ＝現代語では『卑劣な』）”な人ですね」と。

18世紀の半ばまでは、このような言い方が可能だったのです。当時の時代において「niederträchtigな人間」とは、「気さくで親しみやすい（leutselig）人間」のことであり、人々はある種の観点から、その人に対して最大級の賛辞を贈っていたのです。

また、18世紀の文献の中に「“ungefährlich（ウンゲフェールリヒ＝現代語では『安全な／危険のない』）”な数字」という記述があったとき、今日どれほどの人がその本来の徹底的な意味を結びつけて理解できるか、私は甚だ疑問に思います。現代の私たちがこれを言うなら、ただ「およそ（ungefähr）正しいことを示している数字」、すなわち「概数」と言うでしょう。当時の人々は、その概数のことを「ungefährlichな数字」と呼んでいたのです。

さらに、現代のほとんどの人々は、18世紀にはまだ日常茶飯事（一般的）であった「“unartig（ウンアルティヒ＝現代語では『お行儀の悪い』）”なプラム」という表現に出会ったとき、一体何を思い浮かべるでしょうか。「unartigなプラム」とは、その品種（Art）が持つ完全に典型的な特徴を示しておらず、どこか一風変わっていて、「その品種（Art）の枠から外れて（un-）育ったプラム」のことなのです。それが「unartigなプラム」です。

このような（意味の変化が実際に起こっているのだという感覚を自分の中に身につけて初めて、私たちは、その変化の跡を表面にそれほど分かりやすく掲げてはいない他の言葉についても、深く理解できるようになります。

例えば、現代の私たちが使っている「“schwierig（シュヴィーリーヒ＝現代語では『難しい／困難な』）””という言葉を取り上げてみましょう。皆さんは、今日この言葉がどのような感情のニュアンス（困難であるという頭性的な概念）で使われているかを知っています。しかし、かつてこの言葉が使われていたときには、

本来「“Schwären (シュヴェーレン＝腫み腫れ、おでき、潰瘍)”に満ちている、Geschwüre (おでき)だらけである」ということを言おうとしている意識が、はっきりと伴っていました。

つまり、ある事柄を「schwierig (難しい)」と感じたとき、古代人はそれによって次のような生々しい身体的感情を表現しようとしていたのです。「この作業を行うと、“体中におでき (Schwären) ができてしまう”」と。

これほどまでに直観的かつ生き生きと事象が表現されており、これこそが「schwierig」という表現と深く結びついているのです。

現代の感情のニュアンスからは完全に脱落してしまっており、言語変化の事実を知ることもなく、ただペダンチックに言語を判断し語源を導き出そうとすることが、いかに間違っているかを証明してくれるこのような事例は、「方言 (Mundart)」のなにも見出すことができます。

誰かに何コースもある (たくさんの皿が出てくる) 豪華な昼食を振る舞うとき、現代の私たちはその人に対してこう言うことができます。「他の料理もありますから、あまりこの料理を食べすぎないで、次の料理のために食欲を残しておいてくださいね。どうぞ食べすぎないでください、この後にもまだ別の美味しいものが控えていますから」と。

ところが、ドイツ語圏の特定の地域 (方言) では、今なお次のように言うことができるのです。「この料理を食べすぎるなよ、まだ“後ろ (背中) に積み上がって (hintenauf)”来るからな」

また、別の方言の地域では、次のように言うことが可能です。「ああ、あの子たちは本当に良い、可愛い子供たちだ、よく“自分を屠殺している (sie schlachten sich)”」

これは「あの子たちは (親の) 血統から外れておらず、気立てが良い (gutartig)」、すなわち「親の性質 (Art / 血筋) をそのまま綺麗に引き継いでいる (sie schlachten sich)」という意味なのです。

まさに「あの子たちは良い子だ、よく“屠殺している (親の血筋を体現している)”」というようなアプローチの例こそが、言語感情の内部における、「内なる感情」と「外的な直観 (具体的な事象)」との間の、あの生き生きとした不可分の結びつきを、私たちの前に鮮やかに指し示してくれているのです。

このことは時に、きわめて重要な事象として私たちの前に立ち現れます。

ゲーテが晩年、自らの『ファウスト』の創作プロセスを特徴づけるために用いた、ある対話の一節があります。この一節は、歴代の『ファウスト』注釈家たちの間で並外れて大きな議論的となってきました。ゲーテは本当に高齢の老人になってから、自らのファウストの仕事を振り返って次のように語ったのです。「60年以上にわたり、『ファウスト』の構想が私の内部で、若々しく“von vorne herein (フォン・フォルネ・ヘライン = 現代語では『最初から／端から』)”ははっきりと存在しており、全体の順序が細部までは展開されないまま目の前に置かれていたということは、やはり大したことだ」と。

多くの『ファウスト』注釈家たちはこの言葉から、「ゲーテは若い頃すでに、完璧な『ファウスト』の全体計画を持っており、彼には最初からファウストの全貌がはっきりと見えていて、後年の創作活動はそれを単に形にしたにすぎないのだ」という結論を導き出しました。そして、彼の『ファウスト』の仕事の本質に関して、この一節の解釈から、数多くの余計な誤解や不真実が生まれることになってしまったのです。

しかし、この一節は、フレゼニウス（ゲーテ研究者）が「ゲーテにおける『von vorne herein』という音節のつながりが、本来どのような意味を持っていたか」を公表して初めて、正しく理解できるようになりました。私自身、フレゼニウスと共に仕事をしていたため、この事実にはとりわけ深い親近感を持っています。彼は何かを発見しても、それを何十年も自分の手元に置いたまま発表しようとしなかった男でした。ですから私は彼に、「あなたがそこで言おうとしていることは極めて重要だから、早くそれを出版しなさい」と急かしたのです。

ゲーテが「von vorne herein」という言葉を使っている箇所をすべて集めてみるなら、「彼はこの言葉を、例外なく常に『空間的（räumlich）』な意味においてしか使っていない」ということが分かります。例えば、彼がある本を「von vorne herein」読んだと言うとき、それは「その本の“最初の（手前の）数ページだけ”を読んだ」という意味にほかなりません。

したがって、彼が若き日に明確に構想していたのは、実は『ファウスト』の「最初の数シーン（初稿ファウストの部分）」にすぎなかった、ということが明快に証明できるのです。つまり、ここでは単純に「正しい言葉遣いの理解」が、ゲーテの実際の仕事のありようを明確に指し示してくれているわけです。

そして、まさにこの言葉の使われ方を見れば、現代の私たちにとっては完全に「抽象的」になってしまった概念が、彼の内部ではいまだ「空間的な直観」として捉えられていたことがお分かりいただけるでしょう。彼は「von vorne herein」という表現を、常にありありとした、空間的な意味で使っていたのです。

事実、ゲーテという存在をこれほどまでに魅力的なものにしている秘密の大部分は、彼がこのように「言語を言語霊の持つ諸特性」へと、自ら立ち戻ることができたという点にあります。そして、——現代の（文献学の）研究者たちがそれを単に唯物論的にしか行えないのに対して——私たちがゲーテの「言語」を出発点としてゲーテの「魂」の最深部へと突き進もうとするならば、そこには「言語学を脱・唯物論化するための重要な手がかり（足がかり）」を見出すことができるのです。こうした事柄については、しかるべき（精神科学的な）助言を仰ぐのがよいでしょう。

現代の私たちは、感情のニュアンスと音の構成との間のあの「根源的な一体感」を表現してくれる言語的つながりを、多くの言葉においても失ってしまっています。しかし、方言はそれをいまだ時に保持していますし、直観的なものが言葉を通じて表現されるあのダイナミズムも、方言の中にはまだ残されています。

例えば、書き言葉（標準語）ではすでにそれほど目立たなくなっていますが、方言のあちこちでは今なお、「unter den arm greifen（脇の下を支える＝現代語では『援助する／手を貸す』）」という表現がよく使われます。これは単純に「途方に暮れている人、困っている人を助ける」という意味です。

なぜ（脇の下を支えると言うの）でしょうか。それは、かつて若い人々が、もうそれほどきびきびと（足元を確かに）歩くことができなくなったお年寄りに対して手を差し伸べ、彼らの「脇の下に手を差し入れて（unter den Arm greifen）、その身体を支えて歩いた」からです。このきわめて具体的な行為そのものが、のちに「援助をすること一般」という意味へと移し替えられたのです。

それはちょうど、朝起きて「目から夜の睡眠（目やに）を拭き取る」と言った（農民の）例と全く同様に、古代人は「助ける」という行為を表現するために、ある一つの具体的なプロセスを選び出し、それによって抽象的な概念をありありと表現したのです。

しかし、のちの時代になると、言語霊は時として、その「直観的な具体性」にそのまましがみつきのことができなくなりました。その結果、言語霊はある時にはその直観性を保持しつつも、別の時にはそれを投げ捨ててしまうということを行いました。

例えば、皆さんは今なお、ある種の特別な聞き方を指して「lauschen（ラウシェン＝耳を澄ます／聴き入る／密かに聴く）」という言葉を使っています。これに対し、オーストリアの方言には、単に「聴く・耳を傾ける（hören）」ということ自体を表す、この「lauschen」と本来同源である言葉が残っています。それが「losen（ローゼン）」です。オーストリアでは、誰かに話を聞いてほしいとき、単に「聴いてくれ（hör einmal）」と言うだけでなく、「los amol!（ロス・アモール＝ちょっとお聞き!）」と言います。

この「losen」とは、いわば「lauschen（耳を澄ます）」の持つ活発なエネルギーを少し弱めたものです。この「losen」という響きの内部には、密かに隠れて聞き耳を立てる（verborgenes Zuhören）際に行われる、あの「忍び足でこっそり近づく（das Schleichende）ような身振り」が今なお生々しく感じられます。そのため、ある意味では、この「losen」という言葉はすでに「許されていない盗み聞き」という意味へと移り変わっています。例えば、誰かがドアの鍵穴（Schlüsselloch）から何かを盗み聞きしたり、二人が自分に聞かせるためではない話（秘密の会話）をしているのを盗み聞きしたりするとき、人々は「彼は“gelost（盗み聞きした）”」と言うのです。

このような音の構成が持つ「感情に合致した側面」への感覚を身につけて初めて、私たちは、根源的な音である「母音」や「子音」そのものに対する感覚を徐々に発展させていくことができるようになります。

例えば、オーストリアの方言に「Ahn!（アーナル＝おばあちゃん）」という言葉があります。これは祖母（Ahn!）のことです。皆さんもよくご存じでしょう。「Ahnfrau（始祖の女性）」という言葉としてはもう少し一般的です。この「Ahn!」という言葉では、祖先（Ahn）に「-l（エル）」の音が結びついています。単に「Ahn」に「l」が付け加えられているのです。

ここで言語的に本来何が起こっているのかを理解するためには、この「l」という子音を（心と身体で）感じ取るレベルへと、言語的に自らを高めなければなりません。皆さんは、私が以前（第四講で）「leiks（姿）」から生まれたと説明した、あの接尾辞「-lich」を感じるときに、この「l」の音を感じているはずです。

この「l」の音は、「何かが周囲を動き回っている、あるいはうねり動いている（sich herumbewegt）」という感覚と深く関わっています。発声の身振りにおいて、人間はその「周囲を動き回るもの」を模倣しなければならないのです。

したがって「Ahn!（おばあちゃん）」とは、一人の年老いた女性として眺められながらも、同時に「きびきびと活発に動き回るお年寄り」という印象を与える人物のことなのです。人は彼女の顔のあちこちを見回して（herumschauen）、初めてその優しいたくさんの「シワ」を目にすることになります。このように、いかに特徴的な形で「l」の音が適用されているかがお分かりいただけるでしょう。

また、「schwinden（シュヴィンデン＝消え去る）」という言葉を取り上げてみましょう。「Schwinden」とは、向こうへ去っていき、もはや目に見えなくなることです。目に見えなくなるように、何かを消し去ることです。

では、完全に目に見えなくなるように消し去るのではなく、次のように表現したいとしたらどうでしょうか。「向こうへ去らせる（消し去る）際に、少しだけ足元をグラグラと、あちこち『誤魔化す』ような動き

をさせたい。完全に消え去るわけではなく、そこにまた留まるような、つまり本当の、現実の消滅（schwinden）ではないような状態を形づくりたい」

そのとき、私は「周囲をぐるぐると回り動く感覚（Sich-Herumbewegen）」——すなわちここで「l」の音——を感じ取ります。すると、そこから「schwindeln（シュヴィンデルン＝目が回る／目眩がする／嘘をつく・誤魔化す）」という言葉が生まれるのです。

これが「l」の音の仕業です。皆さんが「schwinden（消え去る）」から「schwindeln（目が回る／誤魔化す）」へと移行するとき、この「l」という音がいかに見事な「身振りの重み」を持っているかを、正確に感じ取ることができるはずです。

皆さんがこうした事柄へと深く分け入るなら、「オイリュトミー（Eurythmie）」というものが、いかに当たり前の必然的な存在であるかを感じるようになるでしょう。

オイリュトミーにおいては、言葉の音の構成の中に本来含まれている「人間と世界の根源的な親縁関係」へと立ち戻っているのだ、ということが感じられるはずです。それは、言葉の音（音声）を取り払い、純粋に「身体の動き」だけを通じて、その本質を表現しようとする試みなのです。

皆さんがこのようなことを感じ取るなら、例えば「U（ウー）」という母音のなかに、「ぴったりと身を寄せ合うこと、互いに優しく包み込み合って閉じ合わさること（Zusammenschmiegenes, Zusammenschließendes）」という性質が含まれていることも、正確に感知できるようになるでしょう。

オイリュトミーにおける「U」の身振り（両腕を平行に前に出し、自らを優しく包み守るような動作）を見てごらん下さい。そこにはまさに、この「身を寄せ合い、包み込み合う性質」がはっきりと現れています。そうなれば、皆さんはこう言うはずです。「私たちが通常、最も身を寄せ合い、一体となる存在である『Mutter（ムッター＝母親）』という言葉の第一の音のなかに、『A』や『E』の母音が来ることなど、到底あり得ない」と。

お母さんのことを「Metter（メッター）」や「Matter（マッター）」などと呼ぶことなど、人間の感性（言語感情）からして到底考えられないのです。（ラテン語系の）「Mater（マーテル）」という響きは、この根源的な感覚が「すでに弱められてしまった」言語のなかにそれが現れていることを証明しているにすぎません。本来、それは「Mutter（Uの響きを湛えたお母さん）」と呼ばれなければならなかったのです。

私はこれらすべての事柄を通じて、皆さんに「言語霊」が辿った道筋を示してきました。以前にも申し上げた通り、言語霊は「音の構成」と「表象（思考）」との間に一つの深い裂け目を創り出しました。

本来、この二つは人間の主観的な体験の内部において緊密に結びついていたのですが、それが分離したのです。音の構成は「下意識」の領域へと沈んでいき、表象の構成は「意識」の領域へと登っていきました。そして、かつて人間が外側の現実の事実とダイレクトに共生していた頃に感じ取られていた多くの事柄が、この分離に伴って削ぎ落とされ、投げ捨てられていったのです。

言語の発展の歴史をさかのぼるなら、私たちは一つの極めて奇妙な事実に出くわします。言語発展の根源的な形態は、私たちを完全に「現実の事実そのもの」へと連れ戻してくれる、ということです。言語形成の原始的な段階においては、極めて繊細な「事実感覚」や「現実感覚」が存在していました。その段階に生きていた古代の人々は、事物の内部に存在し、そこで起こっている事象と、内面的に深く共生していたのです。

しかし、この内的な共生が終わりを迎えた瞬間に、現実感覚はいわば霧の中に包まれて見えなくなり、人々は「頭の中の抽象概念」のなかに生きるようになり、それが言語のなかに表現されることになります。

本来の根源的なインド・ゲルマン語（印欧祖語）においては、ラテン語がそうであるように、そして現代の私たちドイツ語にも今なお3つの「性」が残されているように、「3つの文法的な性（Geschlechter）」が存在していました。人間はそれらを、全く異なる質感を持ったものとして（肌で）感じ取っていました。「男性名詞（der）」、「女性名詞（die）」、「中性名詞（das）」です。

これに対して、現代のフランス語にはすでに2つの性しか残されておらず、英語にいたっては、たった1つの性しかありません。このことは、英語という言語が、言語の歩みとして、あの「事物の持つ生々しい質感」を、いわば壮大なスケールで削ぎ落としてしまった言語であるということを証明しています。英語はもはや、事物の「上」に浮かんでいるだけであり、事実の「内部」に深く生きてはいないのです。

言葉に対してこのような「性」が形づくられた人類の発達段階においては、そこにはまだ、ある種の「本源的・本能的な霊視力」が息づいていました。当時の人間は、事物の内部に息づいている生々しい「精神（霊）や魂」をいまだリアルに感知していたのです。

したがって、インド・ゲルマン諸語のより古い言語形態において、太陽（Sonne）と月（Mond）の中に息づくあの本源的な霊的実在を、まるで「兄と妹（あるいは姉と弟）」のようにリアルに感知していなかったならば、——のちの時代になって（※ラテン語圏などの影響で）『女性名詞のSonne』と『男性名詞のMond』へとひっくり返されてしまいました。元々は——『男性名詞のSonne（お兄さんとしての太陽）』と『女性名詞のMond（妹としての月）』という言葉が生まれることなど、到底あり得なかったのです。

太古の時代において、人間は「太陽は兄であり、月は妹である」と感じ取っていました（現代はそれが逆転してしまっている時代です）。また、彼らは「昼（Tag）」を巨人のノルヴィの息子であり、「夜（Nacht）」をその娘であると感じ取っていました。これらは完全に、原始的な霊視的直観に基づいていたのです。

当時の人間は、地球（Erde）のことも、現代の地質学者たちが感じているような形では感じていませんでした。現代の地質学者たちなら、当然ながら地球に対して「中性名詞」を使うあらゆる理由を持っています。彼らの感覚からすれば、本来「das Erde（事物としての地球）」と言わなければならないはずなのです。

現代の人間は、地球が実際にはいかに「ガイア（Gäa = 大地の女神）」であり、その女性的な大地に対して、天空の「ウラノス（Uranos）」が男性的な存在として対峙しているか、ということをもはや（身体的に）感じ取ることができません。しかし、ゲルマン語が本来の言語形成の威力をもって登場したあの地域においては、このことが今なお生々しく感じ取られていたのです。

——そうでない場合でも、少なくとも、外側の世界との共生から自然に湧き起こってくる「感情のニュアンス」が、その言葉にどの性を与えるか、どのような性のキャラクターを刻印するかという直接のきっかけになっていました。

例えば、古代人は象（Elefant）を「強いもの」として感じ、ネズミ（Maus）を「弱いもの」として感じました。そして、男を強いもの、女を弱いものとして感じていたがゆえに、その感情の類似性から、象には「男性名詞（der Elefant）」が与えられ、ネズミには「女性名詞（die Maus）」が与えられたのです。

森の木々 (Bäume) がその大部分において「女性名詞」である理由は、木というものが、根源的な人間の感性にとって、女性の神々 (精霊たち) が宿る「家」であり「玉座」であったからにほかなりません。

そして、男性名詞と女性名詞のほかに、この「中性名詞 (sächliches Geschlecht = 事物の性)」が存在しているという事実は、本来、途方もなく重大な意味を持っています。なぜなら、それが「言語霊」の内部にある、きわめて深い秘密を指し示しているからです。

私たちはドイツ語でこう言います。「der Mann (その男=男性)」、「die Frau (その女=女性)」、そして「das Kind (その子供=中性)」と。

子供 (Kind) に対して中性名詞が使われる理由は、子供が、その性別がいまだはっきりと現れておらず、まだ自らの最終的な形に到達していない「今まさに生成・発展しつつある途上のもの (erst wird)」だからです。

かつて言語のなかにこの中性名詞 (das) がもたらされたとき、それは言語霊のなかにあった次のような心のチューニングから湧き出てきたものでした。すなわち、「人間が『中性』として名付けるすべてのものは、まだ完成された存在ではなく、今まさにこれから何者かへと生成していく途上のものなのだ」という深い直観です。

「金 (Gold)」という金属も、将来いつの日かそれ自体に固有のものとなるはずのキャラクターを、現在の地球上においてはまだ完全には現していません。金は宇宙の歴史のなかでは「いまだ若い存在」であり、自分が本来そうなるように運命づけられている真の姿へと、これからようやく生成していく存在なのです。それゆえ、古代人は金に対して「der Gold」とも「die Gold」とも言わず、「das Gold (中性名詞としての金)」と呼んだのです。

ここでもまた、このような文法的な性のキャラクターを生み出した根源的な直観が失われていくとき、事態がどのように変化するかを研究することができます。

現代の私たちは「die Mitgift (ミトギフト=持参金/嫁入り道具)」と言いますが、この言葉は、それがかつての古い言葉である「die Gift (女性名詞としてのギフト = 贈り物/与えること)」と深く結びついていることを明快に証明しています (現実にもその通りです)。

また、今日の私たちは「der Abscheu (アブショイ=強い嫌悪)」と言いますが、これもやはり、この言葉がかつて「der Scheu (男性名詞としてのショイ = 羞恥)」という言葉へとさかのぼることを明快に証明しています。

「der Scheu (恐れ)」や「die Gift (贈り物)」といったこれらの言葉は、歴史のなかでその「感情のニュアンス」を完全に変化させてしまいました。

かつて「die Gift (女性名詞)」と言われていたとき、それはただ単純に「(誰かに対して何かを) 大らかに手渡すこと、与えること (Geben)」という、中立的で純粋な行為を意味していました。ところが、特定の人間たちが他人に手渡した「贈り物」のなかで、とりわけ (ゲーテの) 『ファウスト』の描写にあるように、多くの人々に対して致命的な害を及ぼすような「不名誉で忌まわしい贈り物」、すなわち「毒」に対して、この変化した意味が集中的に適用されるようになってしまいました。その結果、人々は「与えること」という本来の崇高な性のキャラクターとのつながりを見失ってしまい、現代語の「das Gift (中性名詞としての毒)」という全く別の言葉へと硬化してしまったのです。

同じように、かつて人間が「scheu（内気な／恐れる）」と呼ばれる状態に対して抱いていた、あの本来の強力な感情、すなわち「自らの内側にギュッと凝縮して固まっている（外に惑わされない）強い佇まい」という感覚が弱まってしまったとき、その言葉はただの臆病さを表す現代の「die Scheu（女性名詞としての羞恥／恐怖）」へと、その性の重みを変えてしまったのです。

言語がいかにして抽象的なものとなり、外側の現実世界との密接な「織り合わされ（一体化）」からいかに自らを脱皮させていったか——そのプロセスは、インド・ゲルマン諸語（印欧祖語）、すなわち古代の言語が、かつて「8つの格（Fälle）」を持っていたという事実の中に、最も見事に見出せるでしょう。

すなわち、主格（第1格）、属格（第2格）、与格（第3格）、対格（第4格）のほかに、呼格（Vokativ）、奪格（Ablativ）、地格（Lokativ）、具格（Instrumentalis）が存在していたのです。

これは、現代の人間が第1格から第4格までの文法関係を通じて感じ取っているような、ある事物が置かれている（静的な）位置関係を表現していただけではありません。古代人は、それ以外の多種多様な世界との結びつきを、自らの「感情（知覚）」を通じてどこまでも追跡することができていたのです。

例えば、特定の時間に何らかの事柄を行う場合を考えてみましょう。現代の私たちは、それを「この日（dieses Tages = 2格 / もしくは diesen Tag = 4格）」に行う、といった形で表現することができます。私たちは属格（2格）や対格（4格）を頭で使いこなしています。

しかし現代の私たちは、その行為に対して、「その日そのもの、その時間帯、まさにその特定の特定の一日が、自らに『力』を貸してくれているのだ」というあの生々しい感覚を、もうそこに感じることはありません。

例えば、皆さんが「1920年1月2日（※この講義の日）」に行う事柄は、のちの時代になってからはもう二度と行うことはできない（その日固有の宇宙的な力が働いている）ということ、すなわち、「『時間』とは自らを背後から助けてくれる生命力（Helfendes）であり、時間は自分を助けてくれる何らかの生々しい営みの中に宿っているのだ」ということを、現代人はもう感じ取ることができないのです。

古代の人間は、このことをありありと感じ取っていました。それゆえ彼らは、具格（道具・手段を表す格）を用いて、「hiu tagu（ヒウ・タグ）」と表現したのです。これを現代語で無理に訳すなら、「この日によって（durch diesen Tag）」「この日を媒介として（vermitteltst dieses Tages）」と言わなければなりません。

そして、この「hiu tagu（この日によって）」という生々しい具格の響きが、のちに縮まって、現代の私たちの「heute（ホイテ＝今日）」という言葉になったのです。「今日（heute）」というありふれた単語の奥には、実は古代の「具格（道具の格）」のエネルギーがそのまま隠されているのです。

これと全く同様に、「hiu jaru（この年によって）」という具格の表現が、南ドイツやオーストリアの方言で今なお「今年」を意味する「heuer（ホイアー）」という言葉になりました。

しかし、言語は時代の変遷とともに、これら（呼格・奪格・地格・具格という）別の4つの格をゆっくりと削ぎ落としていき、最終的に（現代ドイツ語のように）4つの格だけを自らの手元に残したのです。

この事実からも、言語が持つ「抽象化の能力」がいかに先へと前進してきたか、ということがお分かりいただけるでしょう。私たちがこれらの具体例を目の前に思い浮かべるなら、かつて言語の中に（生々しく）

表現されていた「古い現実感覚（物質的・超感覚的なリアリティへの知覚）」の中から、いかにして現代の「抽象的な思考能力」、そしてそれに伴うある種の「頭の中だけの記号処理」が、ゆっくりと形づくられて脱皮してきたか、という歴史を明快に目撃することができるのです。

第六講

1920年1月3日、シュトゥットガルト

●基本的な視点

言語は思考と意志の結節点であり、
民族魂・人間魂の歴史そのものである。

言語学を唯物論から解放し、
魂の科学・精神の科学（人智学）へと高めることが急務。

教師は言語を通じて
子供たちに「生き生きとした世界」を取り戻し、
自分自身も再び「言語霊」と固く結びつかねばならない。

●要約

1) 言語形成の根本法則：母音と子音

○母音（Vokalisch）：

内面的な感情・意志の直接的な表出。
人間が外界に対して抱いた魂の響き（驚き、愛、守護など）が
喉頭を通じて溢れ出たもの。

○子音（Konsonantisch）：

外界の事象・動きを
身体の「身振り」で模倣・再現したもの。
発声器官は目に見えない「空気の有機体」を用いて外の世界を描く。

言語とは「身振りが音になったもの」
。原始時代は子音中心（外界模倣）、次に母音中心（内面化）、
現代は再び子音的硬化（抽象化）へと向かう三段階のプロセス。

2) 言語発展の三大ステップ

〔1〕原始段階：

外界と完全に一体化。
主に子音が豊かで、行為（動詞）と人称（主体）を
後ろから力強く結合（例：salbo-m「油を注ぐ＋私」）。
サンスクリット語の人称語尾（-mi, -si...）が
そのままドイツ語の古い語尾に変容。

〔2〕内面化段階：

行為と主体を有機的に一体化（ラテン語など）。
母音交替（Ablaut）が活発に。

〔3〕抽象化・エゴ化段階：

人称（私・あなた）を独立した主語として文頭に置き、
思考を音から切り離す。
個我の目覚め（「汝自身を知れ」の実現）。

→ 高地ドイツ語は思考が音と並行して自由に飛翔する。
（文法の自由度が高い）
英語は音と思考がより一体化している（表現が硬直的）。

3) 具体的な言語現象の指針

Urteil（判断）：

自らを二つに引き裂き（teilen）、
根源（Ur）へとさかのぼって決断する魂の身振り。

sitzen（座る） vs setzen（腰を下ろす）：
内面と一体化する持続的な状態は母音交替（強変化）。
一瞬の外面的動作は子音的（弱変化）。

singen（歌う） vs sengen（焦がす）：
魂が一体化する行為は母音交替。
外から観察する行為は規則変化。

Wagen（車・単数） vs Wägen（複数）：
明確な意識で観察すると明瞭な「a」、
ぼんやりと見ると音が曇る「ä」（変音）。

verrückt（気が狂う）：
エーテル体の頭が肉体の頭から位置的に
「ずれる（verrücken）」という超感覚的直観の名残。

4) 教育への実践的指針（ヴァルドルフ学校教師へ）

授業は「特徴的な一つの具体例」から出発し、
そこから霊的な本質を展開しなければならない。
抽象概念の羅列（アトム化）は子供を唯物論に導く。

言語を「死んだ記号」ではなく、
生きた魂のドラマとして扱うことで、
子供の集中力と想像力を目覚めさせる。

教師自身の「自己教育」：

言葉の音の響きとイメージを再び一体化させる。

現代人は「生きている死体」のように抽象的に話している。

「Raute（ひし形）」の例：

幾何学記号ではなく、「rauh（ざらざらした角）」

という触覚的・魂的な身振りを子供に感じさせる。

●本文

いくつかの特徴的な具体例を通じて、言語発展の諸相を皆さんに示すことができたと思いますが、それらの例から、皆さんは「言語霊」の内的な歩みを、ある意味で見通すことができたのではないのでしょうか。

数々の言語現象とその発展の歴史を見通し、迷わず進んでいこうとするならば、こうした特徴的な現象の中から「導きの指針」を掴み取って理解することが不可欠となります。当然のことながら、私は皆さんにいくつかの点を示唆することしかできませんでしたし、本日もまた、これらの一連の考察の基礎を総括しながら、一つの主要な指針を提示することしかできません。しかし、そう遠くない将来に、この地で再びこれらの考察を継続できることを切に願っております。

私たちがこれまで行ってきた考察を通じて、皆さんが主に目撃することができた事柄とは、次のようなことでした。すなわち、「言語発展の原始的な段階において、人間は『音（響き）』と『事象（対象）』との調和（合致）に対して、内面的にきわめて感受性が豊かであり、内面的に活発に息づいていた」ということです。

その事象が「（内なる）感情」であろうと、「外側のプロセス（出来事）」、「外側の事物」、「外側の事実」であろうと関係ありません。人間が外側の世界に対して抱いた感情のために音を形成しようとするとき、その音は、最も広い意味において「母音（vokalisch）」として形成されます。

言語において「母音的」であるということは、内面において形成されたすべてのもの、内面において感じ取られたすべてのものを意味しています。そして、その感情のなかにあらかじめ与えられている「感情的、あるいは意志的な要素」の中から、自らを音の響きのなかへと押し進めていくのです。

したがって、すべての「母音（Selbstlaute：固有の響き）」、すべての母音的な形成のなかに、私たちは、「人間が外界に対して感じ取った感情や意志の衝動が、そのまま喉頭の中へと突き動かされて現れたもの」を見出さなければならないのです。

これに対して、すべての「子音（Konsonantischen）」のなかに、私たちは、「人間が外界において知覚した事象を、自らの『身振り』によって模倣・再現したもの」を見出さなければならないと思います。

例えば、人間がある「角度」を表現したいとします。その場合、彼はまずこの角度を直観的なイメージとして目の前に思い浮かべています。もし彼が自分の「手」を使って、その角度を構成する2つの辺をなぞるとするなら、彼はこのように手を動かすでしょう（※身体を使った身振りを実演する）。

これと全く同じ動きを、人間は特定の「子音」を形成する際、実際には自分の「発声器官」を用いて行っているのです。この関係性において、言語とは単に「身振り」が耳に聞こえる形になったものにほかなりません。ただ、その身振りは手足を使って外面的な空間で行われるのではなく、人間の組織のより微細な部分、すなわち人間に委ねられている「空気組織」を用いて形成されるのです。

皆さんがこの内的な法則性を掴み取るならば、言語がいかにして「外界をダイレクトに模倣しているか」、あるいは「人間が外界に対して抱いた感情的な体験をいかに模倣・再現しているか」について、次第にしっかりとした直観的なイメージを形成できるようになるでしょう。

例えば次のような状況を仮定してみましょう。人間が2つの客観的な事実に直面しており、あれもこれもできる、という岐路に立たされているとします。その際、彼はまず本能的に「あっちにすべきか、こっちにすべきか」と思索へと導かれます。

もしその人間が、——言語発展の原始的な段階にあるすべての人間がそうであるように——多かれ少なかれ「模倣する動物 (Nachahmungstier)」であるならば、彼が外界に対して結ぶその関係性は、いまだ手足を使った「外面的な身振り」へと移行します。彼はこのように動作をしてみせます (※身振りの実演を行う)。

彼は自らの右半身と左半身との間で「決断」を下すのです。つまり、2つの外的な事実が自らに迫ってきているがゆえに、自らの内面を「2つに分裂させる」ということを、身振りによって表現しているのです。彼は自らの内面を2つの部分へと引き裂き、自分の思考のより強い重みがどちらの方向へと傾くかを推し量ろうとします。

すなわち、彼はこのように行うのです (※身振り)。彼は「分かち (scheidet)」、「決定し (entscheidet)」、あるいは「分割 (teilt)」します。そして当然ながら、彼が (目先の利害に囚われず) 真に好ましい決断に到達しようとするならば、彼はできる限り遥か遠い根源へとさかのぼらなければなりません。

それゆえ、彼は自らを単に分割 (teilen) するだけでなく、自らを「根源 (Ur) へと引き戻して分割」するのです。こうして、私たちの「Urteil (ウーアティル＝判断／裁判／判決)」という言葉が生まれます。皆さんはこの「Urteil」という言葉を、内面的な身振りがそのまま音の響きへと変化したものとして、徹底的に理解しなければならないのです。このように、すべての「子音の形成」とは、単に音の構成へとメタモルフォーゼを遂げた「身振りの形成」にほかなりません。

この背景にあるダイナミズムは、言語発展の全行程を通じて追跡することができます。

最初、人間はより「外界の内部」に生きている存在であり、時間をかけてゆっくりと、ようやく「内面的な存在」へと変わっていきます。初期の人間はまず外界の中に生きています。彼はとりわけ、あの「根源的で原始的な霊視力」がいまだ存在していた時代においては、諸事物と完全に一体となって生きていました。

この完全に根源的・原始的な霊視力の時代において、人間は自分自身のことについてはそれほど多くを考えてはいません。彼は客観的な自己意識も持っていません。その代わりに彼は、今日の私たちが外面的な「モノ (物体)」と呼んでいるものの内部に、ありとあらゆる幽霊やありとあらゆる「エレメンタルな自然霊」が宿っており、それらを知覚しているのだ、ということを知っています。そして彼は、自分自身の内部にさえも、やはり一つの「エレメンタルな存在」を見ているのです。

彼は自分自身に向かって、「お前 (Du) という存在は、父親と母親によってこの地上世界へと引き入れられたのだ」と言います。彼は自分自身の存在を、いまだ（自然界の現象と同じように）客観的なものとして捉えているのです。

それゆえに私たちは、言語形成の最初のステップにおいては、言語霊がまず主に「子音的」に作用するのを見出すことになります。そして、原始的な言語というものは、主に「子音に満ちた言語」となるのです。なぜなら、原始的な人間には、いまだ「内面性」というものが欠落しているからです。

この根源的なステップの上に留まった原始的な民族たちは、それゆえ自らの言語のなかに、極めて豊かな子音の形成、すなわち、外界の事実を模倣・再現する要素をきわめて明瞭に指し示しているような、そんな子音の響きをふんだんに持っています。

例えば、人間の発声器官によって、まるで重い「鞭の音」がパチンと鳴り響くかのような音を直接的に生み出す、あの「舌打ちの響き (Schmalzer)」などがそれにあたります。特定の個別アフリカの民族たちがいまだ口にしているようなこれらの響きは、のちに人間が自らの感情に合致した「内面的な要素」を音の構成の中に顕現させるようになるにつれて、次第に消失していきます。

したがって、私たちは「子音の形成」のなかに、第一の段階（外界の模倣の段階）を見出さなければなりません。そして、その次の第二の段階が、あの「母音の形成（内面の表出の段階）」として見出されるべきなのです。

しかし、これらの母音の形成のなかで私たちの前に立ち現れてくる、あの内面性というものは、実は人類の歴史における一つの「通過点」にすぎません。のちに「言語霊」の内部において、再び「老年現象」が忍び込んでくるようになると、あの豊かな母音を響かせる力は再びストップしてしまい、今度は代わりに、言葉を単なる記号として「子音的に形成する力」が支配的になっていくのです。

したがって、人間が言語の発展において辿る道筋というものは、本来「外から内へ」、そして再び「内から外へ」と向かうものなのです。しかし、このように私たちが音の構成そのものを直接観察することのできる事象は、言語形成の全体を貫く「きわめて本質的な核心」をなしています。それは、言語にまつわるあらゆる形態のなかに私たちが再びそれを見出すことができるほどに、徹底して本質的なことなのです。

私たちはあらゆる場所において、まず次のような言語発展のステップに出会います。そこでは、人間はいわばまだ「自分を忘れた状態」であり、自らの言語を「無意識」のうちに創り出しています。そこにおける人間には、ある一つの対象を指し示す一本の言葉の「後ろ」に、別の言葉を外面からただ機械的に付け足そうとする衝動がいまだ息づいています。しかし、このステップにおける人間は、同時に「きわめて生き生きとした生命力」に満ちた存在なのです。

のちに人間が自らを内面化し、精神化（霊化）させていくにつれて、この原始的な生命力の一片は確かに失われていってしまいます。人間はより内面的になり、より生の具体性から遠ざかり、まさに「抽象的」になっていくため、かつて自らにとって外側のリアルな直観であったものを、のちに言葉そのものの内部へと流し込むだけの力を失ってしまうのです。その結果、彼はそれを外側から記号としてより多く「付け足す」ようになります。

——私たちはこうした現象を研究することができますが、それらを特徴的な具体例によって追跡していくことは、並外れて興味深いことです。

例えば、古高ドイツ語に「salbom（サルボム＝私は軟膏を塗る／私は油を注ぐ）」という言葉がいまだ存在していた頃の、人称を表現する変化（動詞の活用）をすべて順に見てみましょう。

salbom：私は油を注ぐ
salbos：あなたは油を注ぐ
salbot：彼は油を注ぐ
salbomes：私たちは油を注ぐ
salbot：あなた方は油を注ぐ
salbont：彼らは油を注ぐ

「salben（油を注ぐ）」という行為が活用される全6つの言葉のなかには、本来の動詞、すなわち「行為」そのものに属する部分として、常に「salbo-（サルボ）」という響きが存在しています。

そして、その動詞の後ろに付け加えられている部分こそが、言葉の内部において「人称の指定（誰がやっているか）」を成り立たせている要素なのだ、と私たちは常に見なさなければなりません。つまり、次のようになります。

「私（ich）」のためには：-m
「あなた（du）」のためには：-s
「彼（er）」のためには：-t
「私たち（wir）」のためには：-mes
「あなた方（ihr）」のためには：-t
「彼ら（sie）」のためには：-nt

これらの語尾の音の構成が、言葉のなかにいまだそれ自体として（独立して）残されているということは、次のように理解されなければなりません。

第一に、私、あなた、彼、私たち、あなた方、彼らという「（自己と他者の）対立関係」は、私たちがここで扱っているような原始的なステップにおいては、人間がそれを「きわめて外面的なもの」として眺めているという形で現れます。そのため、人間はその人称の要素を、行為を表現する本体部分の「後ろ」へとただ付け足すのです。

しかし、当時の彼は「内面的にはきわめて生き生き」としており、その人称の指定を、行為を表す言葉と「生命をもってダイレクトに一体化」させています。したがって、ここには次の2つの側面が考慮されなければなりません。

1）意識が「外側の具体的な事実（誰がやっているか）」へと向けられていること。

2）その人称の要素を、中心にある主たる単語自体の持つ「内なる生きた変容力（同化の力）」へと結合させていること。

本来の時代において、動詞（行為の言葉）の内部に、まるで一つの有機的な部品であるかのように——すなわち、すでに内面化された形として——「私、あなた、彼、彼女、それ」があらかじめ（頭の中で抽象的に）感じ取られていた「わけではない」ということは、次の事実からありありと見て取ることができます。

すなわち、これらの主たる単語の後ろに単純に「膠（にかわ）で貼り付けられた」だけのような人称の表現たちが、親縁関係にある古代のサンスクリット語においては、完全に「独立した単独の言葉」として厳然と存在している、という事実です。

なぜなら、古高ドイツ語の語尾にあるあの「-m」は、サンスクリット語で「私」を意味する「mi（ミ）」がメタモルフォーゼ（変音）したものすぎないからです。同じように、

「-s」は、サンスクリット語の「si（シ）＝あなた」の変容

「-t」は、サンスクリット語の「ti（ティ）＝彼、彼女、それ」の変容

「-mes」は、サンスクリット語の「masi（マシ）＝私たち」の変容

「-t」は、サンスクリット語の「tasi（タシ）＝あなた方」の変容

「-nt」は、単に少し足早に発音された、サンスクリット語の「anti（アンティ）＝彼ら」にほかなりません。

つまり、サンスクリット語の段階を眺めれば、そこでは主たる動詞の単語を内面だけでただ屈折させ、その「曲がったニュアンス（語尾変化）」の中に人称の指定を感じ取っているのではない、ということが今なお明快に分かります。いいえ、当時の人々は、自らの直観のなかに「人称の指定（具体的な相手の姿）」をはっきりと持っていたのです。

彼らは、この人称の指定（miやsiという独立したエネルギー）を、中心にある行為を表現する音の構成の内部へと「自発的に融合して一体に編み込む」ことができるほどに、「内面的な結合の）」を十全に持っていたのです。

これは極めて重要な違いです。なぜなら皆さんは、こうした原始的なステップにおいては、主に言葉を内面だけで屈折変化させているのだ、と簡単に勘違いしてしまいかねないからです。いいえ、そうではないのです。そこにあるのは、「行為の本体（動詞）」と「主体の存在（人称）」という2つの独立した構成成分を、力強くお互いに結びつけようとする「内なる生命の躍動」なのです。

したがって、行為（動詞の活用）というものは、本質的に「子音的な活動（外面の身振りを結合させる活動）」であり、決して「母音化する（頭の中だけで響きを変化させる）活動」ではありません。

のちに、ラテン語のような言語がさらに発達して、音の構成の「内的な組織」そのものの内部において人称の指定（語尾変化のニュアンス）を直接感じ取れるようなステップへと到達したとき、それこそが、該当する「言語霊」がより大きな「内面性」を獲得した段階に対応しているのです。

このようにして、「言語霊」は、かつての「外面性」から「内面性」へと向かって、ゆっくりと自らを登らせていくのです。

そして言語霊は、まず最初に、自分が外的な事実として知覚した事柄（人称の主体）を、言葉の「後ろ（末尾）」へとぶら下げるという方法でそれを執り行います。「salbo-m（油を注ぐ＋私）」、「salbo-s（油を注ぐ＋あなた）」というようにです。

それはちょうど、よ古い慣習の残る田舎のステップにおいて、人の名前を呼ぶときに「カール・マイヤー（Karl Meyer）」とは言わずに、「あのマイヤー家の、カールの奴（der Meyer-Karl）」と言う（※本家・職業という大きな全体を先に言い、個人の名前を後ろに付け足す）のと全く同様です。物事を細かく特定しようとする要素は、常に言葉の「後ろ」へと付け足されるものなのです。

ここでも事態はそれと全く同じであり、特定されたもの、すなわち人称の指定によって細かく特定された要素（私やあなた）が、動詞の本体の「後ろ」へと付け足されているのです。

まさに、この人称の指定（語尾の記号）を「後ろ」から取り除き、それを一つの独立した言葉として「前（主語の位置）」へと付け足すこと、これこそが「究極の内面化」へと向かう道であり、内なるものを精神的・抽象的に知覚するあの内面化へと至る道筋なのです。そこでは、人間は人称（主体）を動詞から切り離し、それを前に据えるようになります。

皆さんは言語から、一つの極めて重要な歴史を読み取ることができます。言語霊のあの原始的な形態へと立ち戻るなら、そこでは言語霊は、外側の具体的な事物から完全に切り離された「私 (Ich)」や「あなた (Du)」というものを本来何も知りません。当時の言語霊は、この「私」や「あなた」について語るべき事柄を、いまだ動詞の本体のなかに（一体のものとして）力強く押し込めているのです。

その状態を、言語霊は言葉の内部そのものに見出します——このステップに位置している代表的な言語が、まさにラテン語です——。そしてのちに、人間はそれを言葉の内部から外へと引き出し、「自己凝視 (Selbstschau = 自己を客観的に見つめること)」へと至り、「エゴイズム (Egoismus = 個我の目覚め)」へと至ることで、ついに「私」や「あなた」を言葉の前に据える（独立した主語にする）ようになるのです。

この「エゴイスト（個我）になること」、この「自己凝視へと至ること」こそが、根本的には言語の発展の歴史の中に極めて明瞭に映し出されているドラマにほかなりません。

ある種の下意識的なステップにおいて、アポロンの神託である「汝自身を知れ (Erkenne dich selbst)」という言葉は、その後に続く西欧の言語発展を通じて実行されてきたのだ、とすることができます。西欧の言語史は、内面的なものを表現してはいたものの、いまだ内面の内部から完全に独立しきれていなかったあの語彙の構成の内部から、あらゆる場所において「人称の指定（独立した主語）」を外へと力強く引き出してきたのです。

皆さんが言語を研究しようとするとき、昨日私がすでに申し上げたこと、すなわち「言語を、魂の発展（意識進化）の現れとして考察する」ということを実践しない限り、言語を本当に理解することは絶対にできません。

私たちは今なお生きている言語のなかに、いわば「母音化する威力（内面の響き）」と「子音化する威力（外面の模倣）」の名残を、完全に追跡することができます。

動詞（行為の言葉）の内部には、それらがそもそも、より「母音的なキャラクター」を帯びるようになるための何らかの要素が横たわっており、それゆえに動詞においては「母音」こそが主役となります。ほんの少し思索を巡らせてみるだけで、皆さんは自分自身にこう言うことができるはずです。

「人間が、いわばその内部に身を投じて生き、自らをそれと一体化させるような事柄を表現するあの動詞（行為の言葉）においては、内面的に感じ取られる『母音的なもの』こそが主役になるはずだ」と。

皆さんの魂が「今この瞬間」置かれている内的な状態と、それほど遠くない「少し前」に置かれていた魂の状態との間には、明らかな違いがあります。

今、皆さんは席に座っています（Sie sitzen）。そして、すでにかかなりの時間、座り続けています。この「座っていること（sitzen）」という言葉が表現している事柄と、皆さんは自らを完全に一体化させています。この「座っていること」は、皆さん自身と極めて内面的に結びついている事態なのです。

皆さんがこの「座っている」という状態に到達できたのは、皆さんが最初に「腰を下ろした（Sie haben sich gesetzt = 動詞 setzen）」からです。この「腰を下ろす（setzen）」という一瞬の物理的な動作に対しては、皆さんはそれほど内面的には一体化しておらず、それは皆さんにとって、より「外面的な（物理的な）事象」です。

皆さんは、30分間ずっと「腰を下ろし続ける」ことはできません。なぜなら、その腰を下ろすという身振りと、自らの内面をあれほど緊密に一体化させることはできないからです。しかし、皆さんは30分間、あるいはそれ以上のあいだ「座り続ける（sitzen）」ことはできます。なぜなら、「座っている状態」とは、皆さんが自らの内面と深く一体化させることができる事態だからです。

まさにその通り（人間の超感覚的な必然性）であり、それゆえに「座っていること（sitzen）」を表す音の構成は、皆さんによって「母音的（強変化の美しい母音の響き）」に感知されなければならず、これに対して「腰を下ろすこと（setzen）」を表す音の構成は、より外面化された「子音的（弱変化の乾いた響き）」なものとして感知されなければならないのです。

皆さんがこれを母音的なものとして感知するとき、皆さんは言語霊の内部から、言葉を母音化させるための「内的な力」を自発的に獲得します。そして皆さんは、その言葉を状況に応じて様々に変化させながら、豊かに母音を響かせる（母音交替を行う）ことになるのです。すなわち、「sitzen（座る） — saß（座った） — gesessen（座っていた）」というように。

これに対して、皆さんが「腰を下ろす（setzen）」という言葉を通じて表現する、あの（一瞬の物理的な）子音的な活動を遂行する際には、皆さんは完全に子音的（記号的）になり、この「setzen」という言葉を、例えば「satzen（ザッツェン）」などといった（豊かな母音変化を伴う形に）変化させるようなことは決してしません。そこでは、皆さんは一つの「外面的な事実」をただそのまま模写しなければならず、まさにそれゆえに、ただ乾いた音で「setzen」と言うほかないのです。

そして、皆さんが「それは少し前のことだった」という過去の事実を表現したいときには、当時の古代人はこう言いました。「setzen-tat（セッツェン・タート = 腰を下ろす、ということを“行った”）」と。

「自分は腰を下ろすという行為を行う（tun）」というわけです。そして、この「setzen-tat」が、のちのメタモルフォーゼ（音の融合）によって、現代の過去形である「setzte（ゼッツテ＝腰を下ろした）」という形になりました。なぜなら、過去形をつくる語尾の「-te」とは、本来、行為（行う）を意味する「tat（タート）」が変容したものにほかないからです。

現代において、このような「言葉を創造する力（語源のみずみずしい知覚）」を今なお自らの内部に保持している人々（田舎の農民など）のなかでは、こうしたケースにおいて、今なお「子音化（具象的な貼り付け）」が行われています。それは、古い時代から引き継がれた子音化の身振りで。

しかし、こうした人々は、社会の一般的な大衆に比べれば、より「原始的な（素朴な）教育段階」に留まっている人でなければなりません。このような人々は、現代においても、言葉を（頭の中だけで）母音化させることをできる限り拒み、その代わりに、外面的な活動や外面的な事実のありようを、音の構成の内部においていとも見事に模倣・再現するだけの素質を、今なお自らのなかに豊かに備えているのです。彼らは、「行

う (tun) 」という言葉と、行為の本体とを、文字通り外側から「ガチャンと結合させる（貼り付ける）」ことによって、物事を表現するのです。

皆さんは、このことを次のようなおもしろい例の中に目撃することができます。

ある少しばかり素朴な田舎の農夫がいました。彼は、自分の息子を大学に通わせて勉強させていることを、自らの大いなる誇りとしていました。あるとき、彼は周囲の人から「息子さんは大学で一体何をしているのかね？」と尋ねられました。

この息子は、大学生活の持つあの「抽象的で精神的な世界」へと深く分け入るために、父親から受け継いだあの素朴な遺産（学費）を使ったのではなく、どちらかと言えば、大学生活の「外面的なお遊び（放蕩生活）」のなかに完全に没頭してしまっていたのです。

そこで、父親は「息子さんは大学で何をしているのか？」と尋ねられたとき、その農夫の持つ古い（生々しい）言語形成の身振りから、次のように答えたのです。

「散歩すること、あいつはそれを“する (Spazierengehen tut er) ”！
ぶらぶらすること、あいつはそれを“する (bummeln tut er) ”！
大酒を飲むこと、あいつはそれを“する (saufen tut er) ”！
悪ふざけをすること、あいつはそれを“する (Allotria tun tut er) ”！
……だがな、まっとうに働くこと、それだけはあいつは何も“しやしねえ (aber tun tut er nichts) ”！」と。

ここには、言語を形成する動詞（行為の言葉）の中へと移行していくあの「内面性」に対する、肌で感じる質感が存在しています。

今日でもなお独自のキャラクター、とりわけその「意味のキャラクター」を色濃く保持している音の構成に接するとき、皆さんは次のことを常に感じ取ることができるはずです。すなわち、いわゆる「母音交替 (Ablaut : アブラウト) 」を行うもの、つまり動詞の活用の際に自らの内部の母音を美しく変化させる言葉とは、人間が「自らの内面と、より深く一体化させている事象」を表現しているのだ、ということです。

これに対して、内面において形づくられはするものの、人間が自らの内面とはそれほど緊密に一体化させない事象——すなわち、人間にとって「身をもって感じられるもの」とはならず、単に「外から眺められるもの」ととどまる事象——を表現する言葉においては、人間はあの母音交替を発達させることができません。

例えば、皆さんが「ich singe (私は歌う) — ich sang (私は歌った) 」と言うとき、そこにはあの（美しい）母音交替が存在しています。

しかし、皆さんが「ich senge (私は焦がす) 」と言うときは、事態は全く異なります。この「senge (ゼンゲ＝焦がす) 」という言葉がこのような音の構成を持っている理由は、本来「火が“歌って (singen) ”いる」からなのです。「Ich senge (私は焦がす) 」とは、本来「私は何らかの対象を（火によって）歌わせる (ich mache irgend etwas singen) 」という意味なのです。

皆さんが自ら「歌う (singen) 」とき、皆さんはその音の構成を通じて表現しようとする事象と、自らの内面を（魂の底から）一体化させています。しかし、皆さんが何かを「焦がす (sengen) 」ときには、皆さんは自らの内面をそれと一体化させてはいません。皆さんは、自分自身の外面的な行動を外から客観的に眺

めているだけなのです。それゆえに、この言葉は決して母音交替を行うことはなく、「ich senge — ich sengte（私は焦がす — 私は焦がした）」という（乾いた規則的な）形をとるのです。

現代の私たちがこうした事象をもう（日常の言葉のなかで）意識できなくなってしまう場所では、単に言葉がそれほど強力に変容を遂げてしまったがゆえに、もはや表面からは見えなくなってしまうのにすぎません。その場合は、その音の構成のさらに古い時代（語源の層）へとさかのぼらなければならないのです。

人間がまず最初に「外界と一体となって生きていた」という歴史、その後に訪れた「内面化の段階」、そして、人間が言葉を用いて「自分自身の内面そのもの」を指し示す（表現する）ようになった次の内面化の段階——例えば「人称代名詞（私、あなた）」の誕生——という、これら「3つのステップ」を現実にしかりと追跡できるということは、本当に計り知れないほど重大な意味を持っています。

そして皆さんが、この「導きの指針」を観察することに自ら深く入っていくならば、言語の形成に対する理解というものは、並外れて容易なものとなるでしょう。

言語というものは、このようにして、真に人間における「思考の要素」と「意志の要素」の合流点（結節点）となるのであり、言語の原始的なステップにおいては、音の響きがいまだ表象と極めて緊密に結びついているがゆえに、思考的なものと意志的なものとを区別することさえ困難なほどなのです。

私たちの現在の話し方、とりわけ私たちの「高地ドイツ語（標準ドイツ語）の話し方」は、実はすでに、並外れて強力に「意志（W i l l e）」へと縛りつけられたものになっています。私たちは「意志をもって」話しているのであり、言葉話すことを学ぶ中で、いわば習慣としてその意志を駆使することを学んでいるのです。そして、私たちはこの話す行為に対して、私たちがそれらの意志の表出と結びつけることに慣れ親しんできたあの「表象」を、背後から随伴させているのです。

英語においては、事態は今なお全く異なっています。したがって、こうした事象を先入観なく観察することのできる人間からするなら、高地ドイツ語を話すということ——方言の数々は、高地ドイツ語よりもいまだ英語の方に遙かによく似ているのですが——は、偏見のない目で見れば、英語を話すということとは、実は「人間の営みとして全くの別物」なのです。

英語を話ということは、話すことのなか、すなわち「発声していくその行為そのものの内部において同時に『思考』されている」ような、そんな性質をいまだ多分に色濃く残した活動です。

これに対して、高地ドイツ語を話すということは、音を展開していくその行為の内部においては一切思考されておらず、「思考というものは、音の展開とは随伴する独立した現象として、その傍らを並んで歩んでいる」ような、そんな活動なのです。

総じて、西欧の言語（英語やフランス語）は、中央ヨーロッパの言語（ドイツ語）に比べれば、音の響きと表象との間の、あの「本能的な一体感」を、はるかにより多く自らの内に保持してきました。そしてまさにそれゆえに、西欧の言語は文法や表現の面でこれほどまでに「硬直した（融通の利かない）形式」を身にまとうことになったのです。

西欧の言語においては、誰かが何かを定式化して表現しようとするとき、「そんな言い方はできない、そんな風に自分を表現するものではない」と周囲から規則を盾に言われることなしには、ほとんど何も表現することができません。

これは、高地ドイツ語（標準ドイツ語）においては、そのような形では存在しない事象です。ドイツ語においては、人間はほとんど「あらゆること」を自由に言うことができます。主語を文頭のここに置くこともできれば、あるいは文末のあそこに置くこともできます。なぜなら、ドイツ語においては、思考というものが西欧の言語よりもはるかに、音の構成とは「独立」して進んでいくからです。

ただ、私たちが自らの言語形成のより古い段階へとアプローチしていくときにのみ、私たちは表象と音の構成との間の、あの「厳格な結びつき」へと、ますます多く立ち戻ることになります。それゆえに私たちは、自らの言語のより古い段階や「方言」を研究することによって、西欧の言語においては今日でもなお一種の「先祖返り」として厳然と存在しているあの事象を、まさに自らの手で（目の前で）研究することができるのです。

皆さんがこのような観点から、生き生きとした言語感情をもって言語を研究するならば、それは同時に、皆さんを民族魂の本質の最深部へと深く連れ戻してくれることになります。

例えば、私たちの前に一つの客観的な事物があると仮定してみましょう。原始的な人間である私たちは、子音の要素と母音の要素の中から、この対象を表す音の構成を形づくります。すなわち、前へと進み走るあの事物に対して、私たちは「Wagen（ヴァーゲン＝車／馬車＝単数形）」という言葉を作ります。

この同じ事物を、私たちの前に「複数」並んでいる状態で目にすると、私たちはその複数を、「die Wägen（ヴェーゲン＝複数形）」と言うことで形づくります。「die Wagen（※現代標準語の複数形）」と言うのも確かに文法的には正しいのですが、それは本来、言語の有機体の内部から形づくられた形態ではなく、どちらかと言えば「書き言葉（標準語）」に属する人工的な形態にすぎません。

では、なぜ私たちはここで「変音（Umlaut：ウムラウト：aからäへの変化）」を形づくるのでしょうか。

私たちは、あの単数形（Wagen）のなかに音の構成を形づくりましました。そのとき、言語形成における私たちの「意識」がそこに点火され、活発に息づき、私たちはその単数形の対象（目の前の一台の車）へと明確に注意を向けていたのです。

ところが、そこから複数形を形づくるときには、私たちはその事実の全体（目の前にあるたくさんの車）をそれほど（一台ずつのレベルでは）明確には見渡していません。そこでは、私たちはその事象をいくぶん霞んだ、ぼんやりとした（nebuloser）形で表現したいという内的な要求を抱くのです。その結果、私たちは「a」という本来の明瞭な音を、少し曇らせて「ä」の音へと「退化（trüben）」させるのです。

このように、本来の根源的な音の構成というものは、ある事実や感情を「正常な意識」をもって注意深く観察しているときにこそ、常に形づくられます。そして、その後に訪れる、それほど注意深く観察されない（あるいは観察することができない）事柄は、音が「曇る（変音する）」ことによって指し示されるのです。ここで重要となるのは、人間の内部において、ある種の知覚の「置き換え」がどのように行われているかを目撃することです。

ドイツの多くの地域の方言では、「der Wagen（単数）」とは言わずに、「der Wogn（ヴォグン）」と言います。もし、音の構成を形づくる際の正常な注意力のあり方が、「o」の響きをもって応答するような性質のものであったなら、その複数形における音の曇り（変音）は、ただ単に「die Woagn（ヴォアグン）」

と発音されることで表現されるのです。皆さんは、こうした現象をきわめて一連の言語現象のなかに追跡することができます。

最後にもう一つだけ、皆さんの注意を向けておきたいことがあります。

古い時代における子音的な言語形成の多くは、完全に「目に見える情景」に基づいています。そして、かつて人間の魂が感じ取り、自らの心の佇まいのなかに受け入れた事柄の多くは、素朴な民衆の心のなかに今なお保存されており、そこで研究することが可能なのです。

しかし、この直観というものがとりわけ生き生きと躍動していた時代、それは単に外面的な世界を眺めるという「肉体的な五感の視線」だけに縛られていたのではなく、まぎれもなく一種の「原始的な霊視力」と深く結びついていました。そうでなければ、現代の私たちが——神に感謝すべきことに——いまだ奇跡的に保持している、あの「ありありとした超感覚的な直観を湛えた言葉の名称」の数々など、この世に到底生まれ得なかったはずなのです。

一つの例を取り上げてみましょう。根源的な感覚を持っていた太古の人間は、——どれほど微かで素朴なものであったにせよ——あの「かつての古い性質を残した霊視力」の領域のなかにいまだ身を置いていました。彼は、人間の肉体の内部に、今日の私たちが「エーテル体」と呼んでいる何らかの輝く実在が宿っているということを、ありありと感じ取っていました。

したがって、原始的な人間は、物理的な「頭」を知覚すると同時に（※黒板に人間の頭の図をドローイングする）、——その肉体の頭からはみ出して、その周囲を上方へと包み込んでいる——第二の（エーテル的な）頭」をも完全に感じ取っていたのです。

彼は、その頭というものを「思考」の表現として感じていました。それゆえに、私たちの言葉（ドイツ語のMensch）と極めて親縁関係にある古代の名称を用いて、次のように言うこともできます。「原始的な霊視力を持っていた太古の人間は、人間のことを『思考』という出発点から命名したのだ」と。皆さんはそれを、サンスクリット語で精神・思考を意味する「manas（マナス）」という言葉の中に保持しており、これが私たちの「Mensch（メンシュ＝人間）」という言葉になったのです。「Mensch」とは「manas（思考する存在）」にほかなりません。

さて、これは私たちが日常のなかで普通に会える人間のことです。ところが、あの退行的な霊視力を持っていた古代の人間は、私たちが時として「別種の人間の佇まい」に出会うことがある、という事実をもリアルに知っていました。

——ここで私はもちろん、決して俗悪に解釈してはならないような、ある種の「ユーモア」を交えて語っているのですが、——そのような別種の人間の佇まいにおいては、この「超感覚的な人間（エーテル体）」が、肉体という五感的な人間のなかに、お行儀よく綺麗に結び合わされてはおらず、どういうわけか、もう一方の肉体の内部にうまく「収まっていない」のです。

その情景を目にしたとき、古代人は次のように感じ取りました。「この人のエーテル体は、“位置がズレてしまっている（verrückt = フェルリユクト）”」と。

この「エーテル体の位置が物理的にズレている（verrückt）」という超感覚的な事実そのものが、のちにその人間の存在全体へと移し替えられ、現代語の「der Mensch ist verrückt（あの人は“狂っている”）」という言葉になったのです。

ここには、完全に超感覚的な世界の事実——すなわち「エーテル体の位置のズレ（Verrückung des Ätherleibes）」——が、そのまま言葉の形としてありありと表現されています。

そして、かつて人間が「精神（霊）的な実在をまっとうに観察（霊視）することができた時代」の直観へと私たちを連れ戻してくれる、まさにこの種の「ありありとした直観性（イマジネーション）」こそが、並外れて興味深いものなのです。

もし、世の中の人々がこのことを実践するならば、また、あの学者ぶった言語学者たちが、根本的には単なる外面的な唯物論のやり方に終始し、外面的な言語形成のなかにその「外なる表現」を見出しているにすぎないあの「内なる魂的なもの（言語霊の生命）」へと一切深く分け入ろうとしないあのような「深い眠り」から真に目覚めるならば、言語学という科学は、自ずからまず第一に「魂の科学」へと、そして最終的には「精神の科学（霊科学／人智学）」のなかへと、自ずから引き上げられていくことになるはずなのです。

だからこそ、私たちの現在の言語学が、これほどまでに味気ない「唯物論」へと成り下がってしまっていることは、本当に惜しまれてならない悲劇的なことなのです。なぜなら、その唯物論のせいで、現代の若い学生たちには、言語の形成とその認識を通じて、「魂と精神（霊）」がこの地上でいかに生き生きと働き、作用しているか」というその奇跡のドラマを観察する機会すら、もはやこれっぽっちも与えられていないからなのです。

自由ヴァルドルフ学校の教師である皆さんにとって、私がいくつかの具体例を通じて提示しようとした「指針」は、皆さんがそれを自らの「魂の佇まい」のなかに受け入れるならば、今この瞬間からすでに有益なものとなり得ると、私は確信しています。

第一に、この指針は皆さんに言語の多くの側面に気づく刺激を与えるでしょう。皆さんがこうした考察方法の「精神」を自らの中に受け入れるならば、授業のなかでそれを極めて多様な方法で役立てることができるようはずです。これは、皆さんと子供たちとの間で完全に実践に移すことができます。なぜなら、「話すこと」こそが、授業における人間同士を結びつける媒介だからです。

とりわけ、自分自身の手で、言葉のなかに「本来の根源的な感情の強さ」や「ありありとしたイメージ」を再び呼び込もうと努めることは、皆さんを強力に支えてくれます。これによって人間は、普段発達させているよりも、はるかに生き生きとした感情（知覚）へと自らを教育することができるのです。

現代の私たち人間は、実はかなり「生きている死体」としてあちこちを歩き回っています。そして、そうなっている小さからぬ原因は、私たちの言語が、かつて宿っていた「ハート」からどこか遠い場所へと完全に転落してしまったからにほかなりません。言語は「無意識的な意志要素」になり下がってしまったのです。

音の響きに、そこにどのような魂的なものが横たわっているかをもう全く感じ取ることができません。同じような音の響きに対して、魂の側からも同じように生々しい感情を自らの中に浸透させる、という自己教育を私たちは実践していないのです。私たちは物事を理解し把握することにおいて抽象的ですが、同時に「話すこと」においても完全に抽象的（記号的）なのです。

本当に生き生きとした言語感情を持っている人間からするなら、現代の人々が話している事柄の多くは、まるで「蓄音機」が再生する音声のようです。そのレコードの溝は、遙か太古の昔にすでに刻み込まれたものであり、現代人はそれをただ機械的に再生しているにすぎません。

私たちは、*「再び自らを言語と（血の通った形で）結びつけること」ができなければならないのです。

もちろん、そうなれば次のような一種の「自己教育」が不可欠となります。私たちが「rauh（ラウ＝粗い）」と言うとき、自らの内なる声に耳を傾け、この「rauh」という音の構成を内面的（身体的）に深く感じ取る、ということです。

そして、私たちがこの図形（ひし形）を観察しながら「これはRaute（ラウテ＝ひし形）だ」と言うとき、私たちはこの「rauh（粗い）」という響きを、まさに私たちがザラザラしたもの（Rauhen）に対して感じるあの質感、すなわち「尖った角（かど）」を知覚すること」として感じ取ることができます。

そうなれば、現代の私たちであっても、このような図形を目にしたときに、その「角ばっている性質」を、あの「rauh」という質感と同源のものとして（肌で）感じ取るレベルへと、自らを高めることができるでしょう。そして、後ろの「-te」は、行為を表す「tat/tut（～を行う／～である）」として感じられます。すなわち、「角ばって、ザラザラした身振りを“行っている”もの（dasjenige, was rauh tut）」こそが、「Raute（ひし形）」の正体なのです。

もし私たちが、言葉の「音の構成」と「表象」をこれほどバラバラに解体させてしまわないならば、授業の中に「目に見えない本質的なもの（計量不能な霊的空気）」を展開するための、強力な要素となるでしょう。

お聞きしますが、私たちが子供と一緒にこの図形について語り合うときに、ただ「これはRhombus（ロンブス＝数学用語のひし形／斜方晶系）だよ」などと言ったとして、一体そこにどれほどの「生きた空気」を感じ取ることができるのでしょうか。——私たち自身、「Rhombus」と口にするとき、自らの内側には何一つ（生々しい生命を）感じてはいないのです。

もし私たちが、言葉の音の構成そのものから出発して、自分自身をもう一度（生きた言語へと）教育し直し、さらに「子供たちをもこの方向へと教育したい」という切実な要求を抱くようになるならば、授業の根底を支える「子供たちの注意力」のために、どれほど強固な土台を発展させることができるのでしょうか。

以上の事柄は、私がこの数時間のなかでさしあたり皆さんに示唆しようと試みた、言語に対するこうした直観から、皆さんが自らの「自己教育」の内容として獲得しうるすべての事柄に関連しています。

しかし、親愛なる皆さん、私は皆さんに対して「方法論」をも提示しなかったのです。私の念願は、特徴的な「具体的な例」を出発点として、重要な「指針」をダイナミックに発展させることにありました。

おそらく、現代のどこかのまっとうな大学教授であれば、私がこの数時間の中で皆さんに展開した内容を、優に「全3巻の大著」として仕上げるができるでしょう。その教授は当然ながら「網羅性（完全性）」を追求するはずですが、その結果として、私たちの思考、私たちの表象、私たちの感情を真に刺激してくれるようなあの「主要な指針」がそこから導き出される可能性は、はるかに低くなってしまいうでしょう。

皆さんが「初等教育」の段階において、まさにここでこの言語コースが実践してきたのと全く同じ方法でアプローチするならば、皆さんは優れた方法論的原則を発展させることができます。そうなれば、皆さんはあらゆる授業において、生徒たちに提示したい事柄のために、「本質を射抜いた具体例」を自ら探し求めるようになり、その特徴的な具体例を「観察すること」や「感じ取ること」を、その具体例の背後にある「精神（霊）的なものを知覚すること」へと、美しく結びつけることができるようになるでしょう。

なぜなら、子供たちに対して「抽象的な授業」を行うことほど、子供たちを真っ直ぐ「唯物論」のなかへと突き落とすための格好の手手段は、この世に存在しないからです。

「霊的な授業」というものは、常に「具体的な例」を通じて行われます。ただし、その際には、それらの具体的な例の内部において、「魂的なもの」と「精神（霊）的なもの」が自らを（子供たちの前に）生き生きと開示するのを見落としてはなりません。

それゆえに、私がここで皆さんに提示した内容は、ヴァルドルフ学校の授業が始まる前に私が皆さんに提供したあの教員養成講座（※『教育の基礎としての人間認識』などのこと）を、実践的・方法論的に補完してくれる「優れた姉妹編」になり得ると、私は確信しています。

そして皆さんが、次のように自問自答してみるならば、そこから非常に多くのものを獲得できるはずです。「子供の目線へと翻訳されたこのアプローチを、自分自身の授業の中にどのように組み込めばよいだろうか？——これは、あらゆる教科においてそのように設定することができるのです——。個々の具体的な例のなかに、どのようにしてこの『精神（霊）的なものを引き寄せるダイナミズム』を再現すればよいだろうか？」と。

皆さんがこれを実践するならば、ほぼすべての授業が陥ってしまうあの最大の危機、すなわち「教材・カリキュラムが時間内に終わらない」という危機に直面することは、もう容易には起こらなくなります。

カリキュラムがいつも終わらなくなってしまう唯一の原因は、その教材をバラバラの「アトム（断片的な知識の死骸）」へと解体（原子化）してしまうからです。アトムに解体してしまうと、人間は、自分が扱っている個々のアトムから「特徴的な本質」を奪い去ってしまい、ただそのアトムを「大量に積み重ねる（暗記させる）」ことによってしか、本質を浮かび上がらせることができなくなるという最悪の誘惑に駆られてしまうのです。

当然ながら、どのような学習分野にも、本質を現していない「味気ない具体例」というものが存在します。そのような例を扱うとき、教師は大量の知識をただ一本の鎖のようにつなぎ合わせ（羅列し）続けなければなりません。

しかし、もし教師が「特徴的な具体例（本質が丸ごと凝縮された一例）」を丁寧に選び出し、その一例を出発点として「スピリチュアルなもの」を発展させる労を惜しまないならば、授業の中に、ある種の「優れた経済性（最小の例で最大の成果をあげる教え方）」を達成することができるのです。

親愛なる皆さん——とりわけ、ここにいる自由ヴァルドルフ学校の教師である皆さんに、心からの友情を込めて申し上げます——、この即興で行われた数時間の講義の中で、次の「二重のメッセージ」が皆さんの心の中にしっかりと刻み込まれたとするなら、これに勝る喜びはありません。

1) 言語霊とのある種の「一体化」を結ぶことを通じた、「自己教育」への大いなる刺激。

2) 授業の「方法論」が、いま最後に暗示されたような（最小の具体例から壮大な本質を呼び覚ますという）意味において、いくばくかの善い影響を受けること。

それでは、私が再びこの地に戻ってきたとき——願わくばそう遠くない近い将来に——、こうした言語の考察をさらに継続していくことにいたしましょう。